
魔法少女まどか マギカ × オルフェノク-みんなで起こした、奇跡だよ-

Light or Dark

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法少女まどか マギカ×オルフェノク - みんなで起こした、奇跡だよ -

【Nコード】

N4011X

【作者名】

Light or Dark

【あらすじ】

南あかりは、見滝原中学校に通う平凡な女子中学生。勉強はあまり得意じゃないけれど、持ち前の明るい性格も相まって楽しい学校生活を送っていた。

だがとある出来事を境に、彼女の毎日は一変する。

願い。呪い。死。再生。破壊。逃走。激突。種族。進化。王。謀略。

宇宙。破滅。夜。

恐怖。嫉妬。孤独。妄執。代償。

奇跡。魔法。

命を失い、死と再生の力を手にした少女は、滅びと嘆きを前にして、何を思うのか――

もしも『魔法少女まどか マギカ』の世界に『仮面ライダー555』の『オルフェノク』が存在したら。

これは、そんなifストーリー！

この作品に『仮面ライダーファイズ』『カイザ』『デルタ』『サイガ』『オーガ』『ライオトルーパー』および本編のメインキャラクターの登場する予定はありません。

あくまで『魔法少女まどか マギカ』を中心としたストーリーです。オルフェノク成分が少なくなる可能性があります。

両作品とも原作を知らなくても大丈夫なように書いていくつもりですが、説明不足や設定改変は数多く現れる可能性があります。

プレリユード（前書き）

爆死覚悟の新作投稿です！！

こんな駄文でよろしければ感想・誤字報告をお願いします。

プレリュード

光は、常に影をもたらず。

光が強くなれば、闇もまたより濃さを増す。

その光が強ければ強いほど、闇への落差は大きくなる。

希望もまた同じだ。

とてつもなく大きな希望——いわば”奇跡”と呼ばれるものがもたらす絶望は、果てしなく巨大。

影はどんな状態の時、もっとも長く延びるだろうか。

答えは、光源が1つしか無いときだ。

光源が2つ、3つと増えてゆくほど、闇はより小さくなる。

1つの光が生み出す闇を、もう1つの光は打ち消すことができる。

希望もまた同じだ。

1つの希望から生まれる絶望は、もう1つの光で消せばいい。

1つの希望で、すべての絶望をかき消すなど不可能だよ。

1人で抱え込んではいけない。

1人で解決しようとしてはいけない。

すべての方向から光で照らせば、闇は限りなく小さくなるように。幾多の希望が集まれば、絶望を封じ込めることも不可能ではないはずだ。

君も、そう思うだろう？

恐怖、嫉妬、孤独、憎悪、犠牲。世界はそうした”呪い”に満ちている。そんな世界は一見、救いようのない病に冒されているかのようだ。

だが、”呪い”は”願い”から生まれる。もし呪いで世界を満たすことができるのなら、きっと願いで世界を満たすこともできるはず――

これは1人の少女、”南あかり”と、とてつもなく大きな絶望に立ち向かった彼女の仲間たちが起こした、小さな奇跡の記録である。たった1人の願いが、世界を救うと信じて――

「わたし、あなたと契約して本当によかったと思ってるよ」

第1幕『いっしょに、いっしょ』（前書き）

続きまして第1話です。

『オルフェノク』の存在は少女たちの未来にどんな影響を及ぼすの
だろうか……

第1幕『いつしょに、いつしょ』

雀がさえずりながら空を飛び、背景の空は雲一つ無い清々しい快晴。空は抜けるように青い。街路樹の周りに舞うアゲハチョウの黄が、新緑と鮮やかなコントラストを見せる。

街と自然が美しく溶け合う街、見滝原市。その中心部にあるとあるマンションのとある一室にも、そんな美しい朝が訪れた。

昨日の夜寝る前にあけておいた窓から柔らかな風が吹き込み、ふわりとカーテンが揺れた。その隙間から漏れた朝日が、その部屋で眠る1人の少女の頬をなでる。

灰色ががったベリーショートの髪型と美しくも気の強そうな顔立ち、彼女に美少女というよりは美少年といった印象を与えている。だが可愛いパジャマのチョイスや部屋に並べられたぬいぐるみや少女マンガの類は、間違いなく年頃の女の子のものだ。

「ふあっ……？」

まぶたが僅かに震え、その少女、南あかりは薄く目をあけた。大きなあくびをしながらのびをする。眠い目をこすりながら、あかりはパジャマに包まれた自分の体を無理矢理ベッドから引きずり出す。

「んっ、と……」

まだ視界が薄ぼんやりとしたままの目で、部屋の隅にかかっている時計を見る。

現在時刻、午前七時半。 彼女の中学の登校時刻、午前八時。

登校時刻まで、あと30分。

「って、やばあああああいつー!!」

あかりは全力で部屋を飛び出し、トイレの隣にある洗面所へ飛

び込む。半ばぶつかるように洗面台に立つと、蛇口の設定を『シャワー』にして、顔面に向けて吹き付ける。

——よし、洗顔終了。

洗面所を出ながらパジャマを脱いで洗濯機に投げ込み、パンツとキャミソールという下着だけの格好のまま台所へと駆け込む。

——洗濯は帰ってからでいいや。

寝坊用に、と軽い食べ物を積んである棚から食パンとバターを取り、パンをトースターへとぶち込むと、タイマーを一分に設定する。

——タイムアタック、スタート。

全力ダッシュで寝室へ戻るとクローゼットから自分の中学、見滝原中学校の制服を取り出す？。素早く上のシャツを羽織り、スカートをはく。

——あつ、後ろ前じゃん！！

あかりはスカートをくるりと回し、ホックを前に持つてくるとしつかりと止め、先ほど制服をクローゼットから取るときに床に落としたリボンを拾って頭からかぶる。こんな時のために輪っかにして縛っておいてあったのだ。リボンの両端を引っ張って長さ調節すると軽く捻って角度を整える。そして胸ポケットに手をつ込む。

——生徒手帳、よし。

壁際に置いてあるスクールバッグをむんずと掴むと、再び台所へとダッシュ。もちろん、パンはすでに焼けている。しかもすぐ食べれるくらいさめているだろう。何度も遅刻寸前になっているうちに見つけた、ぴったりの時間にセットしておいたのだ。あかりがパンをくわえようとすると、ふと隣に置いておいたバターが視界に入った。彼女はバターが塗ってあるトーストの方が好きなのだが、塗って食べている時間はないだろう。名残惜しそつに見つめながらも、諦めて台所を後にした。

台所からわずか3メートルも離れていない玄関のドアだが、あかりがそこについたときには、すでにパンを4分の1くらい食べ終わ

っていた。靴箱の上に置いてある家の鍵を取り、ローファアを履いて家から飛び出す。もちろん、鍵をかけるのも忘れずに。

マンシヨンの廊下を全力で走り、エレベーターを待つ時間も勿体ないので階段で下りる。エントランスホールを駆け抜け、入り口の自動ドアから外へ飛び出した。

——今何分だろう。間に合うかな！？

結論だけ書く。そこまで急ぐ必要はなかった。

学校へ全力で走っている途中、たまたま通りがかった見滝原公園にある時計を見たら、まだ7時40分だったのだ。

どうやら、あかりは朝の用意を10分で済ませてしまったようである。彼女が住んでいる見滝原中学校の寮——という名のマンシヨン——から中学校までは徒歩10分。まだまだ余裕だ。

普段は朝の準備に30分くらいかかる。だが今日は朝の洗濯を省略、洗顔も簡略化したせいか、いつもの半分の時間で準備が完了してしまったようだった。

とりあえず立ち止まって乱れた息を整える。落ち着いてくると、仕方なく諦めたバターのことが思い出されてきた。

「だったらバター塗っとけばよかったかなあ」

あかりはそう言っただけ落すとす。

と、そんな彼女の背中に明るい声がかけられた。

「あーかりっ。なーにへこんでんの？」

その声に振り返ると、あかりの後ろに同じ見滝原中学校の制服に身を包んだ女の子が立っていた。青、というか水色に近い髪をショートカットにし、顔に人懐こそうないたずらっぽい笑みを浮かべている。

彼女の名前は美樹さやか。クラスは異なるが、あかりの同級生で親友の1人である。ちょっとお調子者で怒りっぽいのが欠点だが、スポーツ万能成績下位で、明るく正義感が強く、近くにいると楽し

いムードメーカーだ。ちなみに現在某少年に絶賛恋愛中。

「さやか、おはよ。いやね、ちよつと聞いてよ！！朝寝坊したと思つてめっちゃ頑張つて準備したんだけどさ、そのとき急いでたからパンにバターを塗るのを諦めたんだんだけど――」

「はあはあ、だいたい読めましたぞ。おぬし、思いのほか早く準備ができちゃつて、だったらバター塗つとけばよかったかなあ、つて、後悔してんじゃないかい？」

「まあ、そんなとこ」

「ダメだなーあかりは。ちゃんと時計は見なくちゃ」

「あれ？昨日のテスト、時計を見てなくて配分を間違つた、つて言つてたのはどの口だっけ？」

「はっはっはー。何を隠そう、それはこのさやかちゃんの口だ！！」

ふふん、と胸を張つてみせるさやか。

「いやさやかちゃん、ほんとに聞いている訳じゃないよ……」

と、さやかの後ろからあきれたような声がした。優しくては可愛らしいけれど、少し自信なさげなその声の主は、

「おつ、まどかもいたんだ？まあ、さやかがいたからさ、いるだろうなーとは思つてたけどね」

「ごめんね、挨拶しそびれちゃつて」

えへへ、とはにかむまどか。頭の両側で縛つてある明るいピンク色の髪がふわりと揺れた。

鹿目まどか。彼女もまた見滝原中学校の生徒だ。さやかと同じクラスで、彼女と同じくあかりの親友の１人。少々夢見がちで、そのせいで周りとズレることがあるのが玉にきずだが、心優しく穏やかで、人を和ませる柔らかな雰囲気を持つ可愛い女の子だ。

ちなみに彼女の母親は近所では有名なバリバリのキャリアウーマンだ。

「ホント仲良いよね、まどかとさやか。なんて言うか、いつも一緒にいる感じ。さやかがいたら絶対まどかがいるし、まどかが

いたら絶対さやかがいる、みたいな」

「そ、そんなに仲良いかな、わたしたち」

そう言つてまどかが頭をかいていると、脇の下からにゅつ、と二本の手が現れた。その手、すなわちさやかの手はそのまままどかの腰をつかむと、こちよこちよとくすぐり始めた。

たまらずまどかが笑い始める。

「ちよつ……やめてよさやかちゃ……あはははは……!!」

「なーに言つてんのよあかり。まどかがあたしの嫁だからに決まつてんでしょ!!何度言つても分からない奴はこうしてやる!!」

「あはははさやかちゃん、やめつ……はははは!!」

爽やかな朝の日差しの中で楽しそうに笑いあうまどかとさやか。あかりはそんな2人をほほえましそうに眺めていた。だが、ふと何かに気がついたようにまどかを見た。彼女の髪を縛っている場所から7、8本、けばだった糸が解れているのを発見したのだ。

「ちよつとまどか、リボン切れそうだよ!？」

「えつ?えつ!？」

慌ててまどかが頭を触つてみる。右のお下げを縛っている黒いリボンが、の真ん中に幾つもの裂け目が入って今にも切れそうになっていた。

「ふえつ、お気に入りだったのに……」

まどかはリボンをはずすと改めて眺めて、がっくりと肩を落とす。
「いつから使つてたんだっけ?」

「小学校の二年生。誕生日プレゼントにもらったリボンのセットの最後の一本だったの。あーあ、このリボンともお別れだね……」

千切れそうなりボンをすりすりと撫でながらまどかは答えた。

「そんな前から……確かにすごく大事そうにしてたけど」

あかりは小学六年生の時にとある事故で両親を亡くし、今は奨学金を貰うことで見滝原中学校の寮——と言つても普通のマンションのワンフロアを生徒用に中学校側が借りているだけのもので、今の入居者はあかりの他に三年生が2人だけだ——に住んでいる身であ

る。彼女が見滝原に移ってきたのは中学校に入るときからなので、昔から幼なじみだったまどかとさやかの2人と比べると、2人との付き合いは短い。彼女は2人と知り合ってからまだ半年も経っていないかった。

だが、心優しいまどかと、明るくて気さくなさやかとはすぐに打ち解けたため、すでに端から見ると3人とも昔からの友達立ったように見えるほど親密になっていた。

「まあままだか、そんなに落ち込まなくてもいいじゃん。今日の放課後、一緒に新しいリボン買いにいこ？」

「うん……そうだね、さやかちゃん」

さやかはまだかの肩をぽんぽん、とたたいて慰めている。

「……でも、体育の時間までに何かで髪を縛つとかないと。あかりちゃん、ゴム持つてない？」

「ごめん、ボク小さい頃からずっとショートカットだから買ったことすらない」

「じゃあさやかちゃん——」

「ごめん、あたしも持つてない」

不幸なことに、まどかの近くにいる2人は両方ともヘアゴムを持つていなかった。どうしよう、と頭を抱えるまどか。今日の体育の授業はマラソンなのだ。髪は縛らないと結構邪魔になる。

誰か持つていないか考えていると、あかりはいるはずの人物がいないことに気がついた。

「あれ？そっぴいさ、何で仁美いないの？仁美ならたぶん持つてるはずだけど」

志筑仁美。ここにはいないが、彼女もまたまどかたち仲良しグループの一員である。緑色でウェーブのかかった髪が特徴。頭が良く容姿端麗、性格もよい才色兼備を体現したような少女だ。

この仲良しグループ残り3人が成績を平均程度キープできるのは彼女の存在が大きい。

「仁美ちゃん、今日は日直だから早く行くなって言ってたよ。でも

確かに仁美ちゃんなら持つてそう。学校に着いたら聞いてみようかな」

「ほんとと、仁美って真面目だよな。日直なんてさぼっちゃえばいいのに」

「ダメだよさやかちゃん、お仕事はちゃんとしないと」

「そうだぞさやか、そうしないとまた早乙女先生から延々と元力レ話を聞かされるぞ」

「うげっ、それはやだな……」

早乙女先生というのは、まどかとさやかのクラスの担任、早乙女和子先生のことだ。わかりやすくてもしろい授業に定評があり、生徒にも人気な先生である。

だが恋愛方向はダメダメで、新しい男性を見つけてきては数週間付き合っただけ、という生活を延々と続けている。

現在はアパレル系企業の男性と付き合っているが、タイムリミットは近い。

さやかは一巡目の日直をさぼり、早乙女先生に説教を食らったことがあるのだが、中盤から恋愛方面の愚痴にシフトしていった経験があるのだ。やっと終わったときに思い返してみると愚痴は総会話時間の実に九割を占めていたらしい。

「ホント、あのときのことを思い出すと——って時間やばっ!？」
さやか公園の時計を見てオーバーなほど飛び上がる。でも彼女の気持ちも分からなくない。なにせこうやって仲良く話しているうちに、

登校時間まで5分を切ってしまったのだ。

「ふえっ!?!?どうしよう……」

「どうしようもこうしようもないよ!?!?とにかく急がないと!?!?」
半ば転ぶようにして走り出すあかり、さやか、そしてまどか。
今日も、見滝原は平和だ。

今日までは。

私立見滝原中学校は、ちょうど見滝原市の中心になる私立の中学校だ。

市と同じ名前を冠しているが、見滝原市自体5年前に蒼樹市、玄虚村、支棒町、新房町が合併してできた新しい市であり、公立中学校はそれぞれ旧市町村名を冠している。

この見滝原市初となる私立の中学校は、“進歩し続ける社会に適応し、未来を牽引してゆく人間を育てる”を教育理念に掲げ、同見滝原市に本社を構える複合巨大企業、“スマートブレイン・ホールディングス”が中心となり設立された。

そのハイレベルな教育と最新設備の整った教育環境もさながら、スマートブレイン・ホールディングスが設定した“生存遺児奨学制度”により、開校直後にして一躍全国の目を引くこととなった。

“生存遺児奨学制度”とは大きな事件や事故などで両親を失った子供たちを引き取り、無料で教育し、寮という形で家まで与えるという前代未聞の制度である。

適合条件が厳しい——子供自身も事件や災害に遭遇し、九死に一生を得ていること、など——ため、現在適応されて通っている生徒はたったの5名であるが、その制度は大きく社会で評価された。

「お、おはよ……」

南あかりは興奮した犬のように息を切らし、2年F組の扉をくぐ

った。

見滝原中学校2年F組、これが彼女のクラスである。ちなみに鹿目まどかと美樹さやかは隣の隣のクラス、C組だ。

「ちよつとあかり、大丈夫？」

「あ、ケイ、ありが、と……」

一番前に座っている一人の女の子、里見ケイが心配そうに声をかけた。

ケイはあかりのクラスで一番の仲良しで、いかにも今時の女子中学生といった外見とは裏腹に、真面目で実直なお嬢様だ。ちなみに成績は入学から今までブレることのない学年1位だ。

あかりは今日の朝の出来事を大まかに伝えると、ケイは大きくため息をついた。

「バカね」

「にべもないいいっ……!」

「だってそうじゃない。せっかく早く家を出たのに、立ち話できりぎりになるなんて。話なら学校でできるでしょ」

……ケイの欠点は、思考回路がいわゆる先生と同じだということだ。

「そういうもんじゃ……」

「そういうもんよ。ところであかり、あなた何か忘れてない？」

「やだなあ、昨日の夜きちんとそろえたから忘れ物なんて」

「homework」

ケイがなめらかな発音で呟く。彼女はイギリスからの帰国子女だ。彼女の実家は隣の日溜市にある大病院だが、小学校時代は教育のために母親の実家であるイギリスのマンチェスターで過ごしていた。

「あ、今日の分忘れてた……!」

「やっぱり忘れていたのね……ほら」

ケイがため息をついて差し出したのは、見間違えようもない、今

日の宿題のノートだ。

「提出は昼休みよ。それまでにはきちんとやっておきなさいね」

「へへ、いつも悪いねー」

「ほんつと。次はちゃんとやってきなさいよ」

「……………たぶん」

「次からはやめようかしら」

「ごめんなさい次からはきちんとやってきます」

「なら、仕方ないわね」

……ケイの良いところは、なんだかんだで結局は優しく世話を焼いてくれることだ。ちなみにケイは自分の発言が矛盾していることに気づいていないようだ。次回あかりがきちんと宿題をやってくれば別にケイは自分の宿題を見せる必要はないのだが。

「ほらほら、チャイムが鳴るわよ」

「ほーい」

ケイに促されてあかりが席に着くと同時にチャイムが鳴り響き、担任の西村先生が入ってくる。

朝学習のプリントを無視し、あかりは宿題写しに取りかかった。

「ねえねえ、明日まどか達のクラスに転校生が来る、ってほんと？」

昼休み、学校の屋上。持ってきたコンビ二弁当をつつきながら、あかりは話しかけた。今のメンバーはあかり、まどか、さやか、仁美。ちなみにたまにこのメンバーにケイも混ざることがあるが、今日は”とある事情”とやら何とやらで不在だ。

あかりの問いかけに答えたのは、まどかではなくさやかだった。

「そうそう。まあ、厳密に言えば復学、っていった方が近いのかな？入学はしてただけで心臓の病気で今まで通えてなかった子が

戻ってくるんだってさ」

「へえ、どんな子なのかなあ。ボクとしてはやっぱカッコイイ男の子がいいんだけど」

隣の隣のクラスながら、あかりは転校生に興味津々だ。特に彼氏いない歴、どころか恋愛未体験歴〃年齢の彼女にとっては当然かもしれないが。

「どちらにしろ、いい子だとうれいすわね」

このお嬢様口調の台詞は仁美のものだ。彼女は別にそこまで気にしていないようである。実はこれは当然のことだ。なぜなら――

「それにこれ以上手紙をいただくようになって困りますし」

「仁美め、自慢か自慢かー？」

さやかが肘を使って迫りながらはやし立てる。

何を隠そう、仁美は男子に超がつくほどモテモテなのだ。ラブレターなら3日に1通なんて日常茶飯事。先週は特にすさまじく、月曜日から金曜日までの5日間でなんと6通もの手紙をもらっていた。最近女子からさえ手紙が来て困っているという。

「実際頂いてみると困るんですわよ。どうやってお断りしようかと考えたり。せつかく手紙をくださったのに傷つけるわけにはいきませんわ」

本人は本気で悩んでいるようだが、そんなもの貰ったことのない3人にしたら、

「贅沢な悩みだなあ……」

「えへへへ、そうだね……わたしも一通くらい貰ってみたいならぶれたあ」

あかりとまどかもうらやましがっている。まどかに至っては台詞の最期にハートマークが付きそうなくらいにまで顔がとろけている。別にそっち方向に興味はないが、あかりからしたらまどかもさやかも十分かわいいと思うのだが。

ボーイッシュな見た目のあかりは、異性から告白されたことなどはないが同性からならある、といううれしいんだかどうかよくわからない日々を送っており、前述の仁美の同性告白の件では彼女の経験がかなり生かされた。最近では、もはや開き直って仁美へのアドバンテージにしようかなどと考え始めている。なお、一人称が”ボク”である、というのそれに拍車をかけているのだが、彼女はそれに気づいていない。

「いいなー仁美は」

さやかが若干本気が入った声で呟く。どうやら”彼”との関係は全く持つて変化していかないようだ。

「ですけど……ん？」

仁美が何かに気がついたように振り返る。屋上の入り口で、さえない男子がこちらを伺っていた。あれはあかりと同じクラスの須川だったか。よく見ると、ピンク色の便箋を持っている。隠すように持っているところを見るとどうやら、いや間違いなくラブレターだろう。

「仁美を呼んでるよー？行つてきなよ」

「あ、はい、行つて参りますわ」

そう言うのと仁美はあわてて立ち上がり、屋上の入り口へ向かつて駆けていってしまった。困る困るなど言いながら、すっかり手慣れたものである。須川は仁美をつれて、まどかたちの見えないところへ連れて行つた。

「あーあ、羨ましいなあ」

「分からないこともないけどね。なにせ仁美は運動以外は何でも来いの完璧人間だからなあ」

「運動なら何でも来い何だけどな、あたし」

「運動に関してはさやかは凄いよね、確かに。100メートル走クラス一位だって？」

「女子の中では、だけど。男子も入ると3位だし。それに勉強は——うん」「わたしはどっちも普通だしなあ……。わたしもさやかちゃんみたいに何か取り柄がほしいよ」

「ボクもそうだなあ。特技と言っても特にないし——」

その時、軽快なメロディがあかりの言葉を遮った。校内放送が入ったのだ。内容は保険委員と福祉委員の召集。残念なことに、まどかは保険委員、さやかは福祉委員だった。

「悪い、あたしたちも……」

「集まんなきゃ……」

「ま、仕方ないよね。委員会だし」

話しているうちに食べ終わった弁当を片づけると、2人はそれぞれの集合場所へ駆けていった。

結局昼休み中に仁美は戻らず、委員会の集まりも終了ぎりぎりまでかかったため、話の続きをすることは叶わなかった。

本日最後の、6時間目の数学の授業が終わり、あかりは夢の世界から帰ってきた。授業中に先生に気づかれず、恥をかかなかったのはよかったが、完全に今日の授業を聞きそびれていた。

だが彼女は焦らない。あかりには成績優秀な強い味方、里見ケイがいるのだ。今日は掃除当番でもないし、後は帰るだけ。ならば彼女にゆっくり教えて貰っても大丈夫だろう。

そう決めると、早速あかりはケイの机へ歩いてゆく。

「ねえ、ケイ。さっきの授業のことなんだけどさ、ボクつい寝ちゃって——？」

「何で？おかしい、私は頑張ったのに……頑張った？本当かしら？でも私は……いや……でも……」

「ケイ？聞こえてる？ケイ？」

「でも……それにしても……こんな——？」

どうしたのだろう。ケイの様子がおかしい。掴んでいるのは何か

のプリント。それを信じられないような目で見つめ、何事が呟いている。

「ねえ!! ケイ!!」

「ひゃっ!？」

大きな声を出して、やっと気がついたようだ。

「ねえ、大丈夫？」

「あ、うん、気にしないで。それで、何？」

「いや、ボク6時間目の数学、まるまる寝ちゃってさ、」

「教えて、ってこと？はあ、全く……。いいわよ。今日やったのは行列の——」

その後は、いつも通りのケイだった。いつも通り、途中でふざけるあかりに呆れながらも真摯に教えてくれた。さらに言えば、いつもより丁寧に教えてくれたような気がしなくもなかったが。

「——と、ここまでが今日やった分よ」

「ありがと。ホントいつも悪いね」

「はあ、ホントに悪いと思ってるのかしら」

ケイ先生の補修（教科：数学）が終わった頃には、教室には2人のほかには誰もいなくなっていた。部活のある生徒はそれぞれの部活に、帰宅部の生徒はもう帰ったのだろう。

まどかとさやか、仁美には買い物につき合えないことを話しておいた。早く終わったら行くかも、とは言っているが、肝心のどこに行くかを聞き忘れたので合流のしようがない。明日謝らなければならないだろう。

ならば、せつかくケイと一緒にいるのだから、

「ケイ、駅まで送ってくよ」

「いいわよ、別に。まだ暗くもないし」

ケイはさつさと自分の席に戻り、帰りの準備を始めてしまう。あかりはすかさず追いかけて、ケイの背中に抱きついた。

「ねえねえ一緒に行こうよボクも連れて行ってよねえねえ」

すると、ケイは急にバッグに筆箱を入れようとしていた手を止め、

「まあ、いいわ」

「――へ？」

「いいわ。駅まで一緒に行きましょう」

やっぱり今日のケイはどこかおかしい気がする。いつもだったらあかりの誘いを拒絶し、勝手に帰ってしまうはずなのに。そしてそういうお決まりの展開を期待して、あかりも話しかけていたのに。

「ほら、早く準備して」

「え、あ、うん」

あかりは首を傾げながらもそそくさと準備を終わらせ、ケイと一緒に教室を出た。

前を歩くケイの背中が、あかりにはなぜか少し寂しげに見えていた。

見滝原駅は市の東部にある工業地帯の近くにある。緑が美しい見滝原市だが、この地域だけはよほど灰色に沈み、仕事関係の人がもしくはそれこそ駅へ向かう人しか近づかない。

しかも黄昏時というこの時期は多くの煙突や工場の影が長く延びて道路を多い、陰気さをさらに強めている。

「……ねえ」

あかりの前を歩いているケイが口を開いた。学校を出てから初めての発言だった。

「……今日のテスト……どうだった……？」

今日のショートホームルームで返された数学のテストのことだろうか。

「赤点だよ赤点。最低点記録更新しちゃったよ！！まあ、それでもさやかには勝ったけどね」

あかりは無理に明るく答えてみた。

「私は……2位……だった……」

帰ってきたのは暗いことこの上ないケイの声。こんな彼女は初めてだ。

だが分らない。確かに彼女はずっと学年1位だったが、1つ落ちるくらいでなぜそこまで落ち込むのだろう。だが、とにかく今はケイを元気づけなければ。

「ほ、ほら！！まどかもダメだったって言ってたし、あの仁美ですら合格ぎりぎりだった、って言ってたし！！」

あかりは頭の中でまどかと仁美に謝りながらそう答える。ケイを元気づけるためだ。きっと2人も分かってくれるだろう。さやか？別に言わなきゃバレないっしょ。

「大丈夫、ケイなら次はリベンジできるって！！」 「次？」

その言葉に反応して、ケイがゆっくり頭を上げる。

「そうだよ！！次頑張れば——」

「次がないのよっ！！」

ケイが声を荒げて振り返った。その両瞳には夕陽に照らされたトパース色の涙が輝いていた。

「次は……ないのよっ……！！」

ケイが両肩を震わせ始める。

あかりはこんなケイを見るのは初めてだった。ケイはいつも自信に満ちあふれていて、とても冷静だった。かつてあかりが大きな失敗をしたときも、ぐちぐち言いながらも落ち着いて対処法を考えてくれた。

彼女がここまで感情を爆発させるのをあかりは見たことがなかった。

「テストで1番以外とつちやったから、もう次はないのよ……！」

「落ち着いて、ケイ。どういふことなの？ボクで良かったら相談に乗るから」

「う……うん……」

あかりが両手での肩をつかんでやると、やっとケイは落ち着いたように息を大きく吐いた。

「そうね…… あかりだけには話しておこうかしら」
早くも闇に落ち始めた空を見上げた。

ケイは呟く。

——別に、だからといってどうなるわけでもないし。

「転校!？」

「そう。転校」

今あかりとケイの二人が話しているのは、工業地帯の中にある小さな廃工場だ。ケイによるとここは彼女の”隠れ家”らしい。1人で居たくなったときなどは、帰り道にここへよって暫く何もしないで過ごししてから帰ることもあったそうだ。

「でも、何で？」

「成績が振るわないからよ」

「ボクはそんなこと思わないけどなあ」

いや、あかりだけではない。勉強については、ケイは成績だけで

はなく努力でも間違はなく1位だし、それはもはや2年生の間は常識と化していた。実際、あかりはケイがテストで1位をとれなかったと聞いて耳を疑ったくらいだ。「両親が超絶エリートなのよ。特にセイバーシ大卒の母親から見たら、こんな中学なんて低レベルもいいところなの」

ケイの家族については詳しくは知らなかったが、そこまで凄い人間だったとは驚きだ。

何せ、セイバーシ大学と言えばイギリスで1、2を争う名門大学だ。アメリカのハーバード大学と比べられることが多い。こんな大学の出身といったら、世界でも有数の天才だと公言しているようなものである。

「そんな母から見たら、見滝原中のテストなんて、ダントツ1位を取って当然なのよ」

ケイの声色に呆れが混ざり始める。それと同時に微かな慟哭も。

「それで、ね。こんな、低レベルな、ところで、さ、勉強してても何にもならないから、って、独りで海外留学、するように、言われたの。しかも、学校に、通うんじゃないくて、先生と、1対1で、高校終わるまで。」

体の震えが大きくなる。

「でも、私は、見滝原中に、ね、通いたって、言ったの」
大きく鼻を嚙り上げる。

「何とか、条件を、守れば、許して、もらえる、ところまで、こじつけた」

ずっと下を向いていたケイが、パツと顔を上げる。

「交換、条件は、ずっと、1位に、居続けること。でも、私、私、2位になっちゃった」

そのまま彼女はあかりに抱きつき、ついに大きな声を上げて泣き始めた。

「いやだよ……っ。私、ここ……離れたくないよ……」

「ケイ……」

あかりは余りに突然な出来事に困惑していた。急に家の事情を話し出されても訳が分からない。第一母親がセイバーシ大卒だとか独りきりで留学などと言われてもにわかには信じがたい。彼女が理解していたのはごくわずか。ケイはずっと1番をとっていなければここを離れなければならぬ約束があったこと。そして今日、その約束を破ってしまい、ここを離れるしかなかったこと。ケイはそれをとても嫌がっていること。

そして、そんなことを知ったところであかりにできることは何もないこと。

無力感にあかりは唇を噛みしめる。

そういえば、ケイは見滝原に来てから初めてできた友達だった。当時はそばにだれも知り合いが居らず、唯一すぐにできた友達がイギリス帰りで同じく独りぼっちだったケイだった。性格も正反対で趣味も全く違うのに、なぜここまで仲良くなれたのかはあかりにも分からない。もしかしたら独りぼっちだったこと自体が2人を引き寄せたのかもしれない。

そんなケイが、自分から離れていこうとしている。

嫌だ。

そんなの絶対に嫌だ。

そう思ってひととき強くケイを抱きしめようとしたとき、ふつ、とケイの体の力が抜けた。

彼女の体は必死でつかもうとするあかりの腕をすり抜けて、地面に倒れ込んだ。

「ケイ!？」

あかりは慌ててかがみ込むと、ケイを助け起こす。顔から倒れ込んだ割には特に大きな傷も見あたらなかった。だが、唯一そこだけはぶつけたのか、額に小さな痣ができていた。

何かの王冠のように、繊細な模様の痣が。

「ケイ!？大丈夫!？」

ケイはぶるりと瞼を震わせると、ゆっくりと目を開いた。

「あ……かり……?」

「そう、ボクだよ!!南あかり!!」

「……へへ、ちょっとくらってきちゃった」

ケイはあかりの手から放れ、ふらつきながらも立ち上がった。そのままあかりに背を向け、廃ビルの階段を上ってゆく。

「ねえ、どこ行くの!？」

慌てて彼女を追いかけるながら、あかりもまた、階段を上る。

コツ、コツ。

「ねえ、あかり？」

ケイが奇妙なほど明るい声で話しかけてきた。それは何気ない言葉であるはずなのに、何故かどろりとあかりの心の中に流れ込んでゆく。直接。言葉が。響く。

コッ、コッ。

「……私、いいことを思いついたの」

優しく、ねつとりと絡み付くような言葉。あまりの違和感に耳を塞ぐが、ケイの言葉はそれを無視して心の中へ忍び込む。自分の心の中に、どす黒い何かがたまってゆく、そんな感覚。それが、心地よい。

コッ、コッ。

「あかり、2人でパパもママも近づけない場所に行けばいいのよ。もっと幸せな場所へ」

恐い。何かがおかしい。ケイの言動はあまりにも不自然だ。優しく話しかけるような口調が、胸の中の障壁を無視して直接心に響いてくる。恐い。おかしい。恐い。

”幸せな場所”と言う言葉がこびりついて離れない。今の生活は、幸せなはず。あかりはそう自分に言い聞かせる。

コッ、コッ。

「さっきね、ちょうどいい場所を見つけたの」

戻った方がいい。引き返した方がいい。理性がそう告げるも、魅入られたように足の動きが止まらない。決断できない。こんなに恐いの、前に進みたい。上に上りたい。ケイといっしょにいたい。

”ちようどいい場所”？そんな場所があるの？この世界より素敵な場所？

コツ、コツ。

「美しい薔薇園よ。口ひげの庭師さんが教えてくれたの」

進みたい。上りたい。行きたい。美しい薔薇園？いったいどんなところなんだろう。

少なくとも
こんな世界よりは
美しいよね？

コツ、コツ。

もちろんよ。どんな世界よりも美しい場所へ、私は行くの。あかりも、来ない？

コツ、コツ。

行きたい。

コツ、コツ。

いきたい。

骨、骨。

逝きたい。

屋上の扉が開く。美しい夕焼けが、廃ビルの屋上を照らす。

血のように赤い夕陽が、呼んでいる。

ケイのことを。そして、あかりのことを呼んでいる。

——ねえケイ、あつちに薔薇園があるの？

——そうよ。このまままっすぐ。

——まっすぐ？

——そう、まっすぐ。そのままフェンスを越えて、

——ここから、飛び降りればいいのよ。

——ねえ、ボクも行きたいな。

——ボクも、ついて行っていい？

——もちろんよ。大歓迎。

——ありがと、ケイ。じゃあ、

あかりは微笑む。

——いっしょに、逝いよう。

ふわっ。

ドサッ。

——あれ？

見滝原市の工業地帯にあるとある廃ビルで、南あかりは目を覚ました。

――星？月？

――夜だ。

――何でボクはこんなところで寝ているんだろう。

――服は……制服だ。大丈夫、バッグもある。

あかりは慌ててバッグを拾うと、中から自分のケータイを取り出す。それはスマートブレイン・ネットワーク製の最新機種。あかりがその機種を選ぶきっかけとなったのは、デザインと強度。あかりは結構ものの扱いが雑なため、先代のケータイはでこぼこになってしまった。だからこそ、3階から落としても傷1つつかないというこのケータイを選んだのだ。なのに、ケータイの画面の裏側に、まるで何かにぶつかったようなヒビが大きく走っていた。不思議に思いながらも、あかりはケータイを開く。幸い、ディスプレイは何ともなかった。

「あつ、もう7時だ!!……あれ？」

ディスプレイに表示された待ち受け画面には、時刻のほかに『不在着信』が表示されていた。

「誰からだろう？」　ケータイを操作し、着信履歴を表示する。

1番上に表示されている名前は、

「里見……ケイ……」

「誰……だっけ？」

あかりは首を傾げる。

「あつ、そんなことしてる暇ない！！朝選択してなかったし、ご飯も！！」 そんなことよりも重要なこと”に気がつく、慌ててあかりは廃ビルから駆け出す。幸い、しばらく走っていると知っている道にでた。ここから家までは30分といったところだろうか。バスにでも乗りたい気分だが、生憎奨学金は生活費に殆どが消えてしまっている。残りは趣味に使いたいし。

「そういえば夕食の材料あるかな？スーパーよってくか」

まるで寄り道をして遅くなってしまったかのように、あかりは笑顔で夜の街を駆けてゆく。

一瞬、自らの瞳に鈍い銀色の光が宿ったのにも気づかずに。

「まさか……この時間軸に戻って来て始めて見る景色が、魔女の殺し”だなんて」

あかりが倒れていた廃ビルに隣接する、煙突の先。1人の少女が、そうこぼした。

「幸先悪いわね。本当に」

背中まで伸び途中で2つに分かれる髪は、夜の闇に溶けてしまいうまくらいに黒く、黒く。

まるでアニメのキャラクターが着ているようなデザインの服もまた、黒がふんだんに用いられている。

「あの魔女は倒してもよいでしょうけれど、この時間軸になれるまでは迂闊な戦闘は避けた方が良さそうね」

左腕に巻いてあるのは、砂時計の意匠が描かれた円形で銀色のバックラー。少女はもう片方の腕でいとおしそうにそれを撫でる。

バックラーを巻いてある方の手の甲で、何かが輝いた。

それは月の光を反射する、美しい紫色の宝珠。

「いいわ。いいのよ。別に」

彼女は今も廃ビルに転がっているであろう”2人の”少女の顔を思い出し、唇を噛みしめる。

「いいの。別に」

自分に言い聞かせるように、何度もつぶやく。

「私は、あの子を」

少女は凜と顔を上げる。月光に照らされたのは、美しさを持ちながらまだあどけなさが残る顔。その表情は、悲壮感と強い決意という仮面によって強く固められていた。

少女の靴が煙突の先を蹴る。たったそれだけで、まるで魔法を使ったように彼女の体は数メートルも飛び上がった。

「あの子を救うためになら、すべてを犠牲にするって決めたから」

漆黒の闇を跳ぶのは、

ある”決意”に心を閉ざした少女。

幾度失敗しようとも繰り返し、繰り返し。

幾度も同じ場所に立ってきた、

”魔法”の力を宿す”少女”。

『魔法少女』、暁美ほむら。

第1幕『いっしょに、いっしょ』（後書き）

いかがだったでしょうか。

終盤にまどマギ特有の絶望感が出ればよかったんですが。

まだ物語は動き始めたばかりです。

もしまた暇な時間がございましたら、次話も読んでいただけると嬉しいです。

よろしかったら感想・誤字報告もお願いします!!

主人公はボク少女。

幕間『こんなのってないよ』（前書き）

しばらくは、まどマギ本編に沿ってストーリーが展開していくこと
になります。

ですが、細かい部分に違いを忍ばせておりますので……………ウェヒヒ
ヒ

幕間『こんなのってないよ』

ここはどこだろう。

目の前に広がるのは、白と黒のタイルに囲まれた長い、長い廊下。

鹿目まどかは、ただただ理由も分からず、果てしなく続く道を走り続けていた。

いくら走っても、風景は何も変わらない。延々と続く黒と白のコントラストが、距離感を麻痺させる。

まどかにはすでに何十キロを走ったような気がしていたし、まだ数メートルしか走っていないような気もしていた。

さらにどのくらい走り続けただろう。

不意に永遠に続くかと思われた廊下が唐突に途切れた。その先には、廊下と同じ模様に包まれた、広いホールのような場所が広がっていた。白と黒だけの、ただ広いだけの空間。

おそろおそろ、まどかは足を踏み入れてみる。

自らの足音が何重にも反響する。きつと高い天井があるのだろうと、彼女はふと足を止めて、上を見上げた。

まどかは息を飲んだ。

ホールの上には、天井も空もなかった。

そこにあっただのは、何重にも絡み合った、白と黒のチューブのみ。複雑に組み合わされた管が、どこまでも高く延びている。その様相は、まるで動物の腸のようだった。

よく見ると、この混沌を構成しているチューブはたったの1本し

かなかった。1本のチューブが上に登っては急に下向きに曲がつて方向転換する。だがそれは再び空を目指し、再び地面へ向けさせられる。

何度も、何度も。

登って、降りて、延びて、捻れて、また登る。

チューブの一端は遙かなる繰り返しに飲み込まれ、闇の中へ飲み込まれていた。

そしてもう片方は、

たった今、まどかが入ってきた入り口から、この広いホールへとつながっていた。

つまり

彼女の走ってきたその廊下の正体は、絡み付き、曲がり、ぶつかりながら延びているあのチューブだったのだ。

そして彼女は見つけてしまった。

彼女の立っているホールの入り口から、ちょうど反対側。そこにぽつかりと口を開けた、廊下——チューブの続きの入り口を。

まどかは恐くなった。今まで恐怖を感じなかったのがおかしかったのだ。この迷路から一生、いや死んでも逃れられない。まるでホールはそれを示すために存在しているようだった。

ここから出たい。

このループから抜け出したい。

ほかの道はないか、もう一度辺りを見回す。

そして、非常口が、あった。
高い、高い階段の先に。

この異世界のようなホールの中で、拍子抜けしそうなほど見なれた、グリーンの表示。白い扉から出て行こうとする人型を模したマーク。

日本語での、『非常口』と言う表記。

安堵のため息が、まどかの口から漏れた。

ここからなら、外に出られる。

必死の思いで階段を上り、扉を開けた――

そして今度こそ、まどかは絶望した。

扉の出口は、巨大な木の虚につながっていた。背の高いその木からは、眼下の街を一望できた。

目の前に広がるのは、見慣れた見滝原の街並み。学校も見えるし、まどかの家、さやかのマンションやあかりのマンション、仁美のお屋敷だって見える。

それら全てが、瓦礫と化していた。

それだけではない。幼稚園の遠足で行った公園は炎に包まれているし、小学校の社会科見学で訪れたお菓子工場のあったところには大きなクレーターがあるだけ。いつもの通学路にある信号は道路に倒れて火花を上げており、昨日さやかや仁美と買い物にいったショッピングモールはもはや跡形もなくなっていた。

「そんな……」

まどかの口から、小さな声が漏れた。何が起きているのか、どうしてこうなったのか、全くもって理解できない。

夜だった。空には星1つなく、どす黒い闇が広がっていた。その中央に浮かび全てを統べるように手を広げるその存在は、

「魔……女……？」

すぐに、まどかは自分の発した言葉に違和感を覚えた。

見滝原の上空に浮遊し、破壊と混沌の渦の中心に座する”それ”を魔女と形容するのは、一般常識から考えて、あまりにも不適切だったからだ。確かに一見ドレスを着た女のような姿をしているが、スカートの中から覗いているのは足ではなく無数の歯車だ。両腕は広げたままネキンのように制止している。人間で言う顔の部分は芸術品のように白く、うすら笑う口のような赤いラインが1本、走っている。

そして、もしその姿を人間と捉えるならば、上下が反転していた。頭のような部分を下に、スカートから覗く歯車を上に向けて、空中に制止している。

間違いなくあれを魔女と表現する人間などいないだろう。

だが、まどかにはあれが”魔女”と呼ばれる存在だと言うことを”知っていた”。コンピュータウィルス、『トロイの木馬』のよう

に、今初めてその知識を使ったのに、前からそれは頭の中にインプットされていた気がする、そんな違和感。そして、

——わたし、どうしてこの景色を”知ってる”の？

その”魔女”に、1つの小さな影が立ち向かった。

すすけた闇の中でわずかな光を反射し、艶やかに輝く長い黒髪をもつ、美しい少女だ。まるでアニメに登場しそうな華やかなデザインの服は、白と黒というカラーリングによって逆に引き締まったイメージを与える。

そして左腕の砂時計の意匠をもつバックラーが、”魔女”の放つビームのような攻撃を受け止める。

「——ら、ちゃん？」

まどかの口から自然と言葉がこぼれた。だが、それは建造物が破壊されてゆく轟音にかき消され、自らも自分の発言を認識できなかった。

少女はその勢いを保ったまま直線的に”魔女”へ突っ込んでゆく。 ”魔女”は円を描くように周囲に盾のように浮かばせているビル群——1つはまどかのママの会社だ——のうち小さなものを輪から離れさせ、少女に激突させる。

思わずまどかは息をのんだ。

少女はビルに後数メートルでぶつかるという瞬間に駒落ちしたように消失し、いつの間にかビルの壁面に立っていた。同じく同時に現れた無数のナパーム弾が”魔女”に牙をむく。

だが巨大な爆発をまともにくらっても、”魔女”は揺らめくことすらしない。煙が晴れれば、後は着弾する前と何も変わらずに浮か

んでいる。

その光景に啞然としたのはまどかだけではなかったようだ。空中で動きが止まった少女に、今度こそビルが激突する。そのまま辛うじて立っていたビルに衝突し、少女は巨大な質量に押しつぶされた。

「……酷いよ……こんなやつてないよ……」

思わずまどかが叫んだ。崩れ落ち、残骸と化したビルから、少女が大地へと墜ちてゆく。

「仕方がないよ。あれだけの敵に、彼女だけでは荷が重すぎる。でも、彼女も覚悟の上だ」

まどかの頭に、初めて聞くのに嫌と言うほど聞いた気がする声が響きわたった。テレパシー、だろうか。

いつの間にか、彼女の肩に白い小動物が乗っていた。

見た目は……猫やウサギに近いだろうか。猫であれば耳であろう器官からウサギのような耳が伸びており、ウサギ耳のをふわりと囲むように金色のリングが浮かんている。顔はまるでぬいぐるみのように可愛らしく、無表情。体つきは童話の狐をイメージさせた。背中には赤い輪のような模様がついていた。尻尾は体の割にかなり大きく、胴体と同じくらいの長さがあった。

まるで、おとぎ話から抜け出てきたような、そんな非現実感を与えてくる。

「……！！」

意識を取り戻したのか、少女が瓦礫の中から再び跳び上がった。

勇猛果敢に、巨大な敵へ立ち向かってゆく。

対抗するように、”魔女”も少女の方へ近づいてゆく。スカートの中の歯車が高速回転し、火花を散らす。”魔女”から見たら、それはただの小さな火花。

だが、少女にとってみればそれは巨大な火の玉に等しい。バックラーで受け止めることで直撃は避けられたものの、火の玉は衝突の衝撃だけで少女の華奢で小さな体を吹き飛ばし、ビルの残骸へと叩

きつける。爆煙が晴れたときには、少女はぐったりと気を失っていた。

「そんな……あんまりだよ……」

目の前で繰り広げられる、余りに一方的な戦い。

いや、もはやこれは戦いではない。

単なる、蹂躪。

「こんなの……酷すぎるよ……」

たぶん、彼女こそが最後の希望だ。彼女が敗れば、きっと――

「諦めたらそこまでだ」

まどかの思考を遮るように、頭の中に小動物の声が響く。

無感情なその声は、それでも彼女に力を与える。小動物は、さらに言葉をつなく。

「避けようもない”滅び”も、”嘆き”も、全て君が覆せばいい。そのための力が君にはあるんだから」

――そのための力。

――世界を救う力が、自分には備わっている？

――本当に？

「本当にできるの？こんな結末を変えられるの？」

粉塵に包まれ崩れ落ちた自分の生まれ故郷、見滝原。そしてその

街に息づく友達、家族、先生、そしてまだ名前も知らない人々も。

1人残らず救う力が、自分にはある。

まどかが決意に満ちた目で小動物を振り返る。後ろから叫び声が聞こえた。たぶん、あの少女のものだろう。彼女もまた、みんなを守るために戦っているに違いない。

——こんなわたしでも、みんなを助けられるなら。

「みんなを助けるためには、どうしたらいいの？」
まどかは問いかける。

「単純な話さ」

小動物は答える。その無表情だった顔に、初めて笑顔を浮かべて。

「僕と契約して、”魔法少女”になってほしいんだ!!」

まどかはゆつくりとうなずいた。

——ごめんね。わたし、魔法少女になる。

なぜか、そんな言葉が彼女の口から漏れた。

まどかは、小動物に小さな言葉で何事が呟く。

「君の祈りは受け入れられた。さあ、解き放つてごらん。君が手にした、新たな力を」

小動物はゆつくりと長い耳を伸ばして、
まどかの胸に優しく触れる。

「あつ……！！」

胸を貫く、鋭い痛み。

そして、まどかの目の前に、真っ白な光が溢れて——

ベッドの中で目が覚めた。

——あれ？いつものわたしの部屋だ。街だつて壊れてない。かな
りリアルだったけど、やっぱりあれって……？

「ふぁうつ……夢オチ……？」

第2幕『とっても大切な人たちだよ』（前書き）

なんか、今回文章に特に自信ありません。

直したかったのですが、どう直してよいのか分からず……

おかしい部分は指摘していただければ。
すぐに訂正いたしますので。

第2幕『とっても大切な人たちだよ』

その夢の中では、美樹さやかは人々を守る正義の戦士だった。

自分の武器である伝説の剣を振り回して、悪い怪物から人々を助けていた。

マントをはためかせ、闇を切り裂く。

その姿をみんなが憧れの眼差しで見つめてくれていた。まどかも、仁美も、あかりも、

そして、”あいつ”も。

みんな、彼女のおかげで幸せな生活を送れることに感謝していた。

それが嬉しかった。

みんな、さやかが守り続けることで幸福な毎日を送ることができていた。

だが、傷つき、苦しみ、必死に戦っている彼女自身には、いつになっても幸福はやってこなかった。

いつの間にか、さやかは自分がひとりぼっちになっているのに気がついた。彼女の戦う姿にみんな畏怖を覚え、少しずつ離れていったのだ。

仁美が。あかりが。まどかが。

そして、”あいつ”が。

みんなみんな、離れていった。

それでもさやかは戦い続けた。みんなを守ら”なければならぬ”
”と思ったからだ。

彼女は、怪物と戦った。

その敵は、強大だった。何度も胸を貫かれそうになり、何度も頭を吹き飛ばされそうになった。

痛みを無視して。心を止めて。長い長い戦いを経て、さやかはついにその敵を倒した。

あれ？

何か違和感を感じる。

何だか視界が高い。まるでビルの屋上にも立っているようだ。

手から剣が離れない。まるで体の一部になってしまったようだ。

無理矢理剣を引きはがそうとして、空いている自らの右手を見
みる。

自分の手ではなかった。

もっと、醜い、怪物のような手。

嘘だ。そう思って、そう自分を信じ込ませて、自らの体を見ても。

首の後ろまで大きく広がる、大きな襟。ピンク色の、ぼろ布のようなマント。足の代わりに伸びた、不格好で醜い尾鰭。

さやかは、いつの間にかさっき倒したはずの”敵”の姿になり果てていた。

「うわあああああつ!!」

絶叫とともに、さやかは目を覚ました。

全身にびっしりと汗をかき、パジャマが気持ち悪いほど肌に張り付いていた。

荒い息も整えずに、さつと周りを見回してみる。

いつも通りの、さやかの部屋だ。

自分の体をなで回してみる。

ショートカットの髪も、低い鼻も、やっとダイエットに成功して少しやせた体も、最近膨らみはじめた胸も、筋肉がついているからとは言え、少々太さがコンプレックスだった足も、ちゃんと美樹さやかのものだ。

ここまで確認してやっと安堵の一息をつき、枕元においてある熊の時計を見てみる。

午前6時。いつも起きるよりは早いが、まあ健康的な朝の起床時間としては申し分ない時間だ。それ以前にあんな夢を見たら二度寝は出来そうにないのだが。早起きは三文の得という諺を思い出して、さやかは朝の準備を始めることにした。

「なんか、すっごいリアルな夢だったなあ……」

汗でびっしりと濡れたパジャマから着替えながらも、いまだにバクバクと激しい鼓動が続ける心臓を押さえながら、さやかは先ほどの夢を思い出す。

みんなの幸せのために戦っていたら、自分は幸せになれなくて。

それで、友達も離れて行って。

”あいつ” もいなくなつて。

気がついたら、身も心もバケモノになっていて。

ふとさやかは着替えを中断し、立ち上がった。部屋の隅にある、小さなCDラックに歩み寄る。サティ、ラヴェル、ドビュッシー、レスピーギ。そこにはおおよそさやかの趣味のイメージとは異なる、クラシックのCDが並んでいた。

そのうちの1枚、グノーの『アヴェ・マリア』のCDを手にとり、さやかは小さく呟いた。

「恭介……」

ママの作ってくれた朝御飯をゆっくり食べてから家を出ても、まだ7時だった。学校に着くのが早すぎても仕方ないので、さやかはゆっくりと見滝原公園への道を歩いてゆく。

見滝原市でも中心部にある旧蒼樹市付近は、景観が美しいことで全国的にも有名だ。見滝原市の誕生と同時にこちらに本社を移してきた、スマートブレイン・ホールディングスの一部門、スマートブレイン・テクノロジーの最先端科学技術が生かされた街づくりは、自然との共存を可能にした近未来都市といった様相を示している。

このある意味実験都市といえるこの街づくり運動は市民の大きな関心を集めた。まだきちんとした検証が足りない、というような反対意見も多かったが、結局この都市開発は今や工業地帯である旧玄虚村を除いて見滝原市ほぼ全域に施された。

さやかの通学路のほぼ真ん中にあるこの見滝原公園は、そんな見滝原市の中でも特に景観が美しく、夜の公園は美しい公園も相まって見滝原一のデートスポットとなる。さやかも、いつの日にか憧れの彼氏と訪れて、彼のヴァイオリンでも聞いてみたいと思っていた。だが、通学中にここで待ち合わせるのは愛しの彼ではない。というかまださやかは告白もしていないし、第一今の「あいつ」とでは彼女の夢も叶えられない。よって待ち合せているのは――

「さやかさんー!!今日は早いですわねー!!」

「さやかおはようっ!!」

「おーっす、おはよ仁美、あかり」

志筑仁美が、こちらへ駆けてくる。隣には南あかりの姿も見えた。
「おっ?あかりがこんなに早いなんて珍しいじゃん。まさか、昨日の癖がついちちゃったとか?」

「あはは、まあ、そんなもんな」

頭に手を当てながら笑っているあかりは集合の遅刻常習犯なのだ。いつの間にか指定時刻までに来なかったら先に行つてよい、という規定ができていたほどの。

「じゃ、後はまどかだけだね」

「そうですわね」

「いやあ、まさかボクがまどかを待つ立場になるなんてね……なんか変な感じ……って?」

「ん?あれって……」

「噂をすれば陰、ですわね」

仁美が振り返ると、早くも並木の奥で揺れるピンク色の髪の毛が見えた。

「おーはようっ」

「おはようっ」

「おはようございます」

「まどか遅いつ……おっ?昨日のリボン、ピンクにしたんだ」

まどかは昨日切れてしまった黒いリボンの代わりに濃いピンクの新しいリボンをつけてきていた。それはどちらかといえば地味が好みなまどかにしてはなかなか華やかなものだ。

「昨日のリボン?」

あかりが問いかける。

「そういえばあかりさんはいらっしやらなかったですものね」

「ほらほら、あかりは来れなかったけどさ、あたしたち昨日まど

かの新しいリボン買いに行ったんだよ。そのとき買ったのがそのピンクのリボン」

「黄色も買っていたらしゃいましたけれど、そちらにしたんですわね」

「ママがさ、こっちの方がいいって。……派手すぎない？」

「そんなことないって！！すつごく似合ってるよ。ボクもリボンつけてみようかな」

「リボンって……あかりとかあたしの髪型じゃむりでしょ」

「まあ、そうだけどさ」

「では、全員揃ったわけですし、参りましょうか」

「うん、さやかちゃんたちもいこ？」

にこにこ笑いながら走り出す。

朝の爽やかな日差しが眩しい。公園の並木と地面のタイル、そして道の両脇を流れる透き通った水路は皆優しい色合いをしており、少女たちの幸せなひとときを暖かく包み込んでいる。

「そういえば、仁美ちゃん」

思い出したようにまどかが口を開く。

「なんですの？」

「ママが言ってたんだけどね、やっぱり告白をラブレターなんかでする男はろくな奴じゃないって」

「へえ、さすがまどかママだね、一言一言がマジかつこいい」

「ほんつと。それに美人だし、いわゆる出来る女って感じたよね。ボクもあんな大人になりたいなあ」

あかりが少し遠い目をする。なんとまどかの母、鹿目絢子さんはいまや会社の重鎮、社長だって夢じゃないのだそうだ。

「私にもそこまできっぱり割り切れる強さが欲しいですわ……昨日のこと、まだ心が痛みますもの」

昨日のこと、とはもちろん須川君からのラブレターのことである。あかりは、結局仁美はまた交際を断つたらしいと聞いていた。

「あー羨ましいなあ、でもボクならきっぱり断っちゃいそうだし、そんな優しいところも人気の理由なのかもね」

「それならまどかさんのほうがよっぽど優しいと思いますのに」
聞き手に徹していたまどかは、急に話を振られてビクツと跳ね上がった。

「ふえっ！？わたし！？やだなあ、わたしなんかぜんぜん優しくなんてないよ。それにわたしって地味だしね……えへへ」

その言葉に、さやかは何かに気づいたような笑みを浮かべる。
ちよつといやらしい笑みを。

「ほうほう、だからまどたんはまずかわいいピンクのリボンからイメチェンスタートと」

「違うよお！！さっき言ったでしょ、これはママが——」

「もしかして、ママからモテる秘訣でも教えてもらったんだな！
！ずるいぞ、ボクにも教えてよ！！」

「なんだとお！？それはけしからん！！ほらほら、黙ってないであたしにも教えなさい！！」

「そんなの教えてもらってないよお！！」

まどかは慌てて暴走しはじめたあかりとさやかから逃げだそうとするが、回り込まれて挟み撃ちにされてしまう。

「あかり、まどか抑えて」

「えっ！？ちよつとあかりちゃ——」

あかりにとらえられ、無防備になったまどかの脇腹にさやかは手を伸ばし、

「抜け駆けしたまどかには笑いのツボの刑だ！！そいやっ」

「さやかちゃん、手をわきわきさせるののどこが笑いのツボ——

あひゃひゃひゃひゃひゃ

「ほらほら教えないと」

「くすぐっちゃうぞ」

二着：南選手

この後、大きく遅れまして

三着：鹿目選手

四着：志筑選手

授業開始前のショートホームホーム……じゃなかったショートホームルーム。見滝原中学校1年C組では、担任の早乙女先生が生徒たちを相手に熱弁を振るっていた。

「みなさんはっ！！シャツの上にパーカーを着るときっ！！前のチャックをっ！！閉めますかっ！！閉めませんかっ！！はいっ！！な・か・ざ・わくんっ！！」

ビシッとでも音がしそうなほど鋭く、指示棒で1人の男子生徒を指名する。不幸にも荒ぶっている早乙女先生に指名されてしまったのは、一番前の真ん中という目立つ席に座る中澤雄二君。急な無茶振りに盛大に引きながらもなんとか口を開く。

「え……えつと……どっちでもいいと思います……」

「そのとおりのっ！！」

早乙女先生（英語教師：女性）が吠えた。その迫力に、中沢君は大きくのけぞってしまう。

「チャックを閉めるか閉めないくらいでっ！！女の魅力が変わるなんてのはっ！！大・間・違・いですっ！！」

その勢いのまま早乙女先生は指示棒を真つ二つに折ってしまった。

ちなみに謎の熱血教師フィールドにとらわれているのは中沢君のみである。ほかの生徒たちは互いに「ついに来たか」だの「今回は続いた方じゃね」だの「やっぱりだめだったんだね」だのと囁きあっている。

つまりこのC組でこんな出来事は日常茶飯事なのである。だいたい2週間に1回ペースでくる恒例行事。

『早乙女先生の失恋大暴走』。

つまりまたもや恋人と破局した早乙女先生が生徒たちに当たり散らしているというか慰められているというか、まあ、そんな状況なのである。

結局最後は『男子はそんな男になるな』『女子はそんな男と交際するな』で終わるのだ。

「それから男子は絶対にチャックの開け閉め程度に文句をつけるような小さい男にはならないようにっ！！わかりましたかっ！？」

早乙女先生は一息でそこまで言い切ると、やっと荒くなった息を整えるために一息ついた。

「やっと終わったね……」

「やっぱしばらくあいた後にくると疲れるなあ」

「確かにね」

その中で真ん中の列の後ろ側に座っているさやかとまどかも苦笑いを交わしていた。

コホン、と咳払いをして早乙女先生はざわつきだした教室を鎮める。

さっきのいらつき度合いはどこへやら、満面の笑みで口を開く。

「重要な話も終わったことですし、皆さん、これから転校生を紹介します」

「……いや、明らかにそっちの方が重要っしょ」
2のCで一番のツッコミ役であるさやかが小さく呟いた。

転校生。

まどかは、話を聞く前からその響きに少なからず憧れを抱いていた。彼女は生まれも育ちも見滝原——生まれたのは旧蒼樹市だが、この辺り一帯は昔からそう呼ばれている——であり、もちろん転校などはしたことがなかった上に、不幸なことに小学校から今まで、自分のクラスに転校生というものが来たためしかなかったのだ。まどかにとって、自分のクラスに転校生が来るのは初めてなのだ。

——転校生かあ。いったいどんな人なんだろう。

「じゃあ” 曉美さん”、入ってきてください」

早乙女先生の指示に従って、転校生が教室に入ってくる。その姿を見て、

「え……嘘……」

まどかは絶句した。

長く黒い髪の毛。同い年にしては凛々しく美しい顔立ち。まどかより少し高い身長。頭の黒いカチューシャ。

「はじめまして」

その透き通った声。

そのすべてが、あの”魔女”の夢で見た少女と瓜二つだったのだ。

少女は教室の電子黒板の前に立つと、小さく一礼した。

「曉美ほむらです。よろしくお願いします」

——いや、ちがう。

だが、まどかはその少女——曉美ほむらの表情を正面から見たと
き、自らのその考えを否定した。

あの少女は、夢の中手であつた少女は、もつと感情にあふれていた。絶望的な戦いの中で表情を苦痛に歪ませながらも、その中には誰かを命に代えても守ろうとするような、事故犠牲的にも思えるほどの強い意志が刻み込まれていた。だからこそ、あの夢の中でまどかは心からあの少女を助けたいと思つたのだ。

だが暁美ほむらは違う。

転校生という周囲の人間をだれも知らない立場にありながら、その簡素すぎる挨拶には恐ろしいほど他人への興味というものが感じ取られなかった。挨拶のあとにした小さな会釈も、余りにとつてつけたように不自然で、全く人に感情を伝えるという本来の目的を果たしていなかった。

もし夢の少女が暁美ほむらだったら、まどかが手をさしのべても手痛く拒絶し、助けようとさえさせてくれないだろう、そんな感じを受けた。

それほどまでに、暁美ほむらが漂わせる”孤独”のオーラはあまりにも強かつたのだ。

「……と……、というわけでC組にも新しい仲間が増えました。みんな仲良くしてあげてくださいね……」

暁美ほむらは名前のみを告げた後、ずっと黙つたままだつた。自己紹介の続きがあると思つていた早乙女先生だが、やがてこれ終わりなのだという事に気づくと慌てて挨拶をまとめた。

さつさと示された自分の席にバッグを持って行ってしまう暁美ほむらに、少しだけバラバラと拍手が起こる。苦笑いも多少混ざつていた。戸惑いながらも周りと同じようにまどかも拍手をした。

すると、自分の席についた暁美ほむらは、何故か真っ直ぐにまどかの方を振り向いた。そのまま彼女をじっと見つめてくる。

「ふえっ!？」

まどかはつい驚きの声を上げてしまった。自分が見つめすぎてしまったからだろうか。しかし、暁美ほむらの瞳からは何も読み取れない。だがこれだけは間違いない。転校生・暁美ほむらがじっと見つめているのは、この教室で初めて出会った、今まで面識のない平凡な少女、鹿目まどかであることは。

「……うう……」

その鋭くて冷たい上に感情を感じ取れない瞳に、まどかはつい目をそらせてしまう。

だが、そんなまどかを暁美ほむらはずっと見つめてくる。まどかもその視線を感じて顔を上げられない。少しずつ周りの生徒の注目が自分と暁美ほむらに集まってくるのがわかった。それでも、暁美ほむらは視線をそらさなかった。

「えっと、暁美さん？授業はじめるけど、いいかな？」

結局しびれを切らした早乙女先生がそう言うまで、暁美ほむらはずっとまどかを見つめ続けたのだった。

「へえ、そんなことあったんだ」

1時間目が終わった10分休み。まどかの周りにはいつものメンバーが集まっていた。休み時間ということで、あかりもF組からやってきている。

「そうだよもう、あたしびっくりしちゃって。まどか、あんた転校生の生き別れの妹かなんかじゃないの？」

「そ、そんなことあるわけないよ」

「それにしてもやはり転校生ですわね。あんなに皆さんに囲まれておりますもの」

「ああ、あれが噂の転校生だね」

暁美ほむらの周りには6、7人の女子が固まって集まっていた。それぞれが口々に「前の学校はどんなところだったの?」「部活には入ってたの?」「かわいいカチューシャだね。どこで売ってるの?」などと話しかけているが、当の暁美ほむらは一言一言呟くだけ。「暁美さんって、やっぱり不思議な雰囲気の方ですね……」「ホント、訳わかんないよね……」「あたし、ああいうのちょっと苦手……」「ええ?ボクは好きだけだなあ。ああいう素っ気ないタイプって、意外と優しいもんだよ。例えば——」

と、そこであかりは言葉に詰まってしまった。

——例えば、誰だ?誰を例に出そうとした?普段は素っ気ないけれど本当は優しくて、忘れた宿題をよく見せてくれた。確か一番前の席に——いや違う。あそこは島田さんの席だ。でも、何か忘れている気がする。島田ケイさんの席に……違う、なにを考えているんだ。島田夏美さんだ。ケイなどという名前の知り合いはいない。あれ、ケイ……?どこかで聞いたような……?

「うわっ、転校生こっちくるよ……」

さやかのかげにばかりは我に返った。見ると、暁美ほむらが真っ直ぐこちらを目指してくる。見つめているのは聞いたときと同じくまどかだ。

「はうう……」

無言の圧力で行く手にいたさやかと仁美をよけさせると、真っ直ぐまどかの正面に立つ。

「ふえっ、なに……?」

「鹿目まどかさん。あなたがこのクラスの保険委員よね?初めてのクラスで少し緊張してしまって、気分が悪くなっちゃったの。保健室に連れて行ってもらえるかしら?」

その話し方ははっきりしており、気分が悪そうには見えない。仮

病、だろうか。しかしそうだとしたら、もう少し具合悪そうに演技をするものではないか？こんな態度で言われたところで、嘘にしか見えないはずだ。

しかし、実際暁美ほむらは保健室に行きたいと言っている。冷たい目で見つめられたまどかは問い詰める勇気も出なかった。

「えっと、保健室はこっち……」

まどかはビクツと立ち上がると、堅い動作で暁美ほむらに外を示し、案内するために教室から出て行った。

「なんだ、あいつ……」

さやかが小さく呟いた。

見滝原中学校の教室は、壁面すべてが透明な樹脂でできている。常に”見られている”という意識を持ち、生徒全員が授業に参加できるように、という考え方を元に設計された。目隠しが必要なときは一瞬で樹脂が濁るというスマートブレイン・ケミストリーの最新技術も投入されている。ちなみに机も電動式のただの板であり、生徒が出席すると飛行機のフリップのように跳ね上がった板が机に変形するというシステムのため、出席しているか否かが一瞬で判別できる。見滝原中学校には他にもたくさんの最新技術が投入されており、完璧な学習環境が整っているのだ。

つまり何が言いたいかというと、廊下の様子は教室から丸見えなのである。

すると当然、噂の転校生を連れて歩いているまどかは当然転校生と一緒に注目の的になるわけで。

全く気にしていない暁美ほむら本人はよいのだが、まどかはどちらかと言えば人の目が気になるタイプなので。

よって暁美ほむらを保健室に案内する途中のまどかは、自分の周りに集まる視線のために体が固くなってしまふ。しかも一緒にいる暁美ほむらは自分に並々ならぬ興味を抱いているようで、黙ったま

ま背後から突き刺さってくる鋭い視線がそれをさらに助長する。

ついにこの空気に耐えられなくなったまどかは暁美ほむらに話しかけてみた。

「あの……暁美さん——」

「ほむらでいいわ」

意外だった。話すのがあまり好きではないタイプだと思ったが、まさか自分の言葉を遮ってまで名前と呼ぶように言ってくるとは。しかもなかなか柔らかい口調だったため、不快感は全く感じなかった。

とはいえ出鼻をくじかれてしまったのは事実で、再び2人とも押し黙ってしまう。そのままE組の前を通り過ぎた。

保健室はC組の教室からはそこそこの遠い位置にある。F組を通り過ぎるまで廊下をずっと歩き、渡り廊下を渡って特別教室棟へ。すぐにある階段を1回まで下りると右手に保健室があるのだが、この渡り廊下がなかなか長いのだ。大きな窓から差し込む日差しが心地よく、生徒の憩いの場となっており、まどかもここが大好きだった。

黙りこくつたままF組をすぎ、ちょうどその渡り廊下の中程を通り過ぎたところだった。ほむらが不意に振り返り、まどかを真っ直ぐに見た。長い黒髪がふわりと揺れる。ほむらは、口を開いた。

「鹿目まどか、あなたは自分の人生が、未来が尊いと思う？ 家族を大切にしてる？ 友達は？」

余りに唐突な質問だった。転校生を保健室へ案内しているこのシチュエーションでは、100パーセント聞かれる可能性などない質問。学校での友達の会話としてもまず存在し得ない、あまりにもスケールが大きく、現実離れした質問。だが一方、ほむらそんな冗談を言う人間ではないということはまだ出会って1時間ちよつとしかたっていないまどかにも分かった。ほむらがこの質問を本気で答えて欲しがっていること。

そして、それを聞くためだけにここに来たのだろうか、という考えさえ浮かんできた。

ほむらはほかの人間ではなく、鹿目まどかに聞きたいのだ。

「えつと、ええつとね……」

だからこそ、真面目に答えよう。よく考えてから、ちゃんと答えよう。どんな意図で聞いてきたのかは分からないけれど、真摯にこの質問に答えよう。

「大切、だよ。家族も、友達みんなも、先生だって、大好きで、とっても大切な人たちだよ」

「本当に？」

「嘘じゃないよ。嘘なわけないよ。ほむらちゃんだって、そうでしょう？友達が、大切でしょ？」

このとき、まどかは初めてほむらの表情が変化するのを見たような気がした。だがそれがどんな表情だったのかさえ認識する暇もなく、ほむらはまた元の鉄面皮に戻ってしまう。

「そう」

それは、まどかの質問の回答としては成立しない。つまり、暗黙に答えたくないと言っているということだろう。

ほむらはその感情の宿らない冷たい口調のまま、言葉を紡ぐ。

「もしあなたの言ったことが本当なら、”今は違う自分”になるうたなんて、絶対に思わないことね」

——さもなければ、すべてを失うことになる。

それが何を意味するのか、まどかには何も分からなかった。”今とは違う自分”というものが何を指すのかさえ分からなかった。だが、そんな彼女にも1つだけ分かったことがあった。

それは、間違いなくそれは、

まどかへの、警告だった。

「ここまででいいわ。案内してくれてありがとう」

ほむらは未だに戸惑っているまどかを置いたままきびすを返すと、広い渡り廊下に靴音を響かせ、保健室の方へ歩き出した。そのまま真っ直ぐ渡り廊下を歩いてゆくが、まどかは中程で立ち止まったままだ。両手を胸元でもじもじとさせている。

やがてほむらが階段の方へ曲がると、もうまどかの姿は後ろに見えなくなった。まどかは何か聞きたいような様子だったが、結局ほむらを止めなかった。彼女は何かに耐えるように唇をかみしめながら、俯いて階段を下りてゆく。向かう先は、保健室。

階段を中程まで降りた、そのときだった。

「あつ、転校生だよね！！どうしたの、こんな所で」

不意に誰かに声をかけられた。

「こちらに来たばかりで緊張しすぎて、少し気分が悪くなっちゃったの。こっちに保健室があるのよね」

ほむらは先程クラスメイトに囲まれていたときと同じように、彼女にしては愛想良く僅かに微笑みを作って答える。その顔からは先ほどのつらそうな表情は微塵もなくなっていた。

彼女は、再び自らの心を隠す仮面を身につけたのだ。

「へえ、それは災難だねえ。まあ、ボクはトイレが混んでたからこっちに來ただけなんだけどさ」

「ありがとう。でもここまで歩いただけでもずいぶん気分が――」
ほむらは愛想笑いを浮かべて答えながら、話しかけてきた少女の顔を見る。

そのときのほむらの表情をまどかが見ていたら、飛び上がるほど驚いただろう。

話しかけてきた相手、南あかりの顔を見た瞬間に彼女の顔に浮かんだのは、本物の驚愕だった。

「え？何かあった？」

呑気に問いかけてくるあかりの両肩をほむらはがっちりと掴み、問いかける。既に、仮面はいつも簡単に砕け散っていた。

「何故あなたがここにいるの！？そんな、だって、あなたは、あなたはっ――！」

「ひゃあっ！？」

一方、血気迫るようなほむらの様子にあかりも驚いて大声を上げる。慌てて両手で肩に置かれたほむらの手ははずすと、

「え、な、何！？ボクなんかした！？」

「そんな、あなたは……！！だって昨日私確かにつ――！」

後ずさりながら、ほむらは誰にも聞こえないような小さな声で呟く。

あなたは、昨日魔女に殺されたはずなのに……！！

ほむらは踵を返すと、飛び降りるように階段を降りてゆく。まるで、恐ろしいものから逃げるように。

「え！？何！？何て言ったの！？ねえ、ちょっと、待つてよ！！」

慌ててあかりは声をかけたが、その甲斐もなくほむらは走り去ってしまった。

確認しよう。

先程、ほむらは『殺されたはず』のあかりを見て動揺した。だが、そのあかりに引き離されることで僅かに落ち着きを取り戻しつつあった。そして、自分が話している内容の危険性に気がついた。信じてもらえない可能性の方が圧倒的に高いが、一般人の前で”あの世界”の話をするのはまずい。そう思ったほむらは、なんとか最後の呟きを他の誰にも聞こえない音量までセーブした。

普通の人間なら、誰にも聞こえない音量まで。

ぽかんと1人残されたあかりは、そのままだらりと壁により掛かる。ほむらの足音がやがて聞こえなくなる頃、彼女は不思議そうに口を開いた。

「魔女に殺された」って、いったいどういう意味なんだろう…

…」

少女たちはまだ知らない。自らの体に、常識を越えた力が宿っていることを。

まだ、噛み合わない。確かに、少女たちを乗せた運命の歯車は、少しずつ動き出した。

だが、まだ噛み合わない。

それを合わせるのは、『繋ぐ力』を持つ、別の少女の役目なのだから。

「危なかったわね。でも、もう大丈夫」

第2幕『とっても大切な人たちだよ』（後書き）

なんかハイペースな自分です。

テンションが上がっているだけです。

さて、次回はみんな大好きなあの人が登場します（予定です）

もしお暇な時間がありましたら、次話も読んでいただけると嬉しいです。

お読みいただいておりますありがとうございました。

P・S・感想評価誤字報告文章訂正報告待ってます！！

第3幕『でも、その前に』（前書き）

第3話です。詰め込みすぎて長くなっちゃいました。
短くまとめる技術もつけていかなければなりませんね……

さて、今回はみんな大好きなあの人も登場！！

後、小さなサービスも入れていますので、楽しみに！！

第3幕『でも、その前に』

まどかはその2時間分の授業だけで、転校生・暁美ほむらは何でもそつなくこなす完璧人間だということを知ることとなった。

暁美ほむらが保健室から帰ってきたのは3時間目、英語の授業。すでにそこから、ほむらはその優等生ぶりを惜しまずに発揮させ始めた。

早乙女先生は転校生だからといって遠慮するタイプの教師ではなため、ほむらは初っ端から今日初めて習う『仮定法』の問題を掛けられた。だが、ほむらは焦る様子もなくとも簡単に答えてしまったのは。しかも教室の正面にある電子黒板——これもなかなかの最新技術が搭載されており、教材用の映像を流すディスプレイとしても使用可能。ちなみに白いので黒板と呼ぶのに違和感がある——にかかれたその回答は、まるで活字のように整った文字で綴られていた。

ついでに出展の問題集の表記ミスをも添えて。

そして4時間目の体育の授業、走り高跳び。早くも女子生徒たちが100メートル前後で脱落していく中、ほむらは女子では学年1位の運動能力を持つさやかと高さを競い合った。どちらも一歩も譲らない、激しい高さ争い（ただしさやかに対してほむらは競争心なし）の末、結局2人とも155メートルを跳んだところで時間切れとなり、勝負は引き分けに終わった。

だがそれは、クラスの生徒どころか教師陣にまで暁美ほむらの完璧度合いを示すのに十分すぎる結果であった。

なぜならそれは県内記録に後5センチまで迫る記録であり、明らかにほむらにはそれが突破できるほどの余裕があったからである。

そして、その昼休みのこと。まどかとさやか、あかり、そして仁美は、カフェテリアに集まって昼食をとっていた。

見滝原中学校カフェテリア。明るく光を取り込む作りと固定式の大きなすとテーブルが並ぶ姿は、ファミリーストランのような印象を与え。昼食をとるほかに友達同士の団欒の場や勉強のために利用する生徒も多く、休み時間はいつも多くの人で賑わっている。因みに無料サービスの紅茶とコーヒーは、なかなかおいしいことで有名である。

まどかは1時間目の後の休み時間、暁美ほむらを保健室に案内したときのことについて、他の3人に——特にあの後全く話す機会がなかったあかりに——話していた。

「——って言われたの。あかりちゃん、どういう意味が分かる？ わたしもさやかちゃんも仁美ちゃんも訳わかんないんだけど」

だがあかりはまどかの質問より他の部分に意識が向かったようだった。

「え？それってボクがC組に遊びに行ったときの？あの後ボク転校生に会ったよ」

「え、マジで!？」

さやかが驚きの声を上げる。

「何だっけな……ボクも『あなたは魔女に殺されたはず』だの何だの言われたなあ。……電波？」

その言葉を聞いたとたん、さやは、うがーっ、と大袈裟に頭を抱えて叫んだ。

「文武両道で才色兼備な噂の転校生、しかもその実はサイコな電波さん!!ちくしょお、どこまでキヤラ濃いのが転校生!!これこそが『ギャップ萌え』と言うもののなあ、そうなのなあ!!あたしもなんかキヤラ考えないと陰薄くなっちゃうーっ!!」

「さ、さやかさん……落ち着いて下さいな……」

慌てて仁美がさやかを抑える。

「でも仁美いー!!」

「大丈夫ですわ、さやかさんは十分キャラが濃いですもの」

「ありが……と？ってそれどういう意味!？」

「……それでまどかさん、本当に彼女とは初対面なんですか？」

「確かにね。聞いただけじゃ初対面にあるまじきなれなれしさだよ」

「うーん……まあ、一般常識的には初対面のはずなんだけど……」

「ちよつとあたしスルー!？」

さやかが何やら悲痛な叫びをあげた気がするが、そんなことよりまどかの発言の方がずっと気になるあかりと仁美である。

「常識的？じゃあ非常識な世界で知り合ったことがあるってこと？」

あかりの問いかけにまどかはこくりと頷き、おずおずと今日の朝見た夢について話し始める。

崩壊した見滝原市。

『魔女』。

謎の白い小動物。

そして滅びに立ち向かう、

暁美ほむらそつくりの少女。

「——って夢を見たんだよね……。つまり、」

「夢の中で逢った、ってこと？」

さやかが問いかける。

「そんな……ような……感じ、かな」

一瞬の沈黙の後。

「あはははははは！！」

あかりと仁美が大爆笑を始めた。

「ま、まどかさん、いくら何でもそれは……クククッ」

「ははは、まどかまで電波入ってきたよ！！」

「ふえっ！？ちよつと、ひどいよぉ！！わたし真面目に悩んでたのに！！！」

「ねえねえ、それってあれじゃない！？前世で2人は恋人同士だったとか！！ああ、遙かなる時を越えて、2人はついに巡り会ったんだよ！！運命の出会い、ボクも祝福するよ！！」

大笑いし続けるあかりに代わって、仁美が穏やかに問いかける。

「それで、夢の中でどういう風に出会ったんですの？」

「えつと、あんまりよく覚えてないんだよね……何だったんだろう……？」

まどかは首を傾げた。

「もしかして、まどかさんが覚えていなくても、どこかで暁美さんと会ったことがあるのかもしれないわね。それで、深層心理の中からたまたまその印象が引っ張り出されて夢になったのかもしれない」

「だったらそんなファンタジーな世界の中で出会ったのも説明できるかもしれないけど……。なんかできすぎのような気もしないなあ、それ。相当低い確率だと思うし」

「まあ、そういえばそうですね……って、どうしましたの、さやかさん？」

「へっ！？いやあ、あたしは、別に……」

そういえば、まどかが夢の話の切り出してから、さやかはずっと黙りこくったままだったのだ。

3人の注目が集まり、さやかは頭をかきながら口を開く。

「えっと、さ……あたしも、おんなじような夢……見たんだよね

……あ、あはは……」

「さやかちゃんも!？」

まどかが驚きの声を上げた。

「あたしには転校生は出てこなかったけどさ……。なんていうか、伝説の剣士、さやかちゃん!……みたいな夢」

若干あかりが身を引いた。

「ええ!？まさか転校生、まどかに続いてさやかにまで電波属性が有ったとは!！何？最近のはやり?」

「「電波じゃないよっ!！」」

「うわっハモった!？」

まどかとさやか椅子から立ち上がって大声で怒鳴った。しかも少々顔が赤くなっている。

「し、仕方ないでしょ!？そういう夢見ちゃったんだもんっ」

「そうそう!！それにあたしの夢なんてバッドエンドだったんだよ!？」

さやかに至ってはあかりに詰め寄る始末だ。

「まあまあ2人とも、落ち着いて下さいな。みんなから注目を浴びていますわよ」

仁美がなだめると、なんとか2人は落ち着きを取り戻して席に着いた。若干周囲からの視線が痛い、気にしてもしょうがない。

「あつ、そういえば」

仁美が鞆から自分の手帳を取り出してぱらぱらとめくる。

「今日は一緒に帰ることができなかつたと思いますの」

「何？今日習い事？」

「はい、たぶん……あつ、やっぱりすわ」

「それで、今日のは何？お茶？日本舞踊？」

「今日はお花のお稽古ですの。全く、そろそろ受験も遠くありませんのに、いつまで通い続ければよいのやら」

「うわっ、あたし小市民でよかったぁ……。そんな忙しかったら勉強できないよ」

「ふーん、じゃあさやかはちゃんと勉強してるんだあ？」

大袈裟に安堵のため息をつくさやかに、すかさずあかりが突っ込む。

「昨日、やっと英語の模試の過去問終わらせたんだよ！！あれは難しかったぁ……」

「模試っていつの？」

「3ヶ月くらい前にもらったやつ」

「さやかちゃん、それ提出2ヶ月前だよ……」

まどかが小さく呟く。明らかにその中には呆れの色が含まれていた。

「うっそお！？あんなの1ヶ月で解ける訳ないじゃん！！」

さやかが悲鳴を上げる。その大きな声に、再び彼女たちのテーブルにカフェテリアの生徒たちの注目が集まった。

「ホントだよ。まあ、ボクは手も着けてないけどね！！」

何が誇らしいのか、あかりは大きく胸を張った。胸自体は小さいが。

「さやかさんも、あかりさんも、ちゃんと勉強しなければいけませんわよ」

バカ2人組の発言に呆れながらも、仁美は至極当然のことを言う。
だがさやかは大きく手を振りながら、

「分かった分かったって！！ねえねえそれよりまどかとあかりは放課後暇？あたし行きたい場所あるんだぁー！！」

「どこどこ！？ボクは大丈夫だけどさ、どこ行きたいの！？ねえさやか教えてよ！！」

「わざとらしいですわ……」

仁美がため息をつく。

「ははは……わたしは大丈夫だよ？」

まどかは苦笑いしながらもさやかへの質問に答えた。

「よかったあー！！いやさー、放課後CD屋行きたいなって。新しいCD欲しいし」

「大賛成！！『クラリス』の新曲も出たらしいし。なかなか買いに行く機会がなくて困ってたんだよねー」

「わたしも賛成。しばらく行ってなかったしね。上条くんにクラシックのCD買っただけでしょ？」

まどかはいたずらっぽい笑みとともに答える。その中の『上条くん』という言葉にさやかはりんごのように顔を真っ赤にしながら、

「な、な、な、何言ってるのまどか！！あ、あいつなんてべ、別にただの幼なじみなんだって！！す、好きとかそんなんじゃないから！！」

「あつれえ？まどかは『上条にCDを買っていく』ってことまでしか話してないけど？どっから好きだっていう話が出てきたのかなあ？」

あかりがいやらしい顔でつんとさやかの腕をつつく。

「あーもう！！まどかとあかりのいじわるう！！」

さやかの顔がさらに赤くなり、両手を大きく振り回し始める。そして、

「……あ」

コーヒーを運んでいた1人の女子にぶつかってしまった。

幸い服にはかかっていないようだが、大きく床にコーヒーをぶちまけてしまっている。

「ご、ごめんなさいっ！！あたし——」

「いい。別に気にしていないし」

その女子——真っ黒なショートカットで、幼いながらも鋭さを秘めた顔つきだ——は無表情のままそう言った。おもむろにポケットからハンカチを取り出し、しみが付くのも気にせずにコーヒーを拭

き始める。さやかがあたふたしている間に、彼女はコーヒーをすべ
て拭き取ってしまった。

「あわわ、えっと、じゃあハンカチ洗って返すよ」

「大丈夫。気にしなくていい」

女子生徒は小さく微笑んだ。

「いや、あたしが気にするよ……」

「ああ、キミってそういうの気にする人？でも——」

口を開こうとした女子生徒を、あかりが右手をあげて制する。

「さやかに甘えときなよ、呉。さやかがしたいって言ってるんだ
し」

あかりが彼女の肩をたたきながら言う。

「あかり、あんた知り合い？」

「知り合いつていうか、クラスメイトかな」

「私、呉キリカ。南と同じF組だから」

そう言つて少女はさやかにハンカチを渡すと、すたすたと去つて
ゆく。

「変わった子ですね……」

「そう？話してみると結構いい子だし、クラスでも人気だよ？マ
スコットのポジで」

「マスコット、ねえ……」

4人が彼女の後ろ姿をちょうど見送つたところで、ちょうど昼休
み終了のチャイムが鳴り響いた。

見滝原市最大のショッピングモール、『日だまりの森』は見滝原
中からほど近い、この市のメインストリート沿いにある。今から1
年前にできたばかりの、新しい見滝原のコミュニティスポットだ。
アイスクリームショップやケーキ屋、書店、雑貨屋、スーパー、
ゲーセン、映画館、洋服店からレストランまで何でもそろう上に、
内装までも美しいこのショッピングスポットは、開店した1年前か
らずつと買い物中の主婦や下校中に寄り道する中高生たちでいつも

にぎわっている。

帰り道で寄り道したまどかたちも、もちろんそんな中高生の一部である。

入り口の自動ドアをくぐりながら、あかりはまどかとさやかに問いかけた。

「っていつても、どうする？いきなりCD屋行っちゃう？」

「うーん、あたしは今日は他に行きたいとこないんだけど。あたしたちは昨日も来たし。まどかはなんかない？」

「えっと、わたしちょっとおなかすいちゃったんだ。先にアイス食べない？」

その提案に、さやかは歩きながら答える。

「あたしはやめとこつかなあ。せつかく最近やせてきたんだし、ここでアイス食べちゃったら……って？」

「じゃまどか行こつか」

「うん。サーティツでいい？」

「ボク今日はダブルにしちゃおっかなあ」

「じゃあわたしはトリプル!!」

「全部食べれたことないくせに」

「わたし、今日こそ全部食べるんだ」

「だったらボクはシングルにしとこ。どうせ余るし」

「大丈夫だよお!!」

「ホントに？」

「今日は自信あるんだっ」

和気あいあいと喋りながら、さやかからずんずんと離れていく残り2人。その背中をさやかは見送りそうになって――

「……ねえ」

「何、さやかちゃん」

2人が振り返ると、さやかは苦笑いしながらと口を開いた。

「……やっぱ、あたしも食べるわ」

「はあっ……はあっ……はあっ……」

どこか、薄暗くて無機質な場所。

そこを必死に駆けてゆく、小さな1つの影があった。

新雪のように純白の体を持つそれは、天井で蛇のようにくねる配管の隙間をくぐり抜け、壁に沿って曲がり、猫のようになやかに体をくねらせて走ってゆく。

その白い体を掠めるように銃弾が飛び、わずかに削り取られた白い塊が宙を舞う。

それを放ったもう1つの大きな影もまた、それを追って必死に駆けてゆく。

長い漆黒の髪をなびかせて、澄んだ両眼を憎しみに歪めて。軍隊が用いるような仰々しい銃を構えて、ドレスのような服のスカートををはためかせて。その少女は走ってゆく。

再び銃弾が空を切り、白い体を浅くえぐり出す。

だが、どちらも足を止めない。

闇に落ちた迷路のような場所で、2つの影は走りつづける。

追うものと、追われるもの。

小さな影と、大きな影。

大きなものが、小さなものを追う。

だが、ものごとは見かけ通りとは限らない。

本当に追われているのは、どちらなのだろうか。

あちこちを傷つけられながらも無表情のまま逃げ続ける白き獣か。

それとも、悲痛な感情に顔を歪ませ、ただ獣をねらい続ける黒き少女か。

それは、誰にも分からない。

白い獣が心で願う。

ここにはいない、とある少女に出会うために。

本来心にもない言葉を、心に込めて、少女に届ける。

『助けて……助けて……』

いや、それにとつては”心”という表現も間違っているかもしれない。

だが、その言葉は間違いなく相手の心に直接触れる、まるで魔法のような魔の言葉。

『助けて……「鹿目まどか」!!』

その言葉を、まどかははつきりと聞いた。一度目は、空耳かと思った。CDショップで『クラリス』の新曲『connect』を試聴していた彼女は、ちょうどヘッドホンをつけていたため、単に周りの誰かが大きな声を出しただけだと思ったのだ。

だが、ヘッドホンを取ってもその声は変わらぬ音量で響いてくる。直接、頭の中に響いてくる。

さらに耳を塞いでも、全く変わらずに。

まどかにはもはやこの状態を『聞こえる』と判断するのも怪しくなってきた。まるで脳に直接音声データが入力されたような、そんな感覚。

『助けて……「鹿目まどか」!!』

「どこ?どこなの?どこにいるの?」

口からの声だけでその声に返事をできるかなど彼女には分からなかったが、まどかにできるのはそれだけだった。

その声がどこから発せられたかも分からない以上、声の主を捜しようがない。だからまどかは少し声を大きくする。あくまでも周囲

の客に不自然に思われないようなレベルで、だが。

「ねえ……どこなの!？」

次の瞬間。まどかの脳内に位置座標の情報が流れ込んできた。

声の主がいるのはこの階の一番北西にあるまだテナントの入っていないフリースペース。そこで声の主は、

重火器を持った少女に追われている!!

まどかはいてもたってもいられなくなった。

——誰かがこの近くで殺されそうになってるの!？

——それで、わたしに助けを求めてきたの!？

まどかは手に持ったままだったヘッドホンを放り投げて、声の主がいる場所へ向かって走り始めた。

なぜ自分だけ、しかも脳内に直接話しかけられたのか。そして、なぜ声の主がいる場所が瞬時に分かったのか。そんな疑問は、頭に浮かびもしなかった。

「……ねえ、あかり……」

あかりがポップスコーナーでCDを見ていると、クラシックコーナーへ行っただはずのさやかが青ざめた顔で話しかけてきた。

「あれ、どしたのさやか? いい曲無かった?」

「いや……そうじゃなくてさ……」

さやかは震える声で答える。何故か両耳を両手で塞いでは離すと

いう不思議な行為を繰り返しながら。

「なんか、聞こえない……？」

「何かって？」

「ほら……声みたいなのが……さ」

「そりや聞こえるよ。ここ人たくさんいるもん」

「そうじゃなくて……！……『助けて』みたいな声が聞こえない？」

「『助けて』、ねえ……」

さやかに言われて、あかりは耳を澄ましてみる。聞こえてくるのは、人の声。かけっぱなしの歌のPVとCM。レジスターの音。紙幣をめくる音。人の足音。エアコンの稼働音。飛んでいる虫の羽音。そして――

「……！？」

「ほら……聞こえるでしょ……！」

「それは聞こえないけど……今、遠くで銃声が聞こえた……！」

「銃声……！」

「きつと追われてるんだ……！さやかに助けを求めてたのはそのせいだよ……！」

慌ててあかりとさやかは走り出す。CDなんか買っている暇はない。

「どっちか分かる？」

「多分、こっち……！」

この2人もまた、事態の異常さに気がついていなかった。第一シヨッピングモール内で『助けて』などという声が聞こえるはずがな

い。さらに2人が聞いた音は違うものであつたし、あかりに至っては普通の人間には聞こえるはずがないわずかな音も聞き取れていたのだが。

そんなことには気づきもしなかった。

それは、ある意味少女たちの優しさのあらわれ。

誰かを助けたいという、純粋な気持ち。

だが、その優しさ、純粋さは彼女たちを幸福へ導くとは限らない。

運命の時は近い。

もうすぐ、3人の少女の運命の歯車は狂い出す。

今度こそ、希望に満ちた終わりは訪れるのか。

だが少女たちは止まらない。

ノックすらせずに、運命の扉を開く。

まどかはおそろおそろフリースペースへ繋がる扉に手をかけた。どうやら鍵はかかっていないようだ。

勇気を振り絞って、ドアノブをひねり、中へと飛び込む。

その内部は、思ったより味気ないものだった。イメージとしては、デパートの駐車場に近い。打ちっ放しのコンクリートで天井から床、柱までがすべて構成されている。周りにある窓から昼過ぎの太陽が差し込んでいるため、そこまで見暗いというわけでもない。天井にうねる配管も特におかしいところはない。

本当に、何も無いだけのフロアだった。

「どこ……？どこにいるの……？」 そんな部屋をおずおずと進んでゆく。既に声は聞こえなくなっていた。赤い消火栓のランプが目に入り、その部分がさらに明るくなっているのに気がつく。

その天井。ブロック状に並んだ配管整備用のパネルの1つが半分開いている。そこから、わずかな光が漏れていた。

まどかはそこをのぞき込もうとして――

ガタガタッ！！

「ひゃあっ！？」

そのパネルの隙間から、何かが降ってきた。床に降り積もっていた埃が舞って、よく姿が見えない。

だがまどかは、それこそが自分に助けを求めてきたものだと思感した。

「あなたなの……あなたが、私を呼んだの？」

『助……けて……』

再び、頭の中に響く声。間違いなくその声は目の前の何者かから放たれたものだ。

埃の霧が晴れる。声の主の姿が、ゆっくりとまどかの瞳に映る。それは――

「あなたが……」

ぬいぐるみのような、生き物。猫のようにしなやかな白い体は、周囲に僅かな光を放っている。狐のような、なめらかな尻尾。背中にある、赤い円いライン。犬のような両耳から、ウサギのような長い耳が伸びている。その先端は獣の手のようになり、先端がピンク色に染まっている。その耳の周囲に浮かぶように金色のリングが浮かんでいる。

その表情を見ただけでは、まどかは決してそれ（――彼？）が苦しんでいるとは思わなかっただろう。瞳はルビーのように無表情だ

し、唇は人形のように笑顔を浮かべたまま固まっている。

だが、その全身は傷だらけだった。

その傷は引き裂かれた布のように毛羽立っており、かなり痛々しい。苦しそうに体を上下させ、ぐったりと横たわっていた。

「ひどい……！！！」

まどかは慌てて彼を抱き上げる。

——温かい。それに、ぶるぶると小刻みに震えてる。

——見た目も、傷の様子もまるでぬいぐるみみたいだけど、この子はちゃんと生きている生き物なんだ！！

まどかは周囲を見回した。誰か助けを呼んだ方がいいだろうか。さやかやあかりに相談した方がよいのでは。

だが、彼はまどかだけに助けを求めてきたのだ。どういう仕組みかは未だにわからないが、周りの人には聞こえない声で、自分だけに助けを求めてきたのだ。

それには、理由があるはずだ。もしかしたら、まどか以外には見られたくないのかもしれない。

「やっぱり、わたし一人で……！！！」

まどかは白い小動物を抱えて走り出そうとする。
だが。

——1人で、どうするの？

その足が、止まった。

まどかはこの生物を知らない。それに知っていたとしても治療の手だてなど分かるはずもない。彼女1人でできることなど何もない。

自分1人では、ケガをした小動物1匹も助けることができないのだ。

自分の無力さに唇を噛む。

まどかが迷いを見せた、そのわずかな時間は、襲撃者がその場にたどり着くには充分すぎる時間だった。

ガコン！！

天井から爆音が響き、砕け散ったコンクリートの破片とおびただしい粉塵が辺りを舞う。

天井にぼっかりと口を開けた大きな穴から、1人の少女が飛び降りてきた。

何度目だろう。まどかが彼女の姿を見て息をのむのは。

「ほむら……ちゃん……？」

見間違えるはずもない。美しく整った、大人びた無表情な顔も。長くしなやかな黒髪も。

あの転校生、暁美ほむらのものだ。

だが、その姿にまどかは違和感を覚えた。

彼女が着ていたのは、今日の朝に見た滝原中の制服ではなく、もっとファンタジックな、コスプレともとらねない洋服だったからだ。

足全体を覆う黒いストッキング。シンプルでありながら少女性を感じさせる、フリルのついたミニスカート。胸元のリボンと鋭いエッジの効いたデザインが、アニメキャラのような印象を与えるモノトーンの上着。

そのすべてに、まどかは見覚えがあった。

——夢で見たのと、同じ……！！

そう。今彼女が纏っている衣装は、まどかの夢の中で暁美ほむらそっくりの少女が纏っていたものと全く同じだったのだ。

いや、あれはもしかしたら本当に暁美ほむらだったのだろうか？

「……そいつから離れて」

ほむらが唐突に口を開いた。学校で聞いたときと変わらない、まるで足元のコンクリートのような、冷たくて無感情な声色。

「でも……この子……ケガして……」

白い小動物は、今もまどかの胸の中で苦しそうに息をしている。まさか、ほむらがこれをやったのだろうか。まどかは頭に浮かんできた黒い直感を何とか押さえ込む。

だが、ほむらに彼を渡してはいけない、そんな感覚は否定できない

かった。

「だ、ダメだよ……」

ほむらの冷たい瞳に見つめられて、思わずまどかは目を逸らしてしまう。

「酷いこと……しないでっ!!」

否定したはずの黒い直感が再び頭をもたげる。やっぱり、彼女が彼を傷つけたのだ。

「あなたには関係ない」

ほむらは無感情に言い切る。その鋭さが、逆にまどかに声を上げる勇気を与えた。

「そんなこと無い!!だって、この子、わたしを呼んでた!!わたしに『助けて』って!!聞こえたんだもん!!周りの他の人には聞こえてなかった!!わたしだけに助けを求めてきたんだもん!!」
一息でそう言い切る。

ほむらは答えなかった。

ただ、冷たい瞳でまどかを見つめる。視線の鋭い槍に、わずかに自分に生まれた勇気が粉々に打ち砕かれてゆくのを感じた。

その瞳に見つめられて、まどかは自分の心の中を覗かれているような感覚がした。自分の未来を見られているような感覚がした。

「……………」

「……………」

ほむらは、話さない。

まどかは、話せない。

結局、どちらも口を開かない。

緊迫した空気が、2人の間に落ちる。

時間が、すぎてゆく。
沈黙。

ブシャアアアアッ!!

その沈黙を、唐突に吹き付けられた白い煙が破る。

その煙の中に、2つの人影が見えた。

「まどか、逃げるよ!!」

「あかりちゃん!？」

「まどか、こつち!!」

「さやかちゃんも!!」

あかりとさやかだ。

白い煙の正体はは、あかりの持っている消火器から発せられるものだった。それが煙幕のように作用している中で、さやかがまどかの手を引いてくる。

別にここにとどまり続ける道理はない。

まどかはさやかに手を引かれるままに、そこから逃げ出した。例の白い小動物を抱えたまま。

煙が晴れた頃には、ほむらの目の前には誰もいなくなっていた。

「どうして……」

ほんの先ほどまで鹿目まどかのいた虚空に向かって、ほむらは小さく問いかけた。

「何なのあいつ！？人に訳の分かんないこと言ってきた後はコスプレで通り魔！？頭おかしいんじゃないの！？」

まどかと並んで走りながら、さやかが悲鳴を上げる。全力を出せばもっと早く走れるのだが、それでまどかを置いていつてしまつては本末転倒だ。

それにまどかは何かぬいぐるみのようなものを抱えているため、うまく走ることすらできなそうな状態だ。抱えているのはあちこちが解れ、ぼろぼろになったぬいぐるみだ。だが、よく見るとそれは浅く息をしているのがわかった。

——こいつ、生き物？

「まどか、それ何！？ぬいぐるみじゃないみたいだけど！！生き物なの！？」

消火器が空つぽになったあかりも追いついてきた。

「分かんない……分かんないけど……さっき『助けて』って！！」

「この子の声だったの、あれ！？」

「そうみたい——ってさやかちゃんも聞こえてたの！？」

「やつぱり空耳じゃなかった！！」

「そんなことより、何とかしてこの子助けないと！！酷いケガだし……！！」

3人は闇雲に走ってゆく。だが、いつになっても出口どころか、窓や柱さえ見つからない。

唐突に、足元の感触が変わった。堅いコンクリートから、柔らかい土へ。

先頭を走っていたさやかが不意に立ち止まる。

「——ここ、何処？」

「何処って、テナント募集中の——あれっ？」
3人は辺りを見回して、やっと自分たち不自然な世界に迷い込んでいるのに気がついた。

堅いコンクリートの床も、辺りを包んでいた闇も、全く違うものになっていた。天井に至っては存在すらしない。

周囲に広がるのは、原色の、毒々しい色合いの花畑。それを包み込むように幾重にも巻かれた有針鉄線。それは茨のように畑の花々の中からみつき、幾多もの薔薇の花を咲かせている。遠くには中世ヨーロッパ調の時計台が無数にたっている。だが、そのすべてに立体感がない。張りぼてどころか、背景に描かれた絵のように見える。それは、近くに見える花畑についても同じ。奥行きがわからないわけではないのに、平面にしか見えない。感覚が狂ってゆく。

まるで、子供向けの絵本のようなカラフルで不思議な世界。だがそこに存在する少女たちが与えられるのは、夢ではなく悪夢だ。絵本のイラストを『夢の世界』と表現するならば、ここはさながら『悪夢の世界』だ。

「これ……薔薇園……？」
さやかがつぶやいた。

薔薇園。

その言葉に、あかりはぴくりと反応する。

——薔薇園……あれ？聞いたことがある。見たことがある。もしかして、ボクはここに来たことがあるの？

「さ、さやかちゃん……」
まどかが腰を抜かして転びそうになり、あわててさやかがその体を支える。

「どうしたの、まどか!？」

「あれ……あれ……」

魚のように口をぱくぱくさせながら、まどかは一番手近な垣根の方を指さす。

そこにいたのは、グロテスクな姿をした、謎の生物らしきもの。頭は綿埃のような灰色の毛玉。目や鼻に当たるような部分はなく、真っ黒な口ひげだけが唯一その顔に人間的な印象をわずかに与えている。

体は針金のように細く、糸のようにしなやかだ。だがその右手——それが本当に”手”ならばだが——には、自らの身の丈を越えるほどの巨大な高枝切りばさみを持っている。金属特有の冷たい輝きが、その鋭さを十分すぎるほど伝えてくる。

それは、蝶のような何かに乗っていた。オレンジと黒の鮮やかな羽根を持ったそれは、本来羽ばたいて使用するはずの大きな羽根をまるで足のように使ってこちらに歩いてくる。

その不気味な姿を見て、あかりの頭にとある言葉が浮かんできた。いつ聞いたか思い出せない、その言葉は——

「『口ひげの、庭師さん』——?」

『あはははははは……』

シャキン、シャキン。

いつの間にか庭師たちはあかりたち3人をぐるりと取り囲むように、無数に並んでいた。

その数、数十か、数百か。

まどかは恐怖に縮こまり、さやかはそんなまどかを抱き留めるものの、その体は激しく震えている。

だがあかりだけは、微動だもせずにとただ立ち尽くしている。

「あかり……ちゃん？」

やがて、あかりはふらりと何かに惹かれるように前へと歩み始めた。

ふらり、ふらりと。

庭師たちの鋭い刃の方へ。

「ち、ちよつとあかり、バカ、なにしてんの……！」

さやかの制止も、あかりの耳には届いていないようだ。

彼女の柔らかく白い首筋に、庭師の残虐なはさみが迫る。

「あ、危ないっ……！」

まどかはとつさに目を閉じてしまう。

——あかりちゃんが、死んじゃう……！！わたしの、目の前で……

ただあかりの肩を掴んで、引き戻すだけでいい。しかし、恐怖に体がすくんで、たったそれだけのことができない。

だから、死ぬ。

自分が臆病だから、あかりは死んでしまう。

——ごめんね、あかりちゃん——

——ソーレ・スペッキオ!!

刹那、まどかの目の前に黄金の光があふれた。固く閉じた瞼の隙間から入ってくるその光は、とても暖かくて。まどかは、ゆっくりと目を開ける。

「あぐっ」

こつん、という余りに場違いな音を立てて、あかりが黄色い光に頭をぶつけていた。

「えっと、バリア……?」

さやかが呆然と呟く。

「危機一髪、って所ね——でも、もう大丈夫」

後ろから暖かい声が響いた。

3人はすかさず振り返る。

同じ、見滝原中の制服を纏った少女だった。緩やかにカーブを描く髪の毛は辺りを包む美しい光と同じ黄金。慈愛と美しさを併せ持つおっとりとした顔立ちは、自分たちより少女が年上であることを意味していた。

美しい光のバリアの光源は、少女が大切そうに優しく掴んでいる、これもまた黄金の宝石にあった。

そしてこの少女もまた宝石と同じような人を安心させるオーラを放っている。

「あら……『キュウベえ』を助けてくれたのね、ありがとう。そ

の子は私の大切な友達なの」

「わたしたち、その、『キユウベえ』に呼ばれたんです。頭の中に直接声が……」

「なるほどね」

その言葉を聞いて、少女は優しく微笑んだ。

「ところでその制服、あなたたちも見滝原の生徒なの？」

「は、はい、2年生です」

あかりがどもりながら答えた。

「それで……あなたは？」

まどかが問いかける。余りに連続する非日常に混乱し、少々不躰になってしまった質問にも、少女は笑みとともに答える。

「そうそう、自己紹介しなくちゃね。でも、その前に——」

少女が大切そうに持っていた宝石を宙へ放り投げる。空中で回転しながら宝石はまばゆい光を放ち、完全に光の球と化す。

軽快なステップを踏みながらその光の球をキャッチし、両手で真正面にかざす。

「ちよつと一仕事、片づけておかないとね!!」

光の球の中から幾多の虹色の光の帯が噴水のように噴出する。それは少女の周りで綿密に絡み合い、輝く繭を形成する。

それは、スターのための準備室。まぶしい光に包まれながら、少女の衣装がみるみるうちに変化してゆく。

小さなヒールのついたシンプルな靴。膝までを覆う、茶色いニーソックス。ひまわりのように華やかな、黄色いミニスカート。ベルトのように巻かれた、純白のリボン。ドレスのように優雅な、クリム色のブラウス。美しい羽毛の装飾を持つ、紫色のベレー。

それはまるでおとぎ話から飛び出してきたような、幻想的な衣装。

少女が、土の床を蹴る。それだけで彼女は、自分の身の丈の数倍の高さまで飛び上がり、バリアから飛び出す。

周囲を取り囲んでいた庭師たちはすぐに標的を変え、少女に向かってはさみを突き出す。

シャキン、シャキン！！

たった一撃で人の命を刈り取るであるはさみを数百と向けられても、少女の顔から余裕が消えることがない。

「はっ！！」

空中にふわりと浮遊しながら、舞を舞うように美しく体をひねる。

すると、右の袖から。左の袖から。スカートの中から。ベレーの隙間から。

そして何もない虚空から、無数のクラシカルな銃が飛び出す。

マスカット銃。16世紀のスペインで開発され、19世紀半ばでライフル銃に取って代わられるまで、およそ3世紀半に渡って用いられた、先込式の長銃だ。

それが数百、数千、数万も生み出され、少女のコントロール下に置かれる。そして、

「ティロ・ピオツジャ！！」

彼女の力強い指示と同時に、全てのマスカット銃が火を噴いた。その無数の黄金の弾丸は技名のとおり雨となって庭師たちに襲いかかる。

銃弾が直撃し、炎をあげて爆散する。その炎は周りの庭師たちを巻き込み、さらに巨大な爆発と化する。

少女のたった1度の攻撃で、あんなに沢山いた庭師たちは全滅したのだ。

その炎の中に着地した少女の姿は、3人の少女たちが見てきたどんな風景よりも美しく、気品に満ちていた。

「はぁ……」

「マジか……」

「すっごい……」

まどかも、さやかも、あかりも、その光景に釘付けになり、目を離すことができなかった。

黄色いドレスの少女が奇妙な庭師たちを殲滅した直後、周囲の奇妙な空間が歪み、変化を始める。

そして、周囲の空間はもはや見慣れた、コンクリートがむき出しのフリースペースへと戻る。

「……やった、戻った!!」

歓喜の声を上げてさやかに抱きつこうとするまどか。

それを、静かな足音が遮った。

その足音の主は、

「ほむら……ちゃん……」

「鹿目まどか、あなたは——」

ほむらの台詞を、今度はドレスの少女が遮る。あくまで穏やかな優しい声で。

「魔女は逃げ出したわ。仕留めたいなら、すぐに追いかけてなさい。本体の方はあなたに譲ってあげるから」

「私は、あなたに用があるわけではないの。私が話したいのは――」

「飲み込みが悪いのね」

少女の声のトーンが低くなる。

「見逃してあげる、って言ってるの」

だが、その調子はすぐに元の穏やかなものに戻る。

「お互い、無用なトラブルとは無縁でいたいと思わない？」

ほむらは押し黙ったままだ。

やがて、小さく唇を噛み――いや、それはまどかの気のせいだったかもしれないが――ほむらはきびすを返すと、何処へともなく去っていった。

「ふああああっ……」

やっとほどけた緊張感に、まどかはへなへなと床に座り込んだ。

ドレスの少女の持つ宝石が放つ光が、辺りを明るく照らし出す。その光が白い小動物――キュウベえの全身の傷を、みるみるうちに癒してゆく。

「わっ、すごい……」

さやかがつぶやく。というか、ここ数分はそれしか口にしていなような気がしていた。

やがて傷が8割方完治すると、キュウベえはゆっくりと身を起こした。

『ありがとう”ママ”!!おかげで助かったよ!!』

あのときと同じ、頭の中に響く声。ただし今度は――

「おおっ!!ボクにも聞こえる!!」

あかりにもキュウベえの声が届いており、そのことに彼女ははしゃいでいた。

「いいえ、あなたを助けてくれたのはこの子たちよ。お礼はそちに言っておいてね。私は、通しかかったただだから……」

そう言われて、キュウベえがぴよこん、と音を立ててまどかたちの方へ振り返る。

『どうもありがとう！！僕の名前は”キュウベえ”』

「あなたが、わたしを呼んだの？」

それは質問というよりは確認。そして思った通り、キュウベえはうなずいた。

『そうだよ。”鹿目まどか”、それに、”美樹さやか”！！』

「え……なんであたしたちの名前を知ってるの？」

さやかが驚きの声を上げる。そういえば初めて呼ばれたときも自分の名前を言っていたな、とまどかは思い出す。

『実は僕、君たち2人をお願いがあつて来たんだ』

「お、お願い？」

「なによ、お願いって」

キュウベえが体をぴよこん、と傾ける。そして、今までそれほど傷を負っても変化しなかった表情を、満面の笑みに変えて、言った。

『僕と契約して、”魔法少女”になってほしいんだ！！』

「魔法……少女？」

「なんじゃそりゃ」

余りに突拍子もない上に訳の分からないことを頼まれて、まどかとさやかは困惑する。

「ああ、その説明なら私が――」

「ちよつと待つて」

ドレスの少女が話し始めようとするのを、あかりが遮った。

「何で”君たち2人”なの？ボクは？」

そう。キュウベえはまどかとさやかの名前を知っていた。そしてよくわからないが、その2人に対して頼みをした。だが彼はあかりについて全くふれていない。

あかりの質問に、キュウベえの体がぴくりと動いた。

「驚いたなあ、君も僕が見えるのかい？」

「そりゃあ。真っ白い体してそこに座ってるのが君でしょ？」

『おかしいな』

例によつてキュウベえの表情は変化しないが、その声色には困惑が混じっていた。

『実はね、僕に関わるためにはとある”素質”が必要なんだ。そしてそれがない人間には僕の姿は見えないし、声も届かないはずなんだけど。鹿目まどかと美樹さやかにはそれがあつたから僕の声が聞こえたし、僕も君たちの名前を知ることができたんだよ』

だけどね、とキュウベえは言葉を切る。

『悪いけど、君からは全く”素質”を感じ取れない。ここまで無い人間は他に見たことがないんだ。そんな君が、何故僕の姿を見ることができんだろう？』

つまりどうということなのか、あかりには理解できなかった。結局自分は特別な人間なのかどうかさえ、はっきりしない。

話によれば”素質”がある人間の方が特殊なようだが、自分にはそれが無いのに”素質”がある人間と同じようになっている、ということだろうか。

『とにかく、君は実に興味深い存在だ。名前を覚えてくれないかな』

「南あかり……だけど」

『南あかり、というんだね。改めて、僕の名前はキュウベえっていうんだ。これから、よろしくね!!』

そう言つと、再びキュウベえはにっこりと笑った。

ついに運命の歯車は絡み合い始めた。

後はもう、止まらない。

少女たちにはこれから、運命というものに傷つけられ、苦しめられる未来が待っている。

そこを生きてくぐり抜けられる者は、何人いるだろうか。

わずかだが、すでに歴史は狂い始めた。

本来進むはずである航路を外れつつある。

この歴史がたどり着く結末は、

希望に輝く未来か。

絶望に墜ちる未来か。

ただ、1つだけ言えることは、

物語はまだ、始まったばかりだということである。

第3幕『でも、その前に』（後書き）

というわけでいろいろ初登場な第3話でした。

というか都合上マミさん名前出せなかった……

後中盤のあの娘はファンサービスと考えていただければ。

後は少しずつどんな時間軸ともずれていることを示すためでもあります。

この時間軸ではあの娘ははがない状態ではない。つまり――？

さて、もしお暇な時間がございましたら、次話も呼んでくだされば。

後感想評価誤字報告等も待ってます！！

例のあの人の厨二病は5割増……

第4幕『どんな願いでも』（前書き）

さて、第4話になります。

基本的に本編を追っているこの頃ですが、少しずつ違いを入れていきます。

それが先の話にどう影響してくるか――

第4幕『どんな願いでも』

「自己紹介が遅れちゃったわね。私、巴マミ。あなたたちと同じ見滝原中学の3年生よ。あ、クラスはB組ね」

夕方のシヨッピングモール、テナントも入っていない薄暗い空間のなかで、少女——巴マミは振り返り、まどかたちに向かって小さく微笑む。

「そして——」

その肩に、ぴよこりと白い小動物、キュウベえが飛び乗る。

「キュウベえと”契約”した”魔法少女”よ」

あのシヨッピングモールの一件が終わった後、マミはまどかたちを自分の家に招待した。本人曰く、

「余りに多くのことを一気に説明されても混乱しちゃうだろうしね。ゆっくり順を追って説明しておこうと思って」

ということらしい。

というわけで3人はマミに連れられて、夕暮れの道を歩いていた。

「あ、あの化け物はいったい何なんですか！？それにあの変な世界も、後巴さんのあの力も！？”魔法少女”って……！！」

「落ち着いて、美樹さん。家についたらちゃんと話すから。後、下の名前で良いわよ」

矢継ぎ早に問いかけるさやかを、マミが微笑みながらたしなめる。

「でも、えっと、マミ……さん」

「何？南さん」

「ボクたちとしてはあんなことをいろいろあるともう頭の中それで一杯で力オス状態です……。そうなってる時にじらされるのはちよつと……」

あかりは少し遠慮がちだが、やはりマミを急かしている。

「ごめんなさい、じらしているつもりはないのだけれど、これは落ちて話した方がいいことなの。大丈夫、もうすぐ着くわ。そうそう、ケーキもあるのよ」

「ケーキい!？」

あかりが顔を輝かせる。

「あかりちゃん……」

「うっさいな、ケーキは別頭なの!!」

「別頭って……」

テンションが高めの2人に押されて控えめになっているまどかだが、やはり彼女もまた、はやる気持ちは抑えきれない。じれったそうにマミに問いかける。

「……それで、マミさんのお家って、どの辺りにあるんですか？」

「もう少ししたら見えてくるけれど、マンションなの。なかなか綺麗で気に入ってるわ。——ほら、見えてきた」

マミが指さす先を見ると、その先にあったのは一軒のマンション。なかなか新しい建物のように、上下するエレベーターの見える、夕日を反射して輝いているガラス張りの塔を中心に、左右にいくつか部屋が並んでいる。全部で10階建てで、屋上にはベンチのようなものも見える。入居者が自由に使えるようになっていたようだ。

「おおっ、綺麗なマンション!!」

さやかがマンションを見上げて驚きの声を上げる。だが、

「でもさ、あかり……」

「あかりちゃん、ここって……」

「は……はは……」

まどかとさやか苦笑いしながらあかりの方を振り向く。そのあかりも、やはりひきつった笑いを浮かべていた。その3人の様子を見て、マミが怪訝そうな表情を浮かべる。

「南さん、どうしたの?ここじゃ嫌だったかしら」

「いや、そんなことはないんですけど……は、ははは……」

「それなら、どうしてお茶を濁すの？何か私悪いことしたかしら。そうだったら謝るけれど……」

「いや、ホント、どうってことないんですけどね……。ただ、」

あかりはマンションを見上げる。

「ここ、ボクの家なんですよね……」

「驚いたわね。南さんも寮に住んでいたなんて」

マミの部屋にまどかとさやか、あかりの3人が落ち着くと、マミはそうあかりに語りかけた。

以前にも述べたとおり、見滝原中学校の寮とはこのマンション、『ステッラ』の8階部分のことである。マミの部屋は809号室。あかりの部屋は807号室なので、彼女はずっとあかりの隣の隣の部屋に住んでいたことになる。

「いやあ、ボクも驚きましたよー。寮に住んでるのって、全校でも3人だったはずですね。こりやもう運命の出会いですって！」
マミの両手をつかんで、あかりはぶんぶんと振り回す。マミが少し迷惑そうな顔をしているような気がしないでもないが、この感動を彼女と分け合うためにはなら、あかりにとってはそんなこと些細なことにすぎない。

その隣でさやかもまた、マミの出してくれたチーズケーキを頼張ってご満悦だ。

「いやいや、めちゃくちや旨つすよ、このケーキ！何処で売ってるんですか！？あたし今度買いに行きたいんですけど！！」

「それは自家製よ」

未だにあかりに両手を掴まれたまま、マミが答えた。

「私一人暮らしだし、極力自炊するようにしているから、結構料理も得意なのよ」

「あかりとは大違いだねっ！！」

「うう……否定できない……」

マミの部屋はとてもきれいだっただ。今4人がついているガラステーブルにかかったテーブルクロスも真っ白だし、床には埃もない。戸棚や家具類もきれいに整頓されている。決してものが少ないわけではなく、女の子が好きそうなポップなデザインのクッションやぬいぐるみも数多く並んでいるが、不思議と壁や家具のデザインとマッチし、ごちゃごちゃとした印象を与えない。

ちなみにあかりの部屋は……

この部屋の中に小学1年生を3人ほど投入し、2時間好き放題やらせた後、といったたとえば一番近いだろうか。

ここ数週間ほど、あかりはちゃんとした部屋の片づけをしていない。

しばらく雑談を交わして打ち解けた頃に、キュウベえが『そろそろ説明をしなくて良いのかい』と問いかけてきた。

「そうね。南さんは一人暮らしだから大丈夫だと思うけど、鹿目さんと美樹さんは時間の問題もあるものね」

マミが改めていすに座り直すのにあわせて、まどかたちの表情も少し固くなる。

「じゃあ、説明を始めるわね」

「まずは、これから説明しようかしら」

マミが自らの左手を他の3人に見せる。中指の爪の部分に、雫型の黄色い紋章が刻まれていた。

「ちよつと、見ててね」

マミの宣言と同時に、雫型の紋章から小さな光の球体が飛び出す。それは空中でみるみるうちに大きくなり、ピンポン球大の黄色い宝玉へと変化した。夕方の柔らかな光を浴びて、きらきらと輝いている。

「わぁ……きれい」

「これは”ソウルジェム”」。キュウベえと契約した女の子が生み出す宝石で、魔法少女たちの力の源よ。ソウルジェムを持っていること。それこそが魔法少女の証でもあるの」

「あれですね、マミさんが変身につかったやつ」

「そうよ。これから出る光を浴びると、私たちは魔法少女になることができるの」

「”契約”って何なんですか？」

まどかの問いかけに答えたのは、マミではなくキュウベえだった。『僕はね、君たちの願い事を何でも一つだけ叶えてあげることができるんだ』

「ええっ、本当に!？」

あかりが驚きの声を上げた。

「ど、どんな種類の願い事でも？」

『何であろうと構わないよ。願い事によっては神の奇跡に匹敵するものまで起こすことだって、不可能じゃない』

キュウベえのその言葉に、さやかは頭を押さえて何かを考え始める。

「何でもって、金銀財宝でも？」

『できるよ』

「世界一の美貌とかは？」

『簡単さ』

「スーパームテモテ逆ハーレムな人生も？」

『もちろんだよ』

「じゃ、じゃあ酒池肉林も！？」

「さ、さやかちゃん……」

「せ、世界征服とか！！」

「あかりちゃんまで……」

『全くもって問題ないよ。でもね、その代わりにソウルジェムが産み出される。この宝玉を手にした者は、“魔女”と戦う使命を課されるんだ』

“魔女”……？

まどかの耳に、妙にその響きが残った。何だろう。ごく最近に、その言葉を耳にした気がする。いや、耳にただけではない。確かに自分は“魔女”という存在に関わった——そんな気がしていた。同時にあかりもまた、今日の午前中の出来事を思い出していた。あなたは、魔女に殺されたはず——あの謎の転校生、暁美ほむらは確かに彼女に向かってそう言ったのだ。彼女にしては不自然な動揺と共に。

「魔女って何なの？魔法少女とどう違うわけ？」

まどかとあかりがそんな様子なのを知ってか知らずか、さやかが呑気な口調で問いかける。

『“願い”から生まれるのが魔法少女だとしたら、魔女は“呪い”から生まれる存在ということになる。魔法少女が周囲に希望を振りまくのに対し、魔女は絶望を振りまく。ある意味魔法少女とは対極の存在だ。しかも魔女たちの姿はふつうの人間の認知能力では確認することが不可能だからたちが悪い』

あからさまに“悪”と分かる存在の提示に、自然と少女たちの表

情も堅くなる。

『過剰な不安や猜疑心、嫉妬、裏切り、不和——そういった災厄の種とも言えるものを、世界中へまき散らしているんだ』

「理由のはつきりしない自殺や殺人事件なんかは、たいてい魔女が生み出した呪いが原因なのよ」

キュウベエの後を引き継いだマミの表情もまた、嫌悪感を示すように歪む。

「形のない悪意となって、人間の心を内側から蝕み、食い潰してゆく」

「そんな、悪魔みたいな奴らがいるのに、どうしてみんな気づかないの……？」

さやかが悔しそうに唇を噛む。人一倍正義感の強い彼女からしたら、そのことに納得できないのだろう。

『魔女は常に自らの周りに”結界”を張ってその中に身を潜めているんだ。絶対に人前には姿を現さないんだよ。さつき君たちが迷い込んだ、花畑のようなあの場所が”結界”だ』 「結構ギリギリのところだったのよ……あそこに迷い込んだ人間は、普通は生きて帰ることなんて出来ないもの」

「マミさんは、そんな化け物みたいな奴らと戦ってるんですか……？」

先ほどのマミの言葉に肝を冷やしたあかりは、彼女に尊敬のまなざしと共に問いかける。

「そんなのと戦ったら、命が危ないんじゃない……」

まどかの声からもまた、ふるえが抜け切れていない。あの”庭師”たちの恐怖が蘇る。

「そう。命懸けよ。だからあなたたちもキュウベエと契約するしかないかは、慎重に決めるべき」

マミはまどかとさやかに向き直る。

「鹿目さん、美樹さん、キュウベエに選ばれたあなたたちにはど

んな願いだつて叶えることのできるチャンスがある——」

そこでマミは言葉を切る。その表情が険しくなる。経験から来る忠告。マミの言葉が間違いなくそれであることを、彼女の表情が物語っている。

「でも、その願いを叶える、ということは、死と隣り合わせの世界へ自分から飛び込む、ということなの」

「ふえ……」

まどかの口から小さな音が漏れる。つまり、願いを叶えることに対しての代償はそれまで大きいこと——まどかはその事実に怯えた。

「そ……それは……悩むな……」

さやかは窓の外を見つめる。

厳密にはその先に見える、とある病院を。

「願いが叶う」と言われてすぐさま彼女の頭に浮かんだ一つの願い。だがそのために自分が命を捨てられるか、そう問われると、さやかはそのために命を捨てられるほど強くはなかった。

「ふーん……」

なんとなく蚊帳の外にいるあかり。魔法の世界に遭遇したもの、彼女にはやはり現実感を感じられなかった。しかも自分はキュウベえに選ばれたわけではない。現実感が無いのは自分に迫ってこないからこそこかもしれない。

「そこで提案なんだけど」

黙り込んでしまった3人を元気づけるためか、マミが明るい口調で話しかけた。

「みんな、しばらく私の魔女退治に付いてきてみない？」

「ええっ!？」

まどかとさやか、あかり。3人ともが素っ頓狂な声を上げた。

「魔女との戦いがどういうものになるか、きちんと見てからでも、判断は遅くないんじゃないかしら。後、南さん」

「はい？」

自分に声をかけられると思っていなかったのか、あかりは不思議そうな声で返事をした。

「もちろん、魔女退治の時はあなたたちを全力で守るわ。でも、確かに危険であることには変わりない。しかも、残念だけれど、キユウベえに選ばれていないあなたは、契約できないかもしれないの。ただの無駄足になるかもしれない。だから、もし嫌だったら素直に言ってちょうだい」

「……………」

その言葉に、あかりは黙り込んでしまった。ママはそのまま再びまどかとさやかの方に振り返る。

「あなたたちと同じ。申し訳ないけれど、魔女の結界の中では絶対に安全とは言い切れないわ。もちろん、あなたたちを傷つけさせはしない。でも、すごく怖い思いをさせてしまうかもしれないの。嫌だったら、断ってもいいのよ」

「えっと、わたしは……………」

まどかが答えようとして、口ごもる。

「焦らないでいいわよ。ただし、もしあなたたちに叶えたい願いがあるのだとしたら、魔女との戦いがどんなものか、それを見てから決断することね——」

ママがふと虚空を見つめた。その瞳に寂しげな表情が浮かぶ。

「その願いに本当に命を懸けるほどの価値があるかどうか、というところよ」

10分が過ぎた。

マミの先ほどの言葉の後から、火が消えたように皆が口を閉じてしまったのだ。3人の少女たちは、何度も頭の中でマミの言葉を反芻する。

——” 願 い ”

——” 魔 女 と の 戦 い ”

この2つを、天秤にかける。まさに命を懸けて叶える願いなのだ。そう簡単に決断できるはずもない。

魔法少女になるか、否か。それだけで自分たちの未来が、運命が決まってしまうようなものだ。答えなど簡単に出せるわけではない。

マミの部屋に、沈黙が落ちる。

まどかとさやかは難しい表情で考え込んだまま、ぴくりとも動かない。あかりもそんな2人を心配そうに見つめながらも、願いについて考える。マミの言葉から推測すると、キュウベえを見ることができ、声を聞き取ることの出来る者を”キュウベえに選ばれた者”というらしい。しかもマミの口振りからすると、キュウベえに否定されてはいるが、契約できる可能性があるようなのだ。

そう思ってしまった以上、願いについて考えずにはいられない。

マミはそんな彼女たちを見守るように、キュウベえはいつもどおりに、笑顔を浮かべて座ったまま待っている。

まどかは顔を伏せて、さやかは両手で顔を覆って、あかりは頬杖をついて。

考えたまま、どのくらい時間が過ぎただろう。

「あーだめだあ！！やっぱ決めらんないっ！！」

さやかが急に大きな声を出して叫んだ。びくりとするまどかとかかり。さやかは再び頭を抱え込むとテーブルに突っ伏してしまった。だが、その行動に少し緊張がほぐれたのか、まどかも小さく口を開いた。

「駄目だよ……わたしも、決められない……」

「だからこそその見学、よ。大丈夫、絶対守るわ。今日の私のバリア、見たでしょ？」

「バリア……」

マミがまどかたちを助けに来てくれたとき、彼女たちを包み込み、助けてくれた黄金の光を思い出す。

あの庭師たち——あれが”魔女”なのだろうか？——から彼女たちを守ってくれた頼もしい戦士。

「あれ、”ソーレ・スペッキオ”っていうのよ。私が名付けたの。イタリア語で”太陽の鏡”って意味なの。格好いいでしょ？あんなに綺麗で、しかも防御力は抜群なのよ」

太陽の、鏡。

そう、あの時のママの姿はまさに太陽だった。『魔法少女たちは希望を振りまく』。そんなキュウベえの言葉を思い出す。

自分もそんな存在に、なれるかもしれない。

「鹿目さんも美樹さんも、それから南さんも、あなたたちの安全は、私が保証するわ。さっき言ったように、あなたたちは魔女との戦いがどんなものか知ってから決断すればいいのよ。怖くなつてしまったら、契約しなければいいわ」

願いは、見つからない。でも――

まどかは顔を上げた。ふと横を見ると、そこにはさやかとあかりの笑顔。

「まどか、あんたも同じ考えみたいだね」

「ボクも付き合うよ。それに少しでもチャンスがあるなら、考えておいた方がいいと思うしね」

――まだ、契約するほどの勇氣は出ないけれど。

3人は口をそろえて、言った。

「マミさん、魔女退治、付き合わせてくださいー!!」

少し見るくらい大丈夫だろう。そんな甘い考えとともに――

明日の放課後にカフェテリアで会う約束をして、あかりたちはそれぞれの家に帰って行った。

自らの部屋に1人残されたマミは、それからずっと部屋に立ち尽くして、まどかたちが食べていったケーキの皿と紅茶のカップを見つめていた。

ふと、傍らのキュウベえに話しかけた。

「ねえキュウベえ、聞きたいことがあるのだけれど」

『なんだいマミ？改まって』

身を翻し、マミはキュウベえがちょこんと座っているソファの前に正座で座った。

「単刀直入に聞くわ――南さんに、魔法少女の素質はあるの？」

『無いね。全くのゼロだ』

キユウベえは余りにもあつさりと答えた。

『それは君も分かっていたはずだろう？』

「……………」

『逆に僕が聞きたいくらいだよ。なぜそれを知って南あかりを見学に誘ったんだい？彼女が魔女のことを詳しく知ったことで、君の仲間になることは絶対にあり得ない。それを君は知っていたはずだ』

「……………そうね」

ママが黄昏時をすぎ、暗くなった窓の外を見る。町の灯りもとまり始めた。そんな見滝原市の夜景の向こうにあるのは、隣町の笠置野町である。

ママはとある少女のことを思っていた。かつて自らのことを先生のように慕い、ともに戦った、がさつで乱暴者な、どこまでも純粹で心優しい少女のことを。

初めて出来、初めて失った仲間のことを。

「たとえばいつかは引き裂かれる運命だとしても、その”いつか”を引き延ばしてあげたかったから、かしらね」

マミは、ぽつりと言った。

それを見つめるキュウベエの表情は、いつもどおりぴくりとも動かなかった。

翌朝。

あかりはマンションの自室の扉の鍵を閉めて、外に出た。一昨日から付いてしまった早起き癖で、今日も朝の洗濯までばっちりである。

後は学校へ向かうだけ――

ふと、エレベーターへ向かうあかりの足が止まる。

809号室。ドアの隣にかかっている表札には『巴』、とある。

あかりは体を堅くすると、おずおずとチャイムへ手を伸ばした。

唾を飲み込んでから、チャイムを、鳴らす。

軽快なメロディが鳴り響く。

だが、何時まで待っていてもママは出てこなかった。あの真面目で生活力のありそうなママのことだ。少し早起きが出来た自分などよりも先に学校に行ったのだろう。

2分ほど待つてから、あかりはエレベーターホールへ入り、ボタンを押してエレベーターを呼ぶ。

——ボクは今、ほっとしてるの？

昨日、家に帰った後のことを思い出す。

部屋に帰って一息付いたとき、聞こえてきたのだ。

ママの声が。

もちろん、そんなことはあり得ない。

あかりの部屋は、ママの部屋の隣の隣だ。しかもこのマンションはスマートブレイン・ビルディングの最新の防音設備が整っている。今までだって隣の部屋の音さえ、聞こえはしなかった。ましてやママの部屋の音なんて、真夜中にオーディオの音を最大にしたとしても、鳴っているという事実さえ分からないだろう。

だが、あかりにはママの声が聞こえたのだ。

キュウベえに自らの資質の有無を訪ねる囁き声が。

キュウベエの声は聞き取れなかった。だから、彼がなんと答えたのかは分からない。

キュウベエはどう答えたのだろうか。やはり、自分には資質が無いのだろうか。

——いや、だから違つて！！聞こえるはずないんだつてば！！

やってきたエレベーターに乗ると、あかりは軽く自分の頭を殴つて、考えを一度清算する。

マンションの構造上、隣の隣の部屋の人間の囁き声など、聞こえるはずがないのだ。

マミの声など、聞こえるはずがないのだ。

ならば、あれは何だ？

自らが、マミへの疑念から生み出した妄想か？

それとも、単なる空耳なのか？

いくら考えても分からない。だからあかりは、

「あー駄目だあつ！！考えてもわっかんないやー！！」

考えを押し込めることにした。

目を背けることにした。

あかりはエレベーターが一塊に到着すると同時に走り出し、エントランスの自動ドアから外へ飛び出す。

彼女を迎えてくれた雲一つない澄みきった青空が、押し込めた悩みを忘れさせてくれた。

見滝原公園で、さやかと仁美は残りの2人を待っていた。

「ふぁ……」

仁美が少し眠たそうにあくびをした。

「あれ、珍しいね、仁美が寝不足だなんて」

「……昨日は少々遅くまで、友人に勧められた本を読んでおりましたので、あまり眠れておりませんの」

「へえ、なんて本？」

「『零の運命』ですわ。」御崎海香「という方の本ですの」

「みさ——？ゴメン、あたしあんま本読まないから知らないわ」

「いえいえ、あまり有名な方ではありませんもの。でも、これがないかな面白いんですよ。さやかさんも読んでみますか？」

仁美は肩に掛けていたスクールバックを下ろし、ガサガサと漁り始める。

「い、いや、あたしはいいわ。字ばかりの本って苦手なんだよね」

「……あら、そうでしたわね。残念ですわ」

「まあ、マンガとかドラマとかアニメとかになったら見るわ」

「それはちょっと——」

「おい、さやかー!!」

さやかが自分を呼ぶ声に振り返ると、あかりが走ってくる場所だった。後ろにはいつも通り穏やかな笑みを浮かべたまどかもいる。そして、その肩に――

「うげっ」

『おはようさやか。いきなり』うげっ』はさすがに酷いんじゃないかい?』

満面の笑みを浮かべたキュウベえが乗っかっていた。その予想外すぎる登場の仕方に、さやかは本気で驚いていた。

『確かに驚いたのは分かるけど、いきなりそれは……』

「たははは、ごめんごめん」

「――さやかさん、誰とお話しておりますの?」

仁美が不思議そうに訪ねてきた。当然だ。キュウベえの声は彼女には聞こえない。それ以前に姿さえ見えないのだ。

「あ、えっと、あ、あははははは……」

――やっぱ、どう説明しよう。まどかと話してたことにしようか? いや、まどかが喋ってたなら仁美にも聞こえてたはず――もちろん、あかりも同じだし。ならばいっそのことキュウベえについて説明しちゃおうか――ダメだ、仁美には見えないんだから、それじゃあたしがただの痛い子になっちゃう!!

『さやかちゃん』

「ふええええっ!?!」

突然、さやかの頭の中にまどかの声が響いた。

『なんかさ、頭の中で考えるだけで会話できるみたいなんだよね』
今度はあかりの声が響く。

『ええっ、頭の中って……！？まさか、早くもあたしたちの中でそんなマジカルな能力が覚醒しちゃったの！？』

あかりの言葉通り、さやかが頭の中でそう伝えたいと考えたと、その言葉は音にならずにあかりたちへ伝わった。

『そうそう、ボクたちはもうテレパスに——』

『違うよ。第一あかりにはさっき説明したばかりじゃないか』

『冗談だよ、冗談。全くキュウベえは空気読めないなあ』

『今はキュウベえが間を取り持ってくれるから伝わってるだけなんだって』

あかりとキュウベえが睨み合いを（ただしあかりが一方的に）始めたタメ、まどかが代わりに説明してくれた。

『つまり、キュウベえが近くにいる間だけ、わたしたちは頭の中だけで会話ができる、ってこと』

『凄いやねえ、ボクとしてはこれだけで十分魔法少女な気分なんだけど』

『魔法少女になると使えるようになる魔法は、こんなものじゃないよ。でも、これだけでも内緒話か何かには便利だろう？』

『……なんか、変な感じ……』

志筑仁美は、驚いていた。
なぜなら……

彼女の親友である鹿目まどかと南あかりが熱っぽい視線を交わし、

もう1人の親友である美樹さやかがそれを”羨ましそうに見つめている”のだから。

——こ、これは何ですの！？あんな、あんなに熱い視線を交わしてっ！！まどかさんとあかりさんはいつの間にかそんな関係に！？しかもそれを羨ましげに見つめるさやかさん……！！これは、まさか”アレ”ですよ！？最近両親にばれないようにこっそり毎週書店で立ち読みしている”あのシチュエーション”の女性版っ！？しかも……間違いありませんわっ！！これは……三角関係っ！！どうしましょっつ、最近話の合うメガネの高校生の方に出会ったばかりですのに！！これはあの方に相談しなくては！！たしかおしろ……ああっ、お名前を忘れてしまいましたわもったいない！！あっ、さやかさんがまどかさんの肩に手をのばしていますわっ！！こ、これはたぶん私の見立て通り、いや、間違いありませんのっ！！これはまさに——

「禁断の関係っ！！ダメですわ、女の子同士でなんてっ！！それは、許されてはならない、禁じられた愛の形ですよーっ！！」

仁美はたまらず走り出した。

後ろからまどかたちが仁美を呼ぶ声が聞こえるが、振り返ってはいけない。彼女にあの愛を否定する資格などないのだ。これから厳しい道が待っていることは想像に難くない。でも親友である仁美は間違いなくそれを応援してゆかなければならないのだ！！

「どうしちゃったんだ、仁美？」

「わたしにもわかんないよぉ」

「あ、仁美バッグ忘れてってる」

誤解が解けたのは、教室についてからだった。

『……っていうかさ、あんた学校にきて大丈夫なの？』

なんとか仁美の誤解を解いた後、さやかは自分の席に着くと頭の中でキュウベえに話しかけた。

『なぜだい？』

『だって、あんた転校生——暁美ほむらに命を狙われてんじゃないの？何でわざわざ近くに行くのよ？』

暁美ほむら。昨日C組にやってきた転校生。そして——マミ以外でさやかたちの知っている、唯一の魔法少女。

昨日の出来事が蘇る。

さやかがあかりとともに駆けつけたとき、ほむらは一瞬だけこちらを向いた。その鋭い視線が忘れられない。憎しみや怒りなどを超越しているような、あくまで氷のように冷たい瞳。

その暁美ほむらが、この教室にいる。

そう。今もほむらはまどかの方を、厳密に言えば彼女のバッグにちょこんと腰掛けているキュウベえを睨みつけている。——いや、もともとそういう目つきなのか？

『だからこそだよ、さやか』

キュウベえの明るい口調が、ほむらを見ていたさやかの注意を彼の方へ戻す。

『これだけ人がいれば、そう簡単に僕に手出しは出来ない。それ

に、いざという時にはマミだっている』

『そうね』

「マミさん!？」

思いもよらず聞こえてきたマミの声に、さやかは意表を突かれて、つい思いを口に出してしまった。まどかや今はF組の教室にいるあかりの驚きも伝わってくるが、やはりクラスの注目は口に出してしまったさやかだけに集まってきた。なんとか笑って誤魔化す。

『心配しなくても大丈夫よ。話はきちんと全部聞こえているわ』

『でも、3年生の教室はちよつと遠いの……』

まどかが訪ねる。

『なにに。この程度の距離、テレパシーの圏内だよ』

『でもさ、そうするとあの転校生にも話が筒抜けになっちゃうわない?』

今度はあかりがつっこみを入れた。

『心配はいらないよ。このテレパシーは僕が伝えたいと思った人間にしか伝わらない。それに伝えようという意志がない感情も伝わらないから、安心して話していいよ』

『ただ——』

マミの言葉が少しこもる。

『未だに本来の目的が掴めないのは不安ね……』

あの時、マミのマンションで、彼女は暁美ほむらが魔法少女であることは間違いないと断定した。キュウベエの推測によれば、彼女の目的はキュウベエの排除。新たな魔法少女の誕生を避けたいのが狙いらしい。

その理由について、マミはこう説明した。

「魔女を倒すことで、魔法少女にはそれなりの”報酬”が手に入るの。魔法少女たちは、これを巡って争うこともある——いいえ、ほとんどの魔法少女が”報酬”を取り合って争っているわ。彼女もそんな魔法少女と同じで、キュウベエを殺すことでライバルの誕生

を阻止しようとしているんじゃないかしら」

『えっ、ほぼ間違いなく、昨日のあれで正しそうな感じですけど……。そう考えれば昨日転校生がまどかに注目してたのも分かるし。きつとキュウベえに選ばれるのを知ってたから——』

さやかは主張を、マミの言葉が遮った。

『美樹さん、一番重要なことを忘れてるわ』

『なんですか？』

『さやかも、キュウベえに選ばれてるじゃない。マミさん、そういうことですよね』

『——あっ』

『ええ、そうよ』

確かにそうだ。どちらもキュウベえに選ばれるのなら、わざわざまどかにこだわる必要はない。だがほむらはほとんどさやかに注意を払わず、まどかばかりに接触している。

『何か鹿目さんにだけこだわる理由があるはずなんだけれど……』

『まあ、あいつがまどかに手を出してきたら、あたしがぶっ飛ばしてやるよ！！あかりもいるし、なんてったってあのマミさんがいるんだから——！』

『そだね。さやかはともかく、マミさんがいれば安心だね』

『ええ、美樹さんは別にして、私がついているから安心していいわよ』

『ともかくとか別にしてとか言うなっ——！』

結局、曉美ほむらはチャイムが鳴るまで席から立ち上がることを、口を開くことさえしなかった。

昼休み。

カフェテリアではむらに遭遇するのが怖かったまどかたちは、屋上で弁当を食べていた。

見滝原中の教室棟の屋上。白く綺麗なタイルが敷き詰められ、すぐ先には時計塔も見える。春や秋には自然が美しく、夏には吹き抜ける風が心地よい上にやってくる生徒も少ない、まどかたちだけが知る穴場スポットだ。

「はい、キュウベえ」

まどかが渡したソーセージをキュウベえが美味しそうに頬張る。

「うわっ、ボク、キュウベえが口開けるの初めて見た」

「確かにあんたって話すときにも口開けないよね」

『テレパシーで十分だからね。それに僕のもののは、人間の言語をしゃべれるようにできていないんだ』

「……へえ」

さやかはさして興味もなさそうに空を見上げる。

今日も、見滝原の空は彼女の髪のように澄み切った空色だ。そこにぼつりぼつりと雲が浮かんでいる。

「……ねえ、まどか、あかり」

ふと、さやかが口を開いた。

「何？」

「……願い事、見つかった？」

「ううん、見つかってない」

「ボクも。さやかは？」

「あたしも、全然。もちろん、単に願いが叶うだけっていうなら”頭が超よくなる”とか”めちゃくちゃ美少女になる”とか思いつくんだけど——」

「命懸け、ってところで、やっぱり引つかかる」

「そう」

さやかはおもむろに立ち上がると、フェンスの向こうに広がる見滝原の街を見つめる。見滝原中自体は4階建てだが、校舎自体が高台に建っているために、街並みを一望できるのだ。

だが彼女が見つめるのは一点だけ。その視線の先にある病院を見つめながら、さやかは口を開く。

「——あたしたちが願いを思いつかないのってなんでだと思う？」
さやかの唐突な問いに、まどかとあかりは首を傾げる。

「それはさ、あたしたちがボケてるから、じゃないかな」

「——ボケてる？」

「さやかちゃん、どういう意味？」

「”幸せボケ”してる、ってこと」

さやかは、まどかたちを振り返らずに、フェンスから街を見つめながら答える。その先にいる、不幸な少年を思いながら。

「あたしたちがこうやって普通に起きて、学校に行って、ご飯を食べて——。そういう幸せに、あたしたちは慣れちゃってるんだよ。気づかないうちに沢山の人たちに支えられてるのに、それが普通だと思ってる。本当の意味での”不幸”を知らないんだよね。お父さんとかお母さん、先生、用務員さん。そんな人たちに支えてもらう

のが当然だと思ってるんだよ。マミさんだって同じ。あたしたちが知らない場所で、魔女からあたしたちを守るために、命懸けで戦ってくれてた。あたしたちは、周りの人たちが必死に作って、守ってくれてた”幸せ”すら、当然と思っちゃってるんだよ」

そう。さやかは本当に不幸な人間を知っている。自らの将来を賭けたものに裏切られた少年を。

彼は今も、あの病院で必死に生きている。もう、彼の未来は閉ざされてしまっているのに。

「だからあたしたちには願いが思いつかない。少なくともいはずだよ——」命と引き替えに叶えたい願い”っていうのも。1人に一つじゃない。同じ人がそんな願いを3個も4個も持ってもおかしくない。でも、あたしたちには一つも思いつかない。考えさえ及ばない。それどころか、その願いの意味を本当に理解しているかも疑問だよ。つまりさ、あたしたちはそれだけ幸せなんだよ。世界中にいる沢山の人たちより、あたしたちは恵まれてんだよ」

だが、願いを叶える権利は彼らにはない。その権利を得たのは幸せで、恵まれていて、願いさえ思いつかないほど幸運な女子中学生、美樹さやかなのだ。

「ねえ、何でさ、何であたしただけなんだろうね」

なぜ、美樹さやかなのだ。なぜ、彼じゃないのか。なぜ、もっと不幸な、救いを求めている人々ではないのか。なぜ、こんな幸せボケした愚かな少女などに、その権利が渡されるのだ。

話しかけながらも、さやかは自問する。

「あたしたちが願いを叶えてもらう必要なんてないんじゃないのかな？あたしたちなんかよりも、他の人にチャンスを譲るべきんじゃないかな？」

「そうよ」

不意に背後から響く声。長い黒髪が穏やかな風になびく。

「ほむら……ちゃん」

とつさにあかりがまどかを庇うように動く。さやかもまたフェンスから離れ、2人の間に立ちふさがる。

「……っ、あ、あんた、何しにきた！！」

「安心して。別に危害を加えるつもりはないわ」

「そ、それをボクたちが信用できると思う！？」

「信頼してもらわなくても結構よ。単に、私は話に來ただけということを伝えたにすぎないわ」

あくまで冷静な態度を崩さずにほむらは返事をする。

「あの時の私の目的は、そいつが鹿目まどかと接触する前に排除する事だった。けれど、今となつてはもう手遅れよ」

ほむらが鋭い目でキュウベえを一瞥する。だがすぐに視線を戻す。それは南あかりでも、美樹さやかでもなく、鹿目まどかの方を向いている。まどかだけを、じっと見つめる。

「——それで、あなたはどうするの？」

「ふえっ？」

「あなたは、そいつと契約して、魔法少女になるつもりなの？」

「わ、わたし、は……」

「あんたにとやかく言われる筋合いはないわよ！！あたしたちが契約するかしないかはあたしたちが決めるの！！あんたなんかに指図はされない！！」

気の短いさやかがほむらに食ってかかった。だが彼女はそれを無

視して、まどかだけに向かって言葉を紡いでゆく。その唇に仮初めの笑みさえ浮かべて。

「昨日私が言った言葉、覚えていてくれたかしら」

「……うん」

間違いない。ほむらの言う”言葉”とは昨日彼女を保健室に案内する際に言われた、あの警告のことだ。

まどかには、その言葉は一言一句漏らさずに言えるほど印象に残っている。

「……ならいいわ。あの忠告が無駄にならないよう、祈っているわ」

それだけ言い残すと、ほむらはきびすを返す。

「——ねえ、ほむらちゃん!」

まどかがかけた声に、ほむらの歩みが止まる。

「……あなたは、どんな願いを込めて魔法少女になったの? どうして、その願いを選ぶことにしたの? どうして、命と引き替えにその願いを叶えようと思ったの? 」

「……………! 」

不意にほむらが振り返った。頭だけを振り向かせた体制のまま、ほむらは真っ直ぐまどかを見つめる。

その視線は、とても苦しそうで、切なげで。

必死に何かを抑えているようで。

その様子は、まるで――

まどかがかつて、夢の中で出会ったほむらのようだった。

まだ少女たちは理解していない。

この決断がどれほど重要なものかを。

誘いは、かつてエデンの園でイヴが悪蛇にそそのかされたリンゴと同じく、甘美な香りで人の心へと纏わりつく。

それが禁断の果実と知りながら、その誘惑を振り切ることなど不可能。

そしてそれを食らったら最後、後に待ち受けるは失樂園のみ。

だが、そんなこと、少女たちには知る由もない。

彼女らが知るは、『禁断の果実』であるということのみだから。

たったそれだけでは、それだけの警告では、人間の願いを抑えるにはあまりに弱すぎる。

今はまだ、自らの願いは定まらない。
しかしその願いが定まりしとき、

純粹なる少女は、自ら樂園を去ることとなる。

第4幕『どんな願いでも』（後書き）

というわけで、第4話でした。

……どうしよう。あかりの空気っぷりがハンパない。

まあ、これはほかの2人に比べて”願い”に関心が低い、ということなんですが、分かりづらい。

一応まだ可能性はあると思ってます。

今回はかずみ組からあの人が登場。

一応「あまり有名でない」↓「才能を認めてくれる人間に出会えなかった」ということで。

次回は魔法少女体験コースのお話です。遂に”あの力”の片鱗も登場……するか？

すみません、無責任で。

さて、もしお暇な時間がございましたら、次話も読んでくだされば。

感想評価誤字報告待ってます。

気軽にお気に入り登録もしてくださいね！！

……あざといな、自分。

第5幕『そんな人が、どうして』（前書き）

第5話になります。

今回から話が大きく動き始めます。

ずっと空気だったあかりにも光が差すか？

第5幕『そんな人が、どうして』

その事件が起きたのは、あかりが小学6年生の冬のことだった。

その日、南邸は火事で全焼した。

原因は、ガス漏れしていた部屋の中で料理をしようと火をつけたこと。

そして、その責任はあかりにあった。

その日、あかりは母親と喧嘩をした。

理由は些細なことだったということしか記憶していない。

勉強のことか、学校のことか、もしかしたら門限のことだったかもしれない。

喧嘩しているうちにヒートアップしたあかりは、手近にあったストーブを蹴飛ばして、二階の自分の部屋に閉じこもった。

そしてそのおかげで、あかりだけが生き残った。

あかりが蹴飛ばしたとき、ストーブのガス管が外れたのだ。不幸なことに、その時、母親は風邪を引いていた。そのために、彼女はガスのおいに気づかなかった。そして、何も警戒せずにコンロの火をつけた。

さらに不幸なことに、その瞬間、出かけていた彼女の父親と妹が帰ってきた。

——ズドオオオン！！

そして、1階部分が爆発した。

気づいた時には、ベッドの上だった。

右胸にひどい水膨れができていたが、それ以外は奇跡的に大きな外傷はなかった。

一階は、ガス爆発で吹っ飛んでいた。父親も、妹も、母親も、焼死ではなく爆死していた。

遺体の様子は恐ろしくて聞けなかったが、とても惨い有り様だったらしい。

自分が悪いと思ったあかりは、正直に叔父や叔母など、親族全員に火事の原因を話した。実質的には自分がこれを引き起こした犯人だと。

皆があかりを人殺しの目で見た。

親を殺したと罵った。

もちろん、誰一人にも引き取ってなどもらえなかった。

あかりは、完全に1人になった。

自業自得だと思った。

これから一生孤独に生きてゆくのだと思った。

だが、は「生存孤児奨学制度」に適應されることになったあかりは、入学テストにも無事合格し、見滝原へとやってくることができた。

マンションの部屋も貰った。

友達もできた。

結局、孤独になんてならなかった。

見滝原にやってきてから、あかりはこのことを誰にも話したことはない。

親友のまどかとさやか、仁美にさえ、”事故で死んだ”というとしが言っていない。

人に話してはいけないと思った。

哀れまれてはいけないと思った。

自分だけで背負っていかなければならないと思った。

——だから、あるとき。

「さやかが」自分たちの幸運」について語ったとき、初めは自分は違うと思った。

自分は「不幸な人間」のカテゴリーに入る人間だと。

だが、本当にそうなのか？

自分を支えてくれる人は、沢山いる。一度だめになりそうになった人生を、取り戻した。

住む場所を、生活をくれた見滝原中学校。そこが見つかるまで面倒を見てくれていた医師や看護師。

そして、火事の中から助け出してくれた消防士。

そんな人々に助けられてきたのではないか？

ならば、自分は——

「だーれだっ！！」

不意にあかりの目の前が、何かに覆われて真っ暗になる。

「えっ！？えっ！？」

余りに突然の出来事に、とつさに反応できないでいると、

「かつこいい男の子かと思った？残念、さやかちゃんでした！！」

視界が再び明るくなり、いたずらっぽい笑みを浮かべたさやかの顔が真正面に現れた。その距離、およそ五センチ。

「うわあああつ!？」

「なーにボーっとしてんのよお」

さやかが乗り出していた顔を引っ込めると、腰に手を当てる。

「あかりちゃん、早く行こ? きつとマミさんが待ってるよ」

その後ろからまどかがいつも通りの穏やかな笑みを浮かべる。

放課後、マミとの約束があるにも関わらずなかなか教室から出てこないあかりにしびれを切らして、まどかとさやかがF組の教室に入ってきていたのだ。

「あ、ごめんね。ちょっと考え事してて」

あかりは机の上のボタンを押して、机からログアウトして下校認証を行う。机の天板がフラップのように跳ね上がり、足と一緒に床に沈み込んでゆく。机にログインしているときは学校にいると判断されるのだ。別に玄関からの遠隔操作もできるのだが、普段からあかりは机の方を押すようにしている。

あかりは脇に置いてあったスクールバッグを肩に掛けると、いすから立ち上がった。

「じゃあ、行こっか」

「いよいよ、魔法少女体験が始まるね」

「明美さん」

C組の教室で荷物をまとめていると、ほむらは不意にクラスの女子のグループに話しかけられた。

「この後暇ならさ、あたしたちと一緒にクレープ食べに行かない

？」

あれはクラスの中でも華やかで社交的なグループだ。一番人数も多く、いつも楽しそうにしている。

友達と、いつも仲良く幸せに過ごしている。

「ごめんなさい」

ほむらは極めて穏やかに断った。

「私、今日行かなければならないところがあるの。またの機会に誘ってくれると嬉しいわ」

「そうだったの。ごめんね、暁美さん」

グループのリーダーらしき女子が、笑顔で手を振る。だが、もう二度とほむらがあのグループに誘われることはないだろう。ああいったグループはおしなべてプライドが高い。自分が皆に好意的に受け取られるのが当然だと思っているのだ。

皆が自分を簡単に受け入れてくれるのが当然だと思っているのだ。

「——反吐が出るわね」

ほむらのその呟きは、誰の耳にも届くことはなかった。

『鹿目さん、美樹さん、南さん、こつちよ』

まだかたちがカフェテリアについた時には、マミは既に中央のテーブルで待っていた。さやかは一人でマミのテーブルへ駆けてゆ

くと、敬礼のポーズをとる。

「ビシイ！！遅くなつてすみません！！魔法少女見習い美樹さやか、只今参上致しました！！」

「あらあら、気合い十分ね」

「それだけじゃありませんよ……！！」

さやかはまどかとあかりが席に着くのを確認してから、なにやらスクールバッグの他に持っていた細長い鞆を漁り始める。

「じゃーん、金属バットとラケットー！！」

さやかが某猫型ロボットのように取り出したのは、彼女の言葉通り、金属バットと2本のテニスラケットだった。

「はいこれ。あと、あかりも」

「う、うん」

さやかは2本のテニスラケットをそれぞれまどかとあかりに手渡す。

「いざという時の為に、ねっ！！」

「ま、まあそう覚悟してくれるなら助かるわ……」

マミの笑顔が若干ひきつっているような気がするが、多分さやかの勘違いだろう。

「さて、それじゃ、魔法少女体験コース、スタートと行きましょうか。まずは魔女を――」

「あつ、そういえば」

マミの話を遮り、あかりがバッグの中をガサゴソといじり始める。
「あつた、これです。マミさん、ボクはこんなの持ってきてみました」

「え、ええつと……南さん、これは……？」

「これは”手回しダイナモ充電ラジオ・ライト充電器一体型”ですよ」

あかりが取り出したのは、非常持ち出し袋の中に入っているような手回し式のラジオだった。名前の通り、懐中電灯と携帯の充電器らしきプラグもついている。

「ほら、魔女の結界の中って、めちゃくちゃ広いじゃないですか。探して迷っちゃったりとかいうときにはこいつで……」

「いや、あのね南さん」

遠慮がちに、そう、とても遠慮がちにマミが口を挟む。

「魔女の場合はソウルジェムを使えばすぐにわかるし、ライトもソウルジェムの光で十分よ。それに、結界の中では電波が通じないわ」

「うそお、ボクが持ってきたもの、完全に無意味だったの……？」

「ええ……まあ」

「そんなあ」

あかりは机に突っ伏してしまった。

「まあまあ南さん、気持ちちは伝わったわ。さて、魔女を探すのだけれど——」

「まどかは何か持ってきてきてないの？」

「またもや話の腰を折られるマミ。ちよつとこめかみに青筋がたた気がするが、もちろんそんなことを気にするさやかではない。」

「えつと……わたしは……」

まどかが取り出したのはなんの変哲もない普通のノート。表紙にはかわいらしい字で『英語 2年C組12番 鹿目まどか』とある。だが、中身にあったのは、英語の板書でも英単語でもなく、色とりどりの洋服を着た女の子のイラストだった。頭に赤いリボンをつけた黒いワンピースの女の子や、髪の毛を大きなお団子にした、ピンク色のエッジの利いたの服に身を包む女の子。しかもかなり上手い。今日の授業の八割を犠牲にして完成させた大作だ。そんな中でもひととき大きく描かれているのは、

「これ……まどか？」

「……うん」

真ん中に描かれた女の子が身にまとっているのは、ピンクと白を基調としたフリルたっぷりの衣装。首回りは四角く開き、その周

りにもフリルが付いている。ケーキのような模様の入ったスカートは大きく広がり、中にもフリルが詰まっている。

夢見がちなまどからしい、これぞ少女趣味!!といったデザインだ。

「魔法少女になるんだったら、先に衣装くらい考えておこうと思っ
つて」

そう言いながらまどかがさやかを振り返ると、彼女は必死に笑いを堪えているところだった。

「いや、まどか……これは……プッ」

「まどか……クッ、ボクも……ごめん……ククッ」

あかりまでもが顔を真っ赤にして笑いを堪えている。

「えっ……ふええっ……」

実は結構自信があつたまどかは、2人の反応に肩を落とす。

「美樹さん、南さん、これがあんまり冗談でもないのよ」

「えっ？」

マミがまどかのノートをぱらぱらとめくりながら言う。

「魔法少女の姿はね、契約するときに叶えた願いや心の状態に強く依存するの」

『だからね、まどかが契約するときに、そういった服装がいいと
考えていれば、それは実現するかもしれないんだ』

ずつとまどかの膝の上で静かにしていたキュウベえも口を開いた。

「じゃああたしも考えてみようかな……やっぱり正義の味方には
マフラーとかマントは必須よね……それから――」

「はいっ、雑談はここまでにして」

マミが手をたたいて3人の注意を喚起する。

「魔女探しに、出かけるわよ!!」

「――魔力の痕跡もゼロ。既に大きく移動しちゃったか、それともここは本拠地じゃなかったかのどちらかね」

今マミがいるのは『日だまりの森』の職員通用口付近。昨日魔女の結界が現れたフリースペースのちょうど真下に当たる。

マミの話によると、ソウルジェムは魔女の魔力に反応して光を放つのだそうだ。つまりは魔女探知機。つくづくいろんな用途に使えるものだ、とあかりは少し感心する。以外と地味だ、などとさやかか呟いていたが、彼女はどんなものを予想していたのだろう。まさかマミの部屋に見滝原の魔女の座標を表示する巨大マップがあるとでも考えたのだろうか。

「捉えたわ！！こっちの方角ね」

見ると、マミのソウルジェムが微かに明滅している。

「ほんとに光った……！！」

「イメージとしてはダウジングに近いかしらね。光が強くなる方向を探して、歩いてゆくのだから、基本的に自分の足で探してゆくしかないわ。こっちょ」

マミに連れられて、あかりたちも歩き出した。

――それからもうすぐ一時間が過ぎようとしていた。

「全然、変わりませんね……」

「まあ、変わらないと言ったらそうね。私はもう慣れているから

微妙な違いがわかるけれど、初めての鹿目さんたちに気づけ、というのも酷よね」

どうやら、マミにはソウルジェムの微妙な光の変化がわかるようだった。その証拠に、彼女の足取りには迷いがない。

「確かに、明滅のスピードが速くなっている気がします」

「あら、南さんには分かるの？ 凄いわね、きっといい魔法少女になれるわ」

「なにをお！？ あたしだって——！！」

さやかが気色ばんでソウルジェムを覗き込む。さやかはそのまま一分ほど見つめ、

「ダメだっ！！ わかんないっ！！」

あきらめて開き直っていた。

「ごめんなさい、あの時取り逃がしちゃったからですよ……わたしたちがいなければ、マミさんはあそこで魔女を倒せてたのに」
「確かに、取り逃がした魔女を昨日のうちに追えなかったのは痛いわね。相当離れてしまっているみたいだし」

マミは言葉を切った。

今彼女たちが歩いているのは旧玄虚村付近。見滝原市内で唯一スマートブレイン・ホールディングスの開発の手が回っていない、寂れた工業地帯だ。『日だまりの森』からは相当離れてしまっている。自分たちが結界に囚われてしまったから、その後魔法少女についての質問などをしたから、魔女をこんな所まで逃がしてしまった。まどかはうつむいてしまう。

「でもね」

だが。マミは優しい声でに語りかける。

「その代わりに私は鹿目さんたちの命を助けることができた。それだけでも、取り逃がしてしまった価値はあったんじゃない？」

まどかと並んで歩いていたマミの反対側に、さやかも並ぶ。

「あははっ、やっぱりマミさんは”正義の味方”だなあ。あたし

もそんな風に、献身的に人に尽くせる人間になりたいな」

「献身的だなんて……私は契約したから、戦わなければならない使命を背負っているから戦っているだけよ」

「いやいや、あんの転校生に比べたら……!!」

さやかが歯を食いしばって地団駄を踏み始める。

昨日の一件以降、さやかのほむらへの評価は最悪。もはや名前なんかで呼びたくない、と本人が言っていた。

まどかだつてさやかの気持ちも分からないでもない。彼女には意味の分からない行動を繰り返されて、頭がこんがりそうだ。その上、彼女はまるで反撃能力もない、か弱いキュウベえを、自分の利益のために殺そうとしたようだ（さやかが一番気に入らないのはそこらしい）。総じてみても、行動からは彼女の意志は殆ど読みとれない。

だが一方で、まどかはほむらを完全に悪い人間と断定できずにいた。

もし単純にまどかに契約してもらいたくないのなら、単純にそう言えばいい。極端な話、邪魔になるのなら殺してしまうという選択肢すらある。

しかしほむらはあくまでまどかを気遣う態度は崩さない。唯一ほむらの行動から彼女の意志を読みとれるとすればそこなのだ。

なぜまどかに執着するのか。

あの”夢”が蘇る。

そう。”魔女”だ。あの言葉は、あの夢の中で浮かんできたのだ。
出来すぎた偶然の一致。

もし、ほむらもあの夢を見たのだとしたら？

もし、ほむらがあの夢を見せたのだとしたら？

本当は彼女があ夢の中であったように危機に陥る未来なのだとしたら？

それでまどかに助けを求めているのだとしたら？

——だとしたら、やっぱりわたしは契約するべき、なのかなあ。

「ねえ、マミさん」

「何、美樹さん？」

「魔女がいそうな場所って見当がついてるんですか？」
さやかがふとマミに訪ねた。

「大体ね。昨日言ったでしょう、魔女は”怒り”や”嫉妬”といった負の感情をまき散らして、理由のはつきりしない自殺や傷害事件を引き起こすの。つまり逆に考えればそんな事件が起こりやすいな場所——人の集まる狭い路地や、人気の少ない高いビルなんかに決壊を張って巣くっていることが多いのよ。多分今回の奴は後者でしょうね」

マミの口調が暗くなる。その口調から、彼女の相当な経験が感じ取れた。きつと数多くの人々を救ってきたのだろつ。そして、それ

以上の人々を救えずにきたのだらう……。

「あと、病院なんかにとりつかれたら最悪ね」

「病院……」

「そう。病気やけがなんかで元々気弱になっっている人が多いからね。そこを簡単に魔女につけ込まれてしまうの。さらにその時に魔女は犠牲になった人たちの生命力を吸い取って、さらに強力になる。そうしたらまた犠牲者が増えて……最低なスパイラルよ」

「だからそうなる前に、マミさんたち魔法少女がやつつけて回ってるんですよ？」

そのさやかか問いに、マミはなぜか苦笑いを浮かべる。

「まあ、私はそうしているんだけど、他の魔法少女たちはそうもいかないのよ」

「ええっ！？何ですか！？人の命がかかってんですよ！？」

マミのその言葉に、さやかはショックを受けた。

「そうなんだけれど……。昨日、あなたたちに”報酬”の話をしたでしょう？あの”報酬”は魔女が強ければ強いほど大きくなるの。だからある程度魔女が強くなるまで放置してから倒す魔法少女も少なくないのよ……」

「そ、そんな……！！」

まどかも口を押さえる。

「そ、そうか……！転校生もそういう奴なんだな……！ほんとうに最悪な奴だ……！」

「美樹さん、それは断言できないわ」

「いーえ、間違いなくそういう奴ですよ……！くーっ、成績優秀ス

ポーツ万能容姿端麗だからって調子に乗っちゃって！！あの悟りきった顔が嫌なのよ！！何であんなに美人なのよ！！ああ、クールなのが羨ましいーっ！！」

「さやかちゃん、ただの妬みになってるよ……」

「ねえねえさやか、そういうばボクさ、一度だけほむらがあの冷静さを崩した瞬間、見たことあるんだよね」

むくれたまま歩いているさよかの頬をつつきながら、あかりは耳元でそんなことを囁いた。

「ええっ！？あの転校生が！？」

さやかは二つの意味で驚き、大きくのけぞった。

「ウソ、マジ！？ど、どんなとき！？」

「えつとねえ——」

あかりはさやかに昨日の渡り廊下であったことを全て話した。

まどかがほむらを保健室へ送っていった後の出来事であること。

たまたま通りかかったただけなのに急に真っ青な顔で話しかけられたこと。そして「魔女に殺されたはず」と言い残して逃げるように去っていったこと。

「まあ、多分被害者とそっくりだったんだろうね」

「そういやあかりそんなこと言ってた気がするなあ。でもさ——」

「——ねえ、南さん」

その話を聞いて、マミまでもが青い顔をして話しかけてきた。

「だーいじょーぶですって！！足もちゃんとありますし。それにほら」

あかりは右手でマミの手を握る。

「ちゃんとか暖かいでしょ？ボクはちゃんと生きてますから！！」

「……そ、そうね」

マミはどもりながらも微笑んで、再びソウルジェムを見つめ始め

た。もうその光は電球のように煌々と輝いている。魔女が近い証拠だ。

だが。

——見間違えるはずがない。

マミの頭の中は先程のあかりの話で一杯だった。

魔法少女になると、その送ってゆく生活上、ものの姿形を覚えることが得意になる。

魔法少女として日々を送っている以上、”似ている”というだけで勘違いするはずはない。

しかも、一度相対しただけだが、マミには暁美ほむらは相当な魔法少女だということを感知取っていた。

もしまともにやり合うことになってしまったら、確実にこちらが負ける。

あの時、ほむらが素直に退いてくれて幸いだった。

実際マミはほむらの宿すオーラに押されて、虚勢を張るのがやっとなのだ。

——そんな暁美さんが、魔女の被害者と南さんを見間違う？そんなことある訳ないじゃない。

——なら、今私の後ろを歩いている南さんは何者なの？

「……っ！！」

ソウルジェムがひときわ強く、まるで真夏の太陽のように輝いた。

——そんなことよりも、まずは魔女ね。

マミは後ろを歩いている3人の少女に声をかけた。

「魔女の居場所が分かったわ。この廃ビルよ」

——あれ？ここは……？

マミが魔女の結界が張ってであると判断した廃ビル、それは間違いなく、

一昨日、あかりがなぜか気を失っていた場所だった。

——なぜ、ここにボクは居たんだろう？

「マミさん、あれっ！！」

さやかがつさに何かを指さしながら悲鳴を上げた。ビルの屋上

から何かが降ってくる。

「人だ……」

まどかが顔を真っ青にして呟く。

——飛び降り自殺？

「任せて!!」

マミがソウルジェムを抱えて走り出す。その体が黄色い閃光に包まれ、華々しい魔法少女の衣装に変わる。

「はっ!!」

マミが胸元の黄色いリボンを解いて、落ちてくる人間の方へ投げつける。そのリボンは空中で蛇のように身をくねらせると、一気に数メートルはあるう長さまで伸張する。それは空中でとぐるを巻き、朝顔のような簡易ハンモックを作り出した。

飛び降りてきた人はその中へ吸い込まれるように落ちてゆく。マミのリボンが、その体を優しく受け止める。

「間に合ったぁ……」

まどかが安堵のため息をもらす。

リボンはその人を優しく包み込んだまま、ゆっくりとその体を地面に横たえる。

飛び降りてきたのは、スーツに身を包んだ、OL風の女性だった。

マミは素早く手首に手を当てて、彼女の脈を確認する。

「……よかった。気を失っているだけよ」

マミは女性の髪をかきあげ、まどかたちに額を見せる。額の真ん中に、奇妙な痣があった。

王冠のような、綿密な模様の痣が。

それに、あかりは見覚えがあった。

——あれは、確かケイにも……！！

だが、思考が、そこでストップする。

——ケイって、誰？

「これは、” 魔女の接吻 ” の痕跡よ」

マミの言葉が、あかりの物思いを破った。

「魔女の……接吻……」

「うわっ、聞くだけで気分悪くなりそう」

まどかとさやかも女性の額をのぞき込む。

「魔女がねらいを定めた獲物につける、マーキングのようなもの。これをつけられた人間は、魔女にここから希望を吸い取られ始めるの。ただでさえ呪いを撒き散らしている結界の周りで希望まで吸い取られ始めると——」

「人間は完全に絶望する。先に待ち受けるのは、争いか——自殺」
後を引き継いで話し始めたあかりに、マミが目を見開く。

「南さん、どうしてそれを……？」

「あ……えっと……勘ですよ勘！！女の勘ってやつですよ！！」
「そう……」

あかりはあわてて取り繕う。マミは訝しげな目をしながらも、それ以上追及してこなかった。

しかし、

——やっぱり、ボクには分かる。きっとあの女の人もある階段を

登って、屋上から飛び降りたんだ。

——”も”？どういう意味だ？それに”あの”階段？おかしい。ボクはあの建物の中には入ったことはないはず。

——なのに、何だ？この違和感は？

「行くわよ」

マミの静かながらも断固とした決意を込めた言葉に、あかりは思考の世界から現実へ引き戻される。

「マミさん……あれは……？」

廃ビルのドアもない入り口から入ってすぐのところ。本来だったらアトリウムがあっただろう、3階までの吹き抜けになった空間。その中央が、”ひび割れていた”。

少なくとも、あかりにはそう表現することしかできなかった。そのひび割れはなにもない空間に位置しているのに、ひどく平面的だ。まるで、真ん中に穴のあいた絵を、ひび割れた画面でTVをみているような感覚。そんなひび割れがあかりの肉眼で見ている現実の空間に存在しているのだ。

「あれが、魔女の結界の入り口よ。結界の中に入ったが最後、魔女が死ぬか逃げ出すまで、私たちは抜け出すことができないの」

さやか隣の隣でまどかがゴクリと唾を飲むのがわかった。自然と金属バットを握る彼女の手にも力が入る。

「しかも、結界の中はこちらの世界の三次元的空間は意味をなさないの。この結界の広さは私の部屋程度かもしれないし、見滝原市と同じくらい広いかもしれない。全ては魔女の持つ”特質”次第よ」マミが空間のひび割れにソウルジェムをかざす。

「アプリーレ（開け）！！」

そのかけ声に合わせるようにソウルジェムかひとときわ明るく黄金の輝きを放つ。その太陽のごとき光に負けるように、ひび割れがミシミシと広がりながら崩れ落ちてゆき、最後には人間の通れるような大きな穴があいた。中から原色だけを用いて描いた絵画のような不気味な空間がぱっくりと口を開ける。そこに広がっていたのは、悪趣味な薔薇園だった。

「あ、あのときと同じ……」

「そうね。あの時のはこの魔女の使い魔だったようね」

「使い魔？」

「簡単に言えば魔女の手下よ。無尽蔵に生み出されて、魔女のために働くの。あくまで魔女に依存した存在だから本体を倒せば全滅するけれど、使い魔自身も人を殺すから放っておけないの。そしてなにより、しばらくすると使い魔自身も魔女に変化して独立してしまうの。こうなってしまうたら親の魔女を倒しても消滅しない。完全に新たな存在として独立してしまうのよ」

「本当に魔女ってのは厄介ですね……」

「そうよ。だからこそ私みたいな魔法少女が戦っているの。——そうだ」

マミは何かを思いついたように手をたたくと、不意にさやかの金属バットに手をかざした。

「お？およよ！？」

バットはマミの手から放たれた金色の光に包まれると、その中で形状が変化してゆく。グリップはより持ちやすく、さやかの手になじむ形に。ただの金属だった表面は、いかにも堅そうな不思議な白い材質で覆われ、先端には左右に翼のように広がる殴打部が形成される。高級なティーカップのような美しさとその形態の禍々しさのミスマッチが、妙な威圧感を与えている。

さやかは所々に金色のラインの入った、いかにもマジカルな姿に変わった金属バットを振り回してみる。

「わっ、すっごく軽くなってる！！マミさんやっぱ凄いですね！

！」

「まあ、気休め程度にはなると思ってね。鹿目さんと南さんも貸してちょうだい」

マミからの光を受け、まどかとあかりのテニスラケットも変化してゆく。デザインはさやかのマジカルバットと同じく真っ白のボディに金のライン。グリップもそれぞれの手の形に合わせて握りやすく変化する。

だが元の形が元の形だけに、マジカルバットよりもさらに歪な棍棒と化している。明らかに普通の女子中学生が持つものというよりは、RPGのゴブリンが持っていそうな感じだ。あるいは大きなお友達向けのアニメの、それこそ”魔法少女”だろうか。

「わあ、ほんとだ、軽い……!!」

まどかがびつくりしながらマジカルラケットを振り回している。たまにさやかのスカートをかすめたりして、結構危ない。

「あら?どうしたの南さん」

「へっ?あ、はい、何ですか?」

マジカルラケットを掴んだままぼうっとしていたあかりは、マミに声をかけられてビクツと我に返った。

「もう、しっかりしてちょうだい。これから魔女の結界に入っていくのよ」

「すみません……ちよつと考え事してて……」

「考え事?」

「あ、いや、何でもないです!!」

あかりは慌てて大きく手を振って誤魔化す。一緒にマジカルラケットが振られていて、かなり危ない。

「さて、これから魔女の結界の中に飛び込んでゆくわけだけど、危ないから私のそばは絶対に離れないでね」

「はい」

「鹿目さん、美樹さん、南さん、覚悟はいい？」
まどか、さやか、あかりの3人は無言でうなずく。

ここから先は、命が軽くなる世界。

人を殺す化け物が蠢いている世界。

目の前には頼もしいマミが居るが、やはり最後には自分の身は自分で守らなければならないだろう。

「いい顔ね」

マミが小さく微笑むが、すぐに真剣な表情へと戻る。

「——さあ、行くわよ!!」

眼前に広がる、奇妙な異世界、『魔女の結界』。それは同じ”薔薇園”という意匠を持ちながら、昨日迷い込んだ使い魔の潜んでいたものとは似て非なるものだった。あちらが温室だとしたら、こちらは塔の中の畑。あちらこちらへ曲がり、捻れているが大まかには螺旋状を描いて下ってゆく通路。その中央を二分するように毒々しい花を咲かせる薔薇の垣根が延々と延びている。通路にはあちらこちらに分かれ道があり、その先に無数の小部屋が口を開けている。

「キュウベえ、ルートは？」

『大丈夫だマミ。魔女の居場所は大体掴んだ』

キュウベえに指示を求めるマミの声は、今まで聞いたことがないほど凛々しいものだった。静かながらも断固とした響きに、まどか

は驚く。

「っつちよ」

マミの示したルートを全力で走り出す。おっとりとしたマミからは想像もできないほど走るのが早い。しかもそれをしながらマミは使い魔を警戒し、周囲に素早く目を光らせている。一瞬、キュウベえと視線を交わす。さやかには伝わってこないが、テレパシーで指示を受けているのだらう。だがそれは本当に一瞬だけ。再び使い魔の警戒へ戻る。その素早さに、さやかの憧れはさらに大きくなる。マミがあかりたちを片手で制する。正面にずらりと使い魔が並ぶ。昨日見た蝶のような使い魔だ。マミをあざ笑うように笑い声をあげながら近づいてくる。だが一瞬の後に、マミが周囲に無数に生成したマスケット銃の弾丸を受け、炎をあげて全滅する。その強さに、あかりは舌を巻く。

「キャシャアアアッ!!」

背後から響く奇声にあかりはびくりと身をこわばらせた。振り向くと、そこには昨日彼女たちを取り囲んだ、高枝切り鋏を持った庭師のような使い魔がいた。口もない顔から奇声を張り上げ、鋏を開閉する。ジャギン、ジャギンという金属同士がぶつかる冷え切った音が響く。

——やっぱり、こいつどこかで……？

「あかり、危ないっ!!」

一瞬動きが止まったあかりをかばうようにさやかが割ってはいる

と、マジカルバットの一撃で使い魔を叩き潰す。すると、何故か使い魔は死骸すら残さずに消滅した。

「ありがとー!!」

未だにどこか既視感が抜けないが、そんなことを気にしている暇はない。あかりはそう自らに言い聞かせると、自らのマジカルラケットのグリップを握りしめる。

「たあっ!!」

狙いを付けて、思い切りマジカルラケットを振り下ろす。2体の使い魔が潰されて消滅する。隣を見ると、さやかやまどかも必死に使い魔と戦っている。だが、その数はいつこうに減る様子はない。むしろ増えているようだ。

——まずいわね……

マミは心の中で舌打ちした。今のところ彼女にはまだまだ余裕はあるので、たとえまどかたちが3人同時に使い魔に隙をつかれても助けることは十分に可能だ。だが少しずつ全体数が増えてきている状況で、いつまでもそういられるわけではない。もっと効率よく使い魔を倒してゆかなければ。

マミは踊るように回りながら、右腕に特殊なマスキット銃を生成する。握りの部分はいつも通りだが、重心が蓮根のように無数についている。その数、20。

「ティロ・フォンターナ!!」

かけ声と同時に20発の銃弾が、その名の通り噴水のように広がり、使い魔へ襲いかかる。1体の使い魔の爆発が、周囲の4、5体の使い魔を巻き込み消滅させる。マミの視界が真っ赤な炎に包まれる。

「あかりちゃん、後ろっ!!」

「とりゃあっ!!」

まどかに教えられて、後ろから迫ってきた蝶の使い魔を叩き潰す。周囲は使い魔だらけだった。いつの間にかまどかとさやかから隔てられてしまっている。あまりマミから離れると危険だが、こつも沢山使い魔がいると近づけない。

しかし、思いの外使い魔は非力だった。一度とつさに腕で使い魔を殴ったが、それだけで飛んでいたそれは地面にたたき落とされたのだ。

使い魔はそこまで強いものではないのかも、そうあかりが思い始めた頃だった。

あかりの目に、何か金色のものが写った。

それは薄いヴェールのようになって、かまぐらのようにマミとまどか、さやかがいるあたりを包み込んでいる。おそらくマミの魔法で、使い魔の力を抑えるフィールドを張っているのだろう。

——あれ？

マミの金色のフィールドの球形をした全体が見えるということは、あかりはそれを外から見えているということになる。

——っていうことは……

もちろん、その視覚情報から判断できることはただ一つ。

あかりは、マミの安全策であるフィールドから”出ている”ということ。

あかりの全身から血の気が引いた。

必死になってマジカルラケットを振り回す。ありがたいことに、これはフィールドの外に出ても効果は持続するようで、景気よく使い魔を叩き潰してゆく。

だが、すでにあかりは使い魔に取り囲まれていた。先ほどまでは使い魔だらけといっても周囲に10匹が限度だったが、今は比べものにならないほどの使い魔が周囲で蠢いている。

「うあつ……！！」

突然、あかりの左足に鋭い痛みが走った。庭師のような使い魔の缺で切り裂かれたのだ。幸い深い傷ではないようだが、傷口から血が溢れ出してくるのがわかる。

足に力が入らない。

ふらつきながらもなんとかマジカルラケットを振り回し、使い魔を潰してゆく。たった一つの小さな傷だけで、これほど体が動かな

くなるとは。

使い魔があかりの肩にぶつかってきた。そのあまりの衝撃に、彼女はもんどり打って地面に倒れる。あんなに軽かった使い魔に体当たりで負けた——いや、あそこで使い魔が弱かったのは、マミのフイールドのお陰だったのだ。その事実には、あかりは戦慄する。

前に転がって、なんとか立ち上がる。とにかく、マミのところへいかなければ。

使い魔を殴り、叩き、潰す。それでもいつこうにマミのところへは近づけない。それどころか一歩、また一歩と離れてゆく。

「……くうっ!」

制服が引き裂かれ、右腕に長い切り傷ができる。再び使い魔の攻撃を食らったのだ。痛みは足の傷よりかなり強く、マジカルラケットを握っていられなくなる。遂に唯一の武器を地面に落としてしまった。

周囲から、使い魔たちが迫る。

——ああ、ボク、終わりなのかな……

首筋に、何かが押し付けられる感触。

その瞬間、あかりの世界が歪み始めた。

死んだはずの家族の顔が浮かんでくる。父が、母が、妹が、火事の犯人とあかりをなじる。

何となく、自分が”魔女の接吻”を受けたのが分かった。

だが、その言葉の意味が思い出せなかった。

それでもいいと思った。

目の前に志筑仁美が現れた。

あのいつも穏やかな仁美の口調は、憎しみに満ちていた。

「あかりさんって、人殺しでしたのね……」

——何の話？まさか、あの火事のこと！？

「そんな人間とはお付き合いなどできませんわ」

——何で……誰にも話してないのに！！

理性がこれは幻影だと叫んでいるが、それは彼女の耳には届かない。

目の前に美樹さやかが現れた。

いつも活気に満ちているさやかの瞳は、氷のように冷たかった。

「あかり、あんたって最低な人間だわ」

——待つて……ボクを1人にしないで!!

「もう二度とあたしの前に現れないでよ。消えてよ」

——”あの時”みたいに1人にしないで!!

——見滝原に来る前の、親族から人殺しの目で見られていた時
みたい!!

——友達まで、ボクから離れていかないで!!

目の前に鹿目まどかが現れた。

「まどか——」

「喋らないで」

いつも柔らかな笑顔を浮かべているまどかが、軽蔑の表情であか

りを見つめていた。

「ねえ、あかりちゃん」

——言わないで。

「あかりちゃんは、人を殺したんだよね」

——言わないで！！

「そんな人が、何で生きてるの？」

——言わないでっ！！

あかりは目を堅く閉じて、両耳を塞ぐ。

——そんなことはもう”分かってる”！！

まどかがまたなにごとか呟くのが聞こえた。

聞きたくない。聞きたくない。聞きたくない。

「のう」

不意に優しい声かけられた。
ゆっくりと、目を開ける。

気づくと、あかりは見慣れない場所にいた。まるで中世の姫の謁見質のような、豪勢を極める和室だった。

目の前に少女が座っていた。彼女と同じくらいの年齢の少女だ。

綿と蝶を意匠に持つ、華々しい衣装を纏っていた。

——魔法……少女？

少女が口を開いた。

「こんな世界に生きておつても、仕方がないとは思わぬか？」

——え？

「もつとすてきな場所があるのよ」

少女が彼女の隣を指し示す。

そこに、長い高枝切り鋏を持った、立派な口ひげの老人が立っていた。

「そうだ。私が端正込めて育てた、」

「美しい、薔薇園じゃよ」

その言葉を聞いた瞬間、あかりの頭の中に凄まじい記憶の奔流が駆け抜けた。

工場地帯。里見ケイ。1位。失敗。転校。イギリス。涙。階段。屋上。夕陽。口ひげの庭師さん。薔薇園。素敵な世界。

フェンス。

飛び降り。

落下。

死。

『いつしよに、逝こうよ』

「あああああああああああああああああああああああああああああああ
あああ!」

記憶が蘇る。

——やっぱり、ボクはここに来たことがあった。

『あなたは……魔女に殺されたはず……!!』

——ここでボクは、ケイと一緒に……

『ねえ、南さん……』

「だーいじょーぶですって!」

——屋上から……

「あああああああああああああああああああああ
ああああああ！」

頭を抑えて絶叫する。

瞳に、真鍮色の明かりが灯る。

「あああああああああああああああああああああ
あああああ！」

刹那、あかりの全身から眩い閃光が迸った。

それが、辺り一帯を引き裂く

急に頭の霧が晴れるような感覚。周囲の空間が歪む。老人が歪む。少女が歪む。世界が歪む。

変化する。

元に戻る。

謁見室は魔女の結界に。

老人は使い魔に。

そして少女は、魔女に。

今あかりが立っているのは、魔女の結界の最深部。正面にそびえる、異形の怪物——魔女。

腐った泥のような色をした、なめくじのようなぶよぶよとした体。背中から大きく伸びる、オレンジと赤の毒々しい蝶の翼。くすみ、汚れた色が絶えず混じり合い、さらに汚し合う、吐瀉物が垂れているようにしか見えない嫌悪感に満ちた頭部。全身には血のように赤い薔薇が咲き乱れ、気分が悪くなるほど強烈な香りを放っている。

『薔薇園の魔女』。その身に宿す性質は”不信”。自らに近づく者全てを疑い、自らの愛する薔薇を汚す者全てを敵視する。それは、永遠に孤独な存在。誰一人信じることはなく、常に周囲を隔絶する、そんな存在。

そして――

一日、南あかりと里見ケイを殺害した、張本人だ。

第5幕『そんな人が、どうして』（後書き）

以上、第5話でした。

1人で『薔薇園の魔女』と相對することになったあたり。しかしそれと同時に彼女の中で光が目覚めつつあります。

彼女が放った閃光は？

そして記憶を取り戻した彼女はどうするのか――？

とまあ、こんな感じで退いてみた訳ですが。

如何だったでしょうか？

さて、もしお暇な時間がございましたら、次話も読んでいただければ。

評価感想誤字報告待ってます！！

第6幕『ボクは、誰？』（前書き）

ギリギリ九時に間に合わなかった……！！

どうも、ライトオアダークです。

今回からついに、あかりが主人公らしくなってゆく予定です。

では、第6話、お楽しみください！！

第6幕『ボクは、誰？』

少女、南あかりは鹿目まどか、美樹さやかと共に巴マミの魔法少女体験コースに同行中、うっかりマミの保護結界から飛び出してしまふ。そこで魔女の接吻を受けたあかりは、夢の中で自らの負い目のある過去を責められ、希望を吸い取られてしまった。

だが、その中で聞いた『美しい薔薇園』という言葉をきっかけに、彼女の抜け落ちていた記憶が蘇る。その中で、自らがすでに魔女に殺されていると知ったあかりは、その事実に耐えられず暴走してしまふ。

そのとき彼女の体から閃光が迸り、その命を奪わんとしていた使い魔たちを消滅させた。

だが、そんなあかりの前に立ちふさがったのは、かつて彼女を殺した魔女、『薔薇園の魔女』だった――

【オオオオオオ！！】

あかりの存在を認識した『薔薇園の魔女』が、嘶くように頭を高く上げる。それに同調するように、何もない空間に幾多ものラインが走る。それは伸長し、湾曲し、交差して使い魔の姿を描き出してゆく。やがて空中に描かれた数多の不気味な絵画は自らの意志でもぞもぞと動きだし、使い魔そのものとなって空間をさまよい出した。

【オオオオオオ！！】

『薔薇園の魔女』が再び地面に響きわたるような低い叫び声をあげる。それに指示されたのか、使い魔たちは一瞬空中で制止すると操り人形のようにふらふらと空を飛び、あかりの周囲を取り囲む。それらは無邪気な笑い声をあげて、あかりの柔らかい肌を引き裂かんと、鋏を、牙を広げてくる。

だが、

「来るなああああああ！！」

再びあかりの全身から放たれる銀色の閃光。その淀み、濁った色の輝きは一瞬にして周囲の使い魔全てを飲み込み、跡形もなく消滅させる。

まるで、劇薬によって全身を溶かされてゆくように。

「あああああああああ！！」

瞳に鈍い色の輝きを灯し、のどがつぶれるほど絶叫しながら、あかりは使い魔を殴り飛ばす。その一撃を正面から食らった使い魔は結界の部屋の反対側まで吹っ飛び、そのまま壁への衝突の衝撃でぐちゃりと押しつぶされた。

刹那、あかりの右腕から閃光が迸り、その指先から肘まで鉛色の鱗のような鎧に覆われた。少女の白く透き通った腕が、澱んだ鈍色の醜い腕へと変化したのだ。

砕かれた岩のように不格好で、まるで悪魔の腕のような禍々しいそれは、確かに少女、南あかりの腕であった。

——ジャキン！！

一体の使い魔が鋭い輝きを放つ鋏を開き、あかりの首を切り落とさんと力一杯閉じる。だが、その刃は彼女の首に達する前に正面に立てられた右腕を包み込む鎧に遮られ、鈍い金属音をたてて停止する。

「があああああああ！！」

あかりが振り払うように右腕を強く振り下ろす。その勢いとともに使い魔は地面にたたきつけられ、熟れすぎた果実のように弾けた。

再びがあかりの体を閃光が包み、鉛色の鎧は肩まで伸長する。彼女の右腕が、完全に歪んだ怪物のような鎧を纏った腕へと変化したのだ。

「うわああああああつ！！」

右腕のみが怪物と化した少女は、あたりを取り囲む異形を殴る。感情の赴くままに殴る。悪魔の腕を振り回して、殴る。何回も、何十回も、殴る。殴る。殴る。殴る。無機質な金属の如き腕が振るわれ、生き物のように舞う使い魔たちを砕く。殴る。殴る。殴る。殴る。灰色の単色の腕が、色彩に満ちた使い魔を押しつぶす。

【オオオオオオオ！！】

自らの使い魔が消されてゆくことに怒ったのか『薔薇園の魔女』は轟くような叫び声をあげると、吐瀉物のかかったような頭から鋭い針を発射した。それは緑色のドロリとした液体を纏ったまま風切

り音をたてて弾丸のように飛び、鎧に覆われたあかりの右腕を貫く。ぐちゃり、という生々しい音があたりに反響した。

「う……あうっ!!」

あかりの顔が苦悶に歪み、右腕を押さえてがくりと両膝をついた。だが彼女は、まだ人間のものである左腕で、怪物と化した右腕に突き刺さったままの針を掴み、力いっぱい引き抜く。針の表面についた細かい棘が、あかりの腕の中の肉をえぐり出す。

「うううああああっ!!」

右腕から引き裂かれるような痛みが走り、あかりは全身を痙攣させる。なぜか、その傷口から真っ赤な鮮血と一緒に一筋の灰が飛び出し、さらさらと地面に落ちた。傷口の周りから青い炎があがる。普通の人間に、こんな現象は起きない。

「あああああうっ!!」

再び周囲に集まってきた使い魔たちを、地面に片膝をついたまま両手を振り回してなぎ払う。右腕から吹き出す血が、空中に深紅のラインを描き出す。

——ボクは……？

記憶は戻った。完全に、何の欠損もなく。南あかりは死んだ。一昨日、親友のクラスメイト、里見ケイとともに、この結界が巢食っていたビルの上から飛び降りて。魔女の

接吻を受けて、希望を吸い取られて殺された。生々しく思い出せる。落下するときに感じた風と重力も。地面にたたきつけられた衝撃も。その直後、意識が雲散する寸前に感じた、全身の骨が碎ける音も、体中の皮膚が破れる感覚も、あたりに飛び散る自らの血の鮮やかすぎる赤色も。

全てが、鮮明に思い出せる。

間違いない。南あかりは死亡した。

自らの記憶がそれを証明する。

ならば、ここに存在するのは？

今使い魔たちと戦っている南あかりは？

——誰？誰なの？

——ボクは……？

あかりの周囲を囲んでいた使い魔たちが、全て鎧の腕に叩き潰されて消滅する。だが、彼女の体力ではそれが限界だった。全身から力が抜け、もう一度がくりと両膝をついた。貫かれた右腕から走るあまりの苦痛に呼吸ができなくなる。

あかりは小さく呟いた。

「ボクは……誰……！？」

そのことを、考えてしまった。

暴走が、止まってしまった。

自ら、立ち止まってしまった。

刹那、あかりの全身から完全に力が抜けた。視界がもやがかかったように霞み、彼女は前のめりにばたりと倒れる。固い地面に鼻をたたかき打ちつけ、ゴキ、といういやな音がした。何となく、鼻の骨が折れたのが分かった。

あかりの右腕からもう一度閃光が走った。その光がかき消されるように消えたとき、彼女の右腕は元通りの白い少女の腕に戻っていた。腕の真ん中に穴があき、血の染みがついた、見滝原中学校の制服に包まれた腕に。

だが、制服の穴から覗くあかりの腕には、小さな刺し傷しか残っていなかった。

——ジャキン——！！

笑い声をあげながら、使い魔たちが迫ってくる。だが、力が出ない。もう立ち上がる力すらない。あかりの心を埋め尽くしていた激しい感情が、少しずつ減退してゆく。そこに生まれた隙間に戻ってくるのは、恐怖という感情。

——ジャキン——！

使い魔の鍔がギリリと輝く。それはゆっくりとあかりの方へ近づいてくる。

「うわあああつ——！」

うつぶせに倒れたまま、力を振り絞って突き出された左腕が、使い魔を殴り飛ばす。その衝撃を受け、使い魔は僅かに吹き飛ばされた。だが、そこには先ほどの突きの威力など微塵も感じられない。

【オオオオオオ——！】

『薔薇園の魔女』が今こそ好機と叫び声をあげる。その指示に従い使い魔たちが一列に並ぶと、その輪郭がぼやけ、それはやがて一本の茨の蔓となる。

それは永遠に心を信じえぬ者が用いる、拷問の鞭。晴れぬ疑いを晴らすため、幾度も幾度も人を打ち据え、縛り付ける。

茨の鞭は大蛇ののうにになると、あかりの体を絡め取った。無数に生えた棘が制服を、スカートを、靴下を破り、その下にある柔らかな肌に突き刺さる。

「い……痛い……っ……よお……」

しかし、あかりには声をあげる力さえ残されていなかった。かす

れた苦悶の息を漏らしながら、彼女は逆さまに釣り上げられた。その肌にさらに棘が食い込み、真つ赤な滴が一筋、あかりの喉を伝った。

「あ……ああ……あああ……」

「——あああああああああああああああああああ——」

「キリがないわね……!!」

バマミは苛立っていた。

周囲には数百はあろう使い魔達が蠢いている。自分の張った保護結界がある以上連れてきた3人は大丈夫だろうが、それにしてもこの数は多すぎる。

「一掃………しかないかしら!？」

マミはそう決断するとその場でぐるりと回った。左腕に掴んだマスケット銃が鈍器となり、数多くの使い魔達を吹き飛ばす。周囲に直径1メートルほどのインターバルができたところで、マミは右腕を高く天へ掲げた。

「ソーレ・スペッキオ——」

マミの手のひらから黄金の輝きが天へ向かって延び、空中で爆発する。それはドームのように周囲へ広がり、黄金のバリアを形成す

る。

いくらか使い魔がな中に残ったが仕方がない。マミはマスケット銃を用いて、一体一体を着実に破壊してゆく。ようやくさやかとまどかの姿が見えてきた。

さやかは勇ましくバットを振るい――

まどかは涙目になって必死に武器を振り回している。その表情に、マミはただならぬ危機を感じ取った。

まどかが気がついたようにマミの方を向く。

「マミさん！！」

声からも必死さが伝わってくる。使い魔の姿に恐怖を押さえきれなくなったのだろうか。マミは安心させるように優しい口調でまどかに話しかける。まどかではなく、自分を安心させるように。頭に揺らめく、嫌な予感を押さえ込むように。

「大丈夫よ。使い魔たちは私が――」

だが、まどかが激しく首を振った。

「そうじゃないんです！！あかりちゃんが……！！あかりちゃんがっ……！！」

ドキリとした。

「南さんが？南さんがどうしたの！？」

「わたししか見てなかったんですけど、遠くで使い魔に取り囲まれたと思ったら虚ろな目でふらふら歩き出して――！！」

背筋が凍り付いたかと思った。

——どうして！？普通の人間には通り抜けられないように結界を張ったのに！！私の張り方が甘かったっていうの！？いや、そんなことはないはず、だけど……

頭をめぐるしく回転させながらも、マミは攻撃の手をゆるめない。マスコット銃を召喚し、撃ち、殴り、砕く。やがてバリア内の使い魔たちは炎に包まれて全滅した。

——とにかく理由は後。まずは南さんを助け出さなければ！！

マミは昨日の戦闘と同様に、高い跳躍でバリアから飛び出すと、服から、スカートから、歩牛から、何もない空間から、無数のマスコット銃を出現させる。しかし、その数は昨日の時よりも遥かに多い。一つ一つのマスコット銃が触れ合わんというほどの密度だ。

「ティロ・テンペスタ！！」

その名の通り嵐のように黄金の銃弾の雨が吹き荒れ、使い魔達に引導を渡す。すさまじい爆炎の嵐はバリアの表面を真っ赤に染め、その振動は中にいるまどかとさやかにまで伝わってきた。

「キュウベえ！！」

マミは地面に着地すると即座に叫んだ。効率を考えると直接声に出した方が頭の中で会話するよりも効果的なのだ。

『魔女の居場所はすぐそこだよ——急がないと、あかりが』

「分かっているわ！！」

いつもと変わらないキュウベえの口調にマミは苛立ち、彼の言葉を遮るように怒鳴った。キュウベえの声が届いていなかったまど

かとさやかが、驚いたように身をすくませる。

「鹿目さん」

マミは鋭く目を尖らせたまま、まどかを振り返った。

「その様子だと、南さんは間違いなく魔女の接吻を受けているわ。おそらくいまは魔女の目の前よ——ついて来て——」

それだけ言うと、マミは彼女に背を向けて走り出した。慌ててまどかとさやかも後に続く。

「ど、どういうことですか！？あかりが魔女の接吻を受けたって

——」

さやかが走りながら戸惑ったように問いかけてきた。

「それがさやかちゃん、あかりちゃんが——」

説明はすべてまどかに任せ、マミは正面に立ちはだかる使い魔の目を正確に打ち抜いてゆく。これからあかりの救出と魔女の撃滅という二つの大仕事が残っている。”あれ”を手に入れる前に魔力を消費しすぎるのはまずい、と思つての判断だ。

『マミ、右だ——！』

キュウベエの指示に従い、マミは通路を右に曲がる。その先には今まで通ってきたような道のような分岐は一つもなかった。ただ、一直線に続く、使い魔に満たされた回廊が延びている。左右には、全て同じ少女の肖像画が並んでいた。過剰な装飾を施された額縁の中で、まどかやさやかと同じくらいの年齢の少女が笑い、怒り、憎み、泣きじゃくっている。そんな数十メートルはある長い廊下の先に、普通の人間の身の丈は遥かに越えるだろう巨大な扉があった。それはレースのカーテンと薔薇の形の無数の装飾に包み込まれ、そこが結界の中心部にして最深部であることを告げている。

——すなわち、魔女の部屋。

そこへ続く回廊でひしめきあっている使い魔達を見て、マミは目をひそめる。これだけの数があると、今まで走ってきたときに使っていたように一体一体狙うのはかえって非効率だ。ここは、素早く職滅するのが得策だろう。

「いきなりで悪いけれど、私たち急いでいるの——ティロ・テンペスタ——」

再び空中に出現させたおびただしい数のマスケット銃で、数百はいるだろう使い魔を撃ち滅ぼす。ガラガラと音を立てて地面に落ちてくるマスケット銃が、使い魔を押しつぶす。

一瞬にして使い魔は数匹にまで減少した。後は、その隙間を駆け抜ければよい。まどかとさやかの足を舞っている暇はない——そう考えたマミは、右手にまどかを左手にさやかを抱え、思い切り地面を蹴った。

「はっ——」

一気に自動車並みのスピードで宙を駆ける。マミが扉に激突しようとする瞬間、それは自動的に開いた。その先の空間に、再び扉が現れる。それはまたも自ずから開き、向こう側にも次の扉が有ることを示す。

何回も、何回も、扉をくぐり抜けてゆくマミたち。気がつけば動いているのは自分たちではなく回廊の方だった。結界によって魔女の部屋に案内される——それはすなわち、魔女に招かれているということ。

魔女が獲物を自らのところへ招き寄せる、それが意味するのはただ一つ。

魔女は新たな獲物を求めているということ。

つまり、魔女の手元には現在、獲物がないということ。

つまり、”前の獲物”であろう南あかりは、もしかしたら既に――
――？

――そんなはずはないわ。私が守ると決めたんだもの。守りきれないはずがない。

――けれど、もし、守れなかったとしたら、
――私は、また友達を失うことになる。

――そんなの、嫌だ。だから、生きていて、南さん……！！

丁度6度目の扉を超えた時だったろうか。マミが意識を外界へ戻した瞬間、扉の隙間から銀色の光が進り、彼女の視界はその鈍い輝きに飲み込まれた。

「あかりちゃん!!」

目も眩むような閃光が晴れた時、まどかの目に飛び込んできたのは、目の前にそびえ立つ『薔薇園の魔女』でも、その周囲に蠢く使い魔達でも、魔女の部屋自体でもなく、その地面にぐったりと横たわるあかりの姿だった。制服のあちこちが破れ、所々が真つ赤な血に染まっている。その顔は蒼白で、ぴくりとさえ動かない。

今にも駆け出そうとするまどかを、マミが片手で制した。厳しい顔で無言でうなずくと、あかりの方へ左手をかざした。マミの袖の中から鮮やかな山吹色のリボンが伸び、優しくあかりの体を包み込む。そしてリボンはあかりを包み込んだまま、マミの手元へ戻ってきた。その体を慎重に抱き留める。

マミはゆっくりとあかりを地面に横たわらせた。

「あ……!!」

まどかが小さな喜びの声を上げた。あかりの小さな息づかいが聞こえてきたのだ。よく見ると、薄い胸も心なしか上下しているように見える。制服はあちこち破れてぼろぼろになっているが、

特に大きな外傷は無いようだった。
あるのは打撲と小さな刺し傷程度。

「よかったあ」

さやかも安堵の声を上げる。まどかから話を聞いたときには背筋が凍る思いがしたが、今、彼女の心の中では氷が溶けるように安心感が広がってゆく。彼女の親友、南あかりは無事だったのだ。

まどかとさやかは優しくほほえみ合う。だが、

【オオオオオオオ！！】

この結界の主、『薔薇園の魔女』の上げる地鳴りの如き叫び声に、彼女たちは現実へと引き戻される。

だが、その声は心なしに苦しそうだった。ドロドロとした汚らしい液体が滴る頭部から伸びる茨の鞭が、不自然な長さで切断されていた。その先端は焼け焦げたようにくすぶり、煙を上げている。

——なぜ、ダメージを受けているの？

マミの頭に疑問符が浮かぶ。まさか、あかりがやったとでも言うのだろうか。いや、そんなはずはない。マミは自らの頭の中に浮かんだ考えを即座に否定する。彼女は普通の人間だ。魔法少女の素質すら持たない、本当に、単純な一般人。だからこそ、マミはまどかやさやかと一緒に魔法少女の仕事を体験させるときに罪悪感を感じていたのだ。

だが、南あかりの身の回りでは不自然な出来事が多すぎる。選ばれてもいないのにキュウベえの姿を認識できたし、あの暁美ほむら

に魔女の犠牲者と勘違いされた。

そして今も、だ。

服の破れ具合と血の付き方から考えて、あかりは間違いなく『薔薇園の魔女』そのものから攻撃を受けたと判断できる。

だが、それにしても肉体の損傷があまりにも少なすぎる。傷らしい傷は小さな刺し傷と打撲しかないとはどういうことだ？ 魔女と相対したのなら、普通の人間なら一瞬で瀕死に——いや、殺されていてもおかしくないというのに。

マミは、ちらりと今はさやか腕の中でぐったりと眠るあかりを見る。

——南さん、あなたは一体、何者なの？

【オオオオオオオ！！】

『薔薇園の魔女』の魔女がひととき大きな叫び声をあげる。途中で焼け落ちた茨の鞭がマミに向かって振るわれた。

「はっ！！」

とつさにマスケット銃を召喚し、鞭を弾き飛ばす。

——そうよ。まずは目の前の敵に集中しなくちゃね!!

「鹿目さん、美樹さん、南さんを宜しくね。後、ここから一步も動いちゃダメよ」

そういい残すと、マミは彼女たちの周りにソーレ・スペッキオを展開し、少女たちを保護してから戦場へ赴く。

魔女の部屋の入り口は地面から数メートル上の場所にある。そこからマミは高く跳躍すると空中で体をひねり、地面にふわりと着地した。

マミは頭のベレーを取ると、『薔薇園の魔女』へ向かって優雅に一礼する。

それは、これから彼女が殺す相手への経緯の表れ。戦闘へ捧げる祈りにして、敵対者への死刑宣告だ。

マミはベレーを横へなぐようにすらりと動かす。彼女の周りを取り囲む柵のように、十丁のマスケット銃が召喚される。

マミは左手でベレーを頭へ戻しながら右手で一丁のマスケット銃を掴むと、銃口を魔女へピタリと向け、

——ズドン!!

マスケット銃が火を噴いた。その銃口から飛び出した黄金の弾丸が『薔薇園の魔女』の胴体を貫く。その傷口から薔薇のように赤い液体が吹き出した。魔女の血、だろうか。マミはなめらかに球切れをしたマスケット銃を後方へ投げ捨てると、次の銃を掴む。

その照準が再び『薔薇園の魔女』に合わせられた。

マスケット銃は単発で先込式の火縄銃だ。よって一丁のマスケット銃で撃てる弾丸は一発だけ。それ以降は補充しなければならない。そのための時間が使用者の隙となる。

だが、バマミの場合はそれとは異なる。

彼女は無数のマスケット銃を召喚する事ができる。そのため、わざわざ弾丸と火薬を再装填する必要などない。新たに別のマスケット銃を召喚すればよいだけなのだ。さらにバミは隙を作らないためにさらなる工夫を重ねる。常に周囲に予備のマスケット銃を用意し、一丁を使用するたびに新しいものを補充するため、彼女の周囲には常に十本のマスケット銃が待機することになるのだ。

すなわち、バミにとってはマスケット銃が単発式であることはマインナスになどなりえない。

長い間魔法少女であったバミの考案した、実に効率的な方法。かの織田信長が提案した鉄砲隊から着想を得たものである。

左腕で新たにもう一丁待機させつつ、右手のマスケット銃で『薔薇園の魔女』を撃つ。それは魔女の頭に着弾し、それはそこから濁った深緑色の液体をぶちまけた。

【オオオオオオオ！！】

『薔薇園の魔女』は苦痛に身をよじらせ、背中の巨大な蝶の羽で空中へ飛び立った。パサパサ、という耳障りなやかましい音が周囲に響き渡る。

「逃がさないわよ！！」

バミは更にマスケット銃を連射する。銃撃、補充、銃撃、補充。

一定のアルゴリズムを繰り返しながらもその狙いは実に正確であり、確実に『薔薇園の魔女』の体力、いや肉体そのものまでを少しずつ、だが正確に削り取ってゆく。

しかしながら、『薔薇園の魔女』にも狙いがあった。あれが空中へ飛び立ったのは、マミの注意を上方へ向けるため。常に高速で移動し続ける魔女を視界にとらえ続けるにはそうするほかないのだ。

注意がおろそかになったマミの足元を漂っていた使い魔が足を取り囲むように並ぶ。そして、その輪郭がぼやけ始めた。

「――!?」

マミが違和感に気がついたときにはもう遅い。使い魔たちは茨の鞭に変化し、マミの体を絡め取る。左手を封じられたマミはそれでも右手のマスケット銃で魔女を撃つ。だが、それは魔女を庇うように飛んできた使い魔に阻まれてしまった。

茨の鞭が引き上げられ、マミの足が地面から離れた。全身に茨を巻き付けられながら逆さまに吊し上げられる。首に巻き付かなかったのがせめてもの救いか。だが、マスケット銃を並べ立てたマミの陣地は既に遙かに下。自由に動かせる右手を精一杯のばしたところで届くような距離ではない。

【オオオオオオオオ!!】

『薔薇園の魔女』が勝ち誇ったような叫び声をあげる。魔女はマミを巻き付け、からめ取ったままの茨の鞭を、思い切り壁へたたきつけた。

ドオオオン!!

部屋に響きわたる大音声とともに、マミの姿が激突した壁から立ち上る粉塵に包まれて見えなくなる。壁から幾つものコンクリートのような破片が崩れ落ちてくる。

「マミさん!？」

それを見ていたさやかが、悲鳴に近い叫び声をあげた。だが、

「大丈夫よ」

粉塵の中から現れたマミには傷一つ無かった。それどころか逆さに吊り上げられている現在の状態でも余裕の表情を崩していない。マミは新たにマスケット銃を召喚すると、それを構えた。『薔薇園の魔女』とは全く見当違いの方向に。その様子に、魔女は怪訝そうに頭を傾ける。そして、マミの銃口が火を噴いた。

狙ったのは、『薔薇園の魔女』ではなく部屋の隅にある薔薇園。その中の一つ、深紅の薔薇がマスケット銃の弾丸をうけ、粉々に砕け散った。

『薔薇園の魔女』は驚いたようにマミを茨の鞭から離すと、薔薇園の方へ駆け寄った。砕け散った薔薇を、いとおしそうに見つめている。

「残念ね」

優雅に地面に着地したマミは、勝ち誇ったように笑った。

「ファウーメ・ヴォルカーノ!!」

マミが呪文を唱えるように叫んだ瞬間、『薔薇園の魔女』の前で薔薇園の中で咲き誇る他の全ての薔薇までもが引き裂かれ、深紅の破片を空中にばらまいた。

薔薇の下から飛び出してきたのは、マミのコントロールする黄金

のリボン。それが地面の中を掘り進み、地中から薔薇園を襲撃したのだ。空から舞い降りる紅の花びらを見上げながら、『薔薇園の魔女』ば絶叫する。

【オ……オオオオオオオ！！】

『薔薇園の魔女』が“薔薇園”の魔女たる所以。それはもちろん、それが展開する結果が薔薇園の意匠を持っているからである。

だが、『薔薇園の魔女』事態にしてみれば、薔薇園は単なる象徴ではない。その持つ性質、“不信”。すべての者を疑い、敵視せずにはいられないその悲しき性が唯一慰められる場所こそが薔薇園なのだ。物言わず、丹誠込めて育てれば間違いなく美しい花を咲かせる薔薇は、絶対に魔女を裏切らない。“不信”に満ちた『薔薇園の魔女』がただ一つ信じられるもの、それこそが薔薇。魔女にとっては薔薇こそがすべてなのだ。

それを破壊されたら、魔女がどのような感情を抱くか。それはどんな人間に問おうとも、容易に解は出るだろう。

【——オオオオオオオオオオオオオ！！】

『薔薇園の魔女』は怒りに満ちた叫び声をあげ、マミへ襲いかかった。

だが、精緻に戦略を立て、常に優位に立とうとするマミへそのような行動をとるのは、単なる愚かしい行動にすぎない。彼女は怒りに燃え修羅のごとく迫ってくる魔女の正面に立ち、小さな笑みを浮

かべた。

「インカルターレ!!」

マミが高々と右手を天に掲げる。刹那、『薔薇園の魔女』の周囲――地面から、壁から、天井から、四方八方から一斉に黄金のリボンが飛び出した。その一つ一つが魔女の頭を、首を、翼を、体をつかりと縛り付け、その空間に固定する。『薔薇園の魔女』は逃れようと必死に翼を振るい頭を動かすが、その程度の力で千切れるリボンではない。

【オオオオオオオ!!】

『薔薇園の魔女』は引きちぎれるような叫び声をあげると、頭部から大量の棘を乱射した。先ほどあかりの腕を貫いたあの棘が、マミへ向かって数百発単位で飛んでゆく。だが、

「ソーレ・スペッキオ・ピッコラ!!」

発声とともにマミの正面に直径一メートルほどの光のバリアが現出し、全ての棘を弾き返した。カラカラカラカラ……と、棘は軽い金属音をたてながら虚しく辺りに散らばる。もちろんマミはかすり傷一つ無い。更に彼女が腕を伸ばすと、リボンはさらに延びて『薔薇園の魔女』へ絡みつく。最早外見では黄色い部分の方が多く見えるほどのリボンでがんじがらめにされた魔女は、完全に動きを封じられ、ただ芋虫のようにもぞもぞと動くのみだ。

今や『薔薇園の魔女』の動きは完全に止まった。後は止めを刺すのみだ。

――大事な後輩の前だもの!!ここは一気到大技で決めさせてもらうわよ!!

マミが何かを抱えるように腕を構えた。刹那、周囲にふわふわと浮かぶ黄金の光が無数に現れる。それは全てマミの手元へ集中し、

巨大なマスケット銃を形成した。いつもの三倍はある、両腕でなければ抱えられないほどの巨大なグリップ。引き金の長さはマミの頭ほどある。銀色に輝く銃身に至っては、長さは四メートルを優に超え、口径もまた一メートルを遙かに上回る。側面には水の流れるような流麗なレリーフが彫り込まれていた。

まさに最後の切り札に相応しい、重厚で力強いその偉容に、彼女の戦いを見守っていたまどかとさやかも息をのんだ。

「ティロ——」

その銃口に光り輝くエネルギーが渦を巻くように充填される。その照準が身動きの取れない『薔薇園の魔女』へピタリと合わせられた。

その瞬間、この戦いの勝敗は決した。『薔薇園の魔女』はここで魔法少女、バマミ敗れ、消え去る。その身にかつて宿していた祈りを、誰も知ることはなく。

マミは片目を閉じてまどかたちにウィンクすると、マスケット銃の引き金を思い切り引いた。

「——ファイナーレ——」

——ズドオオオン——

銃口に集まっていた黄金のエネルギーがマミの体ほどもある巨大な弾丸へ収束し、銃身から飛び出した炎に導かれて猛烈な速度で発射された。

それは周囲の空気を引き裂き、轟音を響かせながら稲妻のように『薔薇園の魔女』へと衝突する。そしてその瞬間、弾丸は爆発へ変

わった。

その炎は体を包み込んでいる黄色いリボンを伝って全身へ広がり、魔法少女の祈りの炎が、魔法少女の呪いを痕跡すら残さずに焼き尽くす。

最終砲撃（ティロ・ファイナーレ）。それはまさに切り札に相応しい、バマミの魔法少女としての力の証明。それは魔法少女にとっての断罪の炎であり、人間にとっての希望の輝きだ。

そして、紅蓮の炎に包まれ、『薔薇園の魔法少女』は完全に消滅した。

『薔薇園の魔法少女』の消滅とともに、まどかたちの周囲の空間が歪み始めた。結界の主の死は、結界そのものの崩壊を意味する。それは魔法少女が結界から生み出した使い魔についても同様である。小さな怪物たちもまた、結界内部の風景の一部のように——いや、実際に一部なのだが——歪み、水に溶けるようにして消滅してゆく。

「勝った……の？」

さやかがそう呟いた頃には、周囲の結界は完全に消失し、あたりの風景は柔らかな夕陽の射し込む廃ビルへのもので戻っていた。現在さやかたちが立っているのはあのアトリウム。あんなに結界内部で走り回ったのに、自分たちは殆ど移動していなかった。そのことに、改めて魔法少女の世界が現実世界と隔離されていることを実感する。

まどかは喜びと安堵が入り混じった表情でぼーっとしているし、あかりはまだ彼女の腕の中で眠ったままだ。まどかからあかりの危機を聞いたときは肝を冷やしたが、結局みんな無事に帰ってこられた。これも全部マミのおかげ——。そう考えたとき、さやかは自分の心の中で彼女への憧れが大きく膨れ上がってくるのを感じていた。

—— ”あんなこと” は、もう繰り返したくない。

—— だから、あたしもマミさんみたいになりたい。

「みんな、これを見て」

マミが穏やかな声でさやかたちの注意を喚起する。いつの間にか、その服装は魔法少女服から見滝原中の制服へと戻っていた。彼女は身を屈めると、コンクリートの地面に突き刺さっていた何かを拾い上げた。まどかとさやかはマミの手の中に握られた小物体に注目する。

外見は、黒いガラスの球体。中に黒煙のようなスモークがかかっており、透明感はあるが反対側が透けて見えることはない。まるで、透き通った水晶玉の中で暗闇が渦巻いているような印象を与える。その球体を支えるように周囲に三本、針金のようなものが巻き付き、一番下で一本にまとまって針のように突き出していた。全体のサイズは15センチ程度だろうか。

「これは、”グリーンフィード”。前に話した、魔女退治の報酬というのはこれを指すのよ。簡単に言えば、魔女の卵ね」

「ま、魔女の、卵!？」

「ちょ、それ結構ヤバイもんなんじゃないっすか!？」

マミの口から飛び出した物騒な単語にまどかたちは慌てふためくが、

「大丈夫よ。本体の魔女を倒した後これが孵ることはないから。寧ろ、これは役に立つもののなのよ」

彼女は優しく二人を制すると、左手からソウルジェムを呼び出した。これもまた装飾に包まれた宝石であると考えたと、なんとなくグリーンフシードと似通っていないくもない。しかし、やはりソウルジェムの輝きはまどかたちにも希望を与えてくれる。それこそが、この二つの一番の違いだろうか。

だが、ソウルジェムの輝きが、以前見たときよりも心なしか弱くなっている気がする。「あれ……ソウルジェム、なんか光が弱くなってますんか?」

「よく気がついたわね、鹿目さん。その通りよ。私たち魔法少女の力の根源は、このソウルジェム。だから魔女との戦いで魔力を消費してしまうと、ソウルジェムは少しずつ濁っていつてしまうの。だけどね——」

マミはそこで言葉を切ると、少し濁ったソウルジェムにグリーンフシードを近づけた。

「——あ……」

ソウルジェムの表面から、その濁りの原因だったであろう黒い雲のようなものが飛び出すと、グリーンフシードへと吸い込まれていった。その様相は、まるでソウルジェムから立ちのぼる黒煙をグリーンフシードが集めているようだ。そして雲が完全に吸収されたとき、グリーンフシードの濁りはより濃いものとなり、ソウルジェムの輝きは、

「きれいに……なった……!!」

「そうよ。グリーンフシードを使えば、ソウルジェムの穢れを取り除くことができるの。だから——」

不意にマミがそこで言葉を切った。鋭い瞳でビルの奥の方、夕陽が射し込まずに闇に落ちているあたりを見つめる。そして、マミはその暗がりへ向かって問いかけた。

「——あら、今頃になつて魔女を追つてきたのかしら？それとも私をつけてきたのかしら？」

「そのどちらでもないし、回答をあなたに与えるつもりもない」
誰もいなかったはずの暗がりから返答が聞こえてきた。その冷え切った金属のように冷徹で無感情な声は、

「曉美ほむらさん——だったかしら」

「私はあなたのことは知っているわ——巴マミ」

「それは光栄ね」

マミは、影の中から現れたほむらと、形だけの空虚な挨拶を交わす。ほむらはまだ見滝原中の制服だったが、その左腕には闇の色のソウルジェムが握られていた。

「それで、あなたの目的は？」

「さっき言つたばかりでしょう——あなたに話すつもりはないと」
その言葉に、マミの硬い表情が異なつたものへ変化した。

敵視から、嘲りへ。

「——ああ、もしかしてあなた、これが欲しいのかしら」

マミは、それを聞いていたまどかがマミの言葉だとは信じられなくなるほどの、冷え切った無感情さでほむらに問いかけた。まだ僅かな透明感を残すグリーンフィードが、彼女の手の中でキラリと輝く。
「そういうことなら、お譲りするわ。私が一度使ってしまったけれど、まだ三回くらいは使えるはずよ」

顔に穏やかな表情の仮面を張り付けたまま、マミはほむらへグリ

ーフシードを投げた。それは夕陽の中で美しいアーチを描き、吸い込まれるようにほむらの手へと収まる。

だが、ほむらはそのグリーンフシードをちらりとも見見ようとせずに投げ返す。それが描いた放物線は、マミのものと比べると些か硬く、直線的だった。

「あの魔女を仕留めたのはあなた。だからあなただけが使えばいい」

そう言うのと、ほむらはきびすを返した。しかし、彼女はそこから歩きだそうとしない。

「——鹿目まどか。ああ、それから美樹さやかにも言うておくわ」
ほむらが背中を向けたままぼつりと口を開いた。

「南あかりの姿を見たでしょう？魔法少女は人間をそんな風にする化け物と戦うことになるのよ。もし少しでも契約をする気があるのなら、そのことはきちんと覚えておきなさい」

あくまで冷静で冷め切った口調。だがそれに反してその言葉は間違ひなくまどかたちを心配するものだ。そんなことにまどかは気がついた。魔法少女の力を持っているなら、「邪魔をするならば消す」のような脅しを言った方が契約をさせないためには効率的なのに。

——もしかして、ほむらちゃんは本当にわたしたちを心配して……？

「あんた……ちょっと待って」

言いたいことは言い終わったのか、そのまま立ち去ろうとするほむら。だが、そんな彼女をさやかが止めた。さやかの表情には驚き

と怒りが渦巻いている。

「何かしら」

「何であかりが魔女にやられたことを知ってるの？まさかとは思
うけど、あんた——」

「ええ、その通りよ。見ていたわ。一部始終を」

ほむらはあつさりと答えた。さもそれが当然であるように。化け
物に襲われ、殺されそうになっている一般人を見殺しにすることが
当然であるように。そんな冷徹な態度に、さやかは激昂した。

「あかりは……あかりは魔法少女じゃないんだよ！？あそこであ
かりは殺されていたかもしれないのに！！なのに……なのにあんた
は……あかりが魔女に痛めつけられるのを見て、何も感じなかった
っていうの！？」

気を失い、服もぼろぼろになっている痛ましい様子のあかりを膝
に乗せながら、さやかは凄まじい剣幕でほむらに詰め寄る。だが、
ほむらは小さくため息をつく、一言も返答をせずに、さやかから
離れるように歩き出した。

「ちよつと、待ちなさいよ！！逃げるつもり！？」

そんなさやかの非難の声を背中に受けながら、ほむらは闇の中へ
と消えていった。

「何も感じないわけ、ないじゃない……！！」

誰にも聞こえないような声で、そう呟いて。

この日、曉美ほむらが一度だけ魔法少女としての武装を使ったこ
とは誰も知らない。

茨を焼き切るような熱を放つ、小さな手榴弾が使用されたことは。

あかりは目を覚ました。

何か浮遊感を感じる。まるで動く何かに乗っかっているような、少しばかり頼りない感覚。まるで、誰かにおぶられているような――

「……………っ？」

霞む視界に飛び込んでくる、橙色の光が眩しい。それと同時に、目の前に綺麗なカールを描く金色の髪が揺れているのが目に入ってきた。

「マミ……………さん？」

「あら、南さん、目が覚めたかしら」

すぐ前の方から優しい声が聞こえてきた。

すぐには状況を理解できず、周囲を見回してみる。

「ここ……………は……………？」

「『ステッラ』よ。もう8階ね」

『ステッラ』。あかりとマミが住むマンション。何でこんな所に？なぜ彼女はマミにおぶられているのだ？ぼんやりとした頭で、記憶を探る。

思い出した。

魔女のこと。自分の身に起こった変化のこと。そして、自分はずでに死んでいたことも。

だがそれはおおよそマミに相談できるものではない。だから、まずは魔女について問いかけた。

「マミさん！！魔女は！？魔女はどうしました！？」

「とつくに倒したわ。全く、危機一髪だったのよ」

「すみません……」

「——まあ、張る境界が小さすぎたから、私にも責任はあるわ。こちらこそごめんなさいね」

「いえ、そんなことは——」

ある程度言葉を交わしたことですつきり覚醒したあかりは、するりとマミの背中から降りた。すると、ちょうどそこは807号室——あかりの部屋のすぐ前だった。

「ありがとうございます。こんな所まで……送って……いただいて……うつつ」

そう言つて、あかりはマミに頭を下げた。だが不意に体のバランスを失い、彼女はよろめいてしまう。

「南さん、大丈夫！？」

「え、ええ。大丈夫です」

そうは言つたものの、あかりの顔はかなり苦しそうだった。実際殴られるような酷い頭痛があり、体中に出来た小さな傷がちくちくと刺さるようにつまむ。関節も軋むようにつまみし、筋肉痛もかなりのものだ。間違いなく、魔女にやられたものだろう。

しかし、あかりには不思議だった。あの時はもつとひどいけがをしていたはずだ。右腕を魔女の放つた針が貫通したのも、その時の想像を絶するような痛みも鮮明に覚えている。それに茨の鞭に絡め取られ、締め付けられたときにも、体中に棘が突き刺さつたのを覚えてる。

なのに、外傷はこの程度だ。まるで、全てがすでに治りかけている程に回復している。

だがそれと同時に、あの結界の中の出来事が全て現実であったという保証はない。実際、あかりは魔女の接吻を受け、幻覚を見せられた。あの攻撃も、単なる幻覚に過ぎなかったのではないか。そう考えれば、納得のいくことだ。だが――

「南さん……本当に大丈夫？」

ふと我に返ると、マミが心配そうな顔であかりを覗き込んでいた。「無理をしないで。ゆっくり部屋で休んだ方がいいわ」

マミの言うとおりだ。とにかく今は体を休めなければ。明日も学校はあるのだ。制服は――予備があるから大丈夫だろう。

「すみません……マミさん。そうさせてください」

「そうね、それがいいわ。じゃあね、南さん――お大事に」

「はい、では」

マミに短く別れを告げると、結界の外に置いてあったために唯一無傷だったスクールバッグから家の鍵を取り出す。うまく力の入らない腕で鍵を鍵穴に差し込み、回す。カチャリ、という音とともに扉の鍵が開いた。

ふと横を見ると、マミがまだこちらを見つめていた。あかりは小さく頭を下げると、倒れ込むようにして部屋に入った。

数十分後。あかりは着替えもせずにベッドに寝転がっていた。窓の外では太陽もすっかり暮れ、少しずつ見滝原の美しい夜景も姿を見せ始めている。

改めて自分の右腕を眺めてみる。全体にかすったような赤い傷が

走り、肘と手首の真ん中あたりに一つ、浅い刺し傷がある。

『薔薇園の魔女』が放った針が突き刺さった部分だ。直径五ミリはあっただろう鋭い針が、確かにあかりの腕を貫通したのだ。この腕の真ん中に気味の悪い液体のこびりついた鋭い針が突き刺さって、あの時初めて体の自由が利かなくなるほどの痛みを感じた……

——いや、そういえば……

あの時、彼女の腕は、別の何かに変質していなかったか？ もっと醜い、不格好なものに。
怪物の腕に。

そうだ。あの時確かに、あかりの腕は光を放ち、灰色の鎧のような腕へと変化した。その腕は生身の腕よりも遥かに大きな力が出て、たった一回殴るだけで使い魔は粉々になった。しかも、あかりが憎しみをたぎらせる度に全身から銀色の光が走って、使い魔を蒸発させた……

——本当に、そうだった？

魔女の結界の中で起こったこと全てにどこか浮遊感があり、現実であると言い切ることができない。まるですべてが夢であった、と言われてもおかしくなくならない。だが、少なくとも今、南あかりは全身に傷を負っている。それは、間違いなく魔女の結界の中で受けたものだ。ならば、全て真実なのだろうか？ 魔女に大怪我を負わされたことも。自分の腕が何か怪物のようなものに変化したことも。自分の体から放たれた光が、使い魔を滅ぼしたことも。

自分はすでに死んでいた、という記憶も。

「そんな……こと……!!」

電気もつけていない真つ暗な部屋で、あかりは虚空に向かって叫ぶ。無論、虚空から返事が来るはずもない。ただ、夜の静かな沈黙が落ちるのみだ。何も動かない。何も音を発しない。しかし、頭の中ではいくつもの記憶がくるくると回り続ける。

全て、真実なのだろうか？

本当に、自分は死んでいたのだろうか？

じゃあ、この南あかりは誰なのだ？

——ボクは、誰？

分らない。

分らないから、あかりは、

だから、あかりは、

考えないことにした。

単純なる、思考停止。

あの家事の後から、あかりが身に付けた技術。
目を背ける。

逃げる。

聞こえは悪いかもしれないが、ずっとそうやって、自分への罪悪感から逃れてきた。

火事の責任は自分にあることを。

苦いまま終わってしまった、家族との別れを。

思い出さない。

考えない。

自分は悪くない。

自分は不幸なのだ。

そう自分に言い聞かせてきた。

考えなければ、悩むこともない。後悔に押しつぶされることもない。

最も単純にして最も効率的な、自分を守る方法。

だから、これからも。

里見ケイなどという人物は知らない。

ビルの屋上から身を投げた記憶などまやかした。

自分の腕だって、ずっとこのままだった。

南あかりは、あの魔女と相対して、軽傷で済んだ。

自分は幸運だ。

今まで不幸だったのが、報われたのだ。

そう自分に言い聞かせる。

後は、考えない。

だから、悩むのはこれでおしまい。

だって、考えてしまったら、一つの回答しか出てこないから。

自分は一度死んで、人間でないものになってしまったという回答しか。

使い魔を殴るだけで滅ぼし、体から発する光で蒸発させ、ふつう

では考えられないほどの自然治癒能力を持つ、別の何かになってしまった。そんな回答しか出てこないから。

そしてそれは、到底自分に受け入れられるものではないから。

だから、考えない。

「あーっ、そういえば夕食食べてなかったーっ!!」
不自然なほど明るい声を上げて、あかりはベッドから立ち上がった。

もう体は、自由に歩けるほど回復していた。

ついに”力”が目覚めた。

本来この物語に存在しえない、死と再生の力が。

まもなく、少女たちの物語は第一の転機を迎えるだろう。

まだ、夢の中の世界に過ぎない出来事が、

現実となつて迫り来るその時が。

少女たちは、それを正面から受け止められるだろうか。

それとも目をそらし、忘れようとするだろうか。

答えは未だ出ない。

ただ今は、その時目指して、

本能は疾走する。

ただ、それだけだ。

『——なるほどね。そうか。』
”あの種族”がまだ生き残っていた
とはね』

第6幕『ボクは、誰？』（後書き）

ダイナミック肩透かし。

あかり中盤は気絶しっぱなしでしたからね。

でももう、後あかりが覚醒するタイミングは”あの時”しかありませんよね。

さて、どうなるか……

ちなみに少しネタバレかもしれませんが、キュウベえは”あの種族”のことを知っています。

さて、もしお暇な時間がございましたら、次話も読んでいただければ。

感想評価誤字報告待ってます！！

お気に入り登録もじゃんじゃんどうぞ！！

ああ、我ながらあざとい……

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4011x/>

魔法少女まどか マギカ×オルフェノク-みんなで起こした、奇跡だよ-

2011年11月27日21時45分発行